三尺、奥行十五間五尺、敷地歩敷七十歩一厘、外ニ請添地六合六勺九撮、此ノ地子銀拾七匁八分四厘之ヲ家高ニ賦課ス、又目安場跡ナル白銀町ニ囚獄所ヲ新築ス、牢舎ハ三間半ニ六間、二重三間ニシテ三百十歩アリ、前十五歩ナリ、十二月二十九日、初メテ町奉行ノ屬吏タル詰番徒二人ヲ置カル、其勤務タル惟タ詰米、詰鹽ノ支配ノミニ止マリ他ノ行政上ニ關セス、又町下代ハ萬治以來一人ナリシニ增シテ二人ヲ置カル、是ヨリ以前ハ町奉行ニシテ郡奉行ヲ兼務シタルニ、以後ハ互ニ分立シタリ、

加賀藩、高岡の農民を郊外に移住せしむ、

〔高岡市沿革志〕　是歳、農商分業令ヲ發シ、市中ノ住民ニシテ農事專業ノ輩ハ之ヲ郊外ニ移轉セシメラル、今ノ横田村ハ乃チ其ノ移轉地ナリ、故ニ土人呼ヒテ新村ト稱ス、郡村中、獨リ横田村ノミニ限リ、町御印ヲ持シテ村御印ヲ有セサリキ、

高岡締綿市場を創設す、

〔高岡市沿革志〕　今年締綿市場ヲ創設ス、

神通川出水、

〔越中舊事記〕　寛文十一年、大水にて龜淵川除切れ、其外處々入川す、

寛文十二年壬子　紀元二千三百三十二年

冬、富山藩、始めて法を設け、米穀を四方港より大坂に輸送す、

〔前田氏家乘〕　十二年冬、初メテ四方港ヨリ輸出米ノ法ヲ設ケ、米一萬二千石ヲ大阪ニ廻送セラル、

寛文中　紀元二千三百二十一年より紀元二千三百三十二年まで

幕府、射水郡伏木に船改所を置く、

〔伏木商工會報告〕　寛文年間ニ於テハ幕府、大坂商況ノ衰態ヲ防ガントシテ、米穀ノ定期賣買ヲ爲サシメ、內國ニ十三港ヲ指定シテ船改所ヲ置キ、以テ商業ノ權衡ヲ保タントセシ時、本港ハ其一ニ加ヘラル、尙ホ中古前田侯ヨリ伏木ヲ米穀輸出ノ良港トシテ、礪波射水兩郡ノ貢米ノ幾分ヲ、大坂ニ於ケル加賀藩ノ御藏敞ヘ雇船ヲ以テ運搬セラル、尋テ當港ニ七間問屋ヲ設ケラレ、のとや、(藤井二株)つりや、(堀田二株)あみや、(引網一株)太田や、(壹株)西海や、(壹株之カ問屋トス、尙ホ內三間問屋ヲ置カル、のとや、つりや、あみやノ三家ナリ、然シテ本港ニ於ケル輸出入總テノ取扱ハ右問屋ノ外、取扱フコト能ハサリキ、文久二年ニハ特ニ藩許ヲ得テ、米穀肥料等ノ定期賣買ヲモ爲シ來リシカ、維新ノ際ニ船改所ハ廢セラレ、米穀ノ定期賣買亦之ヲ禁スルコトトナリヌ、

〔参考〕

〔憲令要略〕

條々

一公義之船は不及申、諸廻船共に遭難風時は、助船を出し、船不破損樣に成程可入情事、

一船破損之時、其所ちかき浦之者入情荷物船具等揚へし、其揚所之荷物之内、浮荷物は貳十分一、沈荷物は拾分一、川船は浮荷物三十分一、沈荷物貳拾分一、取揚者に可遣之事、

一沖にて荷物はぬる時は、着船之港におゐて、其所之代官、下代、庄屋出合遂穿鑿、船に相殘荷物舟具等之分可出證文事、

附り、船頭、浦之者と申合、荷物盗取之、はねたるよし僞申におゐては、後日に聞といふとも、船頭は勿論申合輩悉可被行死罪事、

一湊に長々船を懸置輩あらは、其子細を所之者相尋、日和次第早々出船いたさすへし、其上にも難澁は、何方之船と承屆之、其浦之地頭代官江急度可申達事、

一御城米廻之刻、船具水主不足之惡船に不可積之、並日和能節、船於令破損者、船主沖之船頭可爲曲事、惣而理不盡之儀申懸之、又は私曲於有之は可申出之、假雖爲同類其科をゆるし、御褒美可被下之、且又あたを不成樣に可被仰付之事、

一自然寄船並荷物、流來にをゐては揚置へし、半年過迄荷主於無之は、揚置之輩可取之、若右日數過荷主雖爲出來不可返之、雖然其所之地頭代官指圖を受へき事、

一博奕、惣而賭之諸勝負、彌堅可爲停止事、

右條々可相守此旨、若惡事仕にをゐては申出へし、急度御ほうひ可被下之、科人は罪之輕重にしたがひ、可爲御沙汰者也、

寛文七年閏二月十八日

延寶二年甲寅（紀元二千三百三十四年）

五月（甲子朔）

九日、（壬申）富山藩、領内に十村役六人、長百姓十六人を定む、

〔前田氏家乘〕 延寶二年五月九日、郡村農民中家系及ヒ資力ヲ選ヒ、十村役トシ、之レニ次クモノヲ長百姓トシ、十村役六人、長百姓十六人ヲ限リ、小松公ノ法ニ準シ郡治ノ制ヲ設ケラル、

七月 發亥 朔

七日、己巳、富山藩主前田利次卒す、子正甫襲く、

〔延寶錄〕 八日、松平淡路守昨日死去也、

十日、晴、松平淡路守屋敷江爲上使戸田伊賀守御香奠白銀貳百枚被遣之、

十日、松平伊賀守、同大藏少輔江、淡路守卒去之儀被仰遣之、

十日、女院御所江以宿繼松平淡路守卒去之儀被仰遣之、

九月四日、松平淡路守諸式、悴大藏大夫輔カ無相違被仰付之、

十一日、松平淡路守遺物、

左弘安御刀代金三十五枚、

御茶壺夏衣カ

御臺樣江

後撰和歌集爲相年、

右獻上ス、

〔御徒方萬年記〕 七月七日、於殿中松平淡路守利次、中風煩出し俄卒、五十八才、

〔御年表〕 延寶二年七月七日、富山侍從利次公、江戸殿中ニテ御頓死被成、七月

廿日御遺骸富山江被爲入、廿二日ゟ廿九日迄、於金剛寺御法事有、從公官御名代横山左右衛門被遣、爲御悔之御使者富山江神尾騖被遣、同氏淡路守不慮卒死之趣、及高聽候之處、御哀情之御事候、於其元驚歎之程、御察思召候、此由可相達之旨、依上意如此候、恐惶謹言、

七月九日　阿部播磨守　大屋但馬守

久世大和守　稲葉美濃守

松平加賀守殿

去九日之奉書、以宿次今日到來致拜見候、同氏淡路守卒去之趣達高聽、有難上意之旨甚々恐多儀奉存候、御請憚存候條、忌明以使札可申上候、恐惶謹言、

七月十三日　松平加賀守

稲葉美濃守樣　久世大和守樣

大屋但馬守樣　阿部播磨守樣

御臺さま仰にて候、松平あはち守殿御わつらひのまもなく、御しきよにて御いたゝしく覺しめし候、佐そ御のこりおほく覺しめし候はんとおし計らゝ、よくこゝろへ申せとの御事にて御さ候、かしく、

まへた　　むめ　おかの
もしま殿　　やしま　川さき

御文拜見いたし候、同氏あはち守卒去のむね、御臺樣御聽に達、忝御意のおもむき、其恐すくなからす、御請はゝかりに存候間、忌明御禮可申上候、かしく、

七月十四日　　まつ平
　　かゝ守
　　おむめさま　おかのさま
　　やしまさま　川さきさま

〔寛政重修諸家譜〕　前田（稱松平）利次（千勝丸、淡路守、侍從々四位下）松平肥前守利常か二男、母は台德院殿の姫君、元和三年加賀國金澤に生る、寛永八年十二月二十七日、從四位下侍從に叙任し、淡路守にあらため松平の御稱號をたもう、時に十四歲、十六年六月二十日、父の封國越中國婦負新川兩郡のうちにおいて、十萬石をわかちたまひ百塚に住す、萬治三年、こふて同國富山城にうつり、寛文元年五月朔日、天守をよひ櫓堀等を營築する事をゆるさる、四年四月五日、領知の御判物を下さる、十年五月廿七日、甲府之下臣太田十左衞門某、弟惣太夫某二人をめしあつけらる、延寶二年七月七日、營中にをいて俄に病を發し、退出するにより、上使を下されてこれをとはせられこの日卒す、年五十八、瑞巖良祥龍光院と號す、富山の光巖寺に葬る、十日、奏者戸田伊賀守忠昌をもて賻銀二百枚をたまふ、室は鳥居左京亮忠政が女、

正市掃部頭、近江守、大藏大輔、從五位下、從四位下、母は某氏、嫡母の養となる、慶安二年、富山に生る、寛文二年五月十日、はじめて嚴有院殿に拜謁す、時に十四才、十二月廿七日從五位下掃部頭に叙任し、八年十二月廿七日、從四位下に昇り近江守にあらため、九年正月、大藏大輔にあらたむ、延寶二年七月十日奉書もて父が喪をとはせ玉ふ、九月四日遺領を繼、十一日襲封を謝するのとき家臣五人御前に出る、この日父か遺物左弘安の刀をよひ夏衣と名つけし葉茶壺を獻し、御臺所に冷泉爲相筆の後撰集をまいらす、

〔前田（宮山）家譜〕　元祖利次、姓菅原、前田氏、小字千勝丸、宗國、中納言前田利常ノ第二子、元和三年四月廿九日、加州金澤ニ生ル、母德川氏、（大樹秀忠公ノ女）左京亮鳥居忠政

ノ女ヲ娶ル、實ニ菅相烝ノ苗裔ナリト云、寛永八年十二月、從四位下ニ叙シ侍從ニ任セラル、淡路守ヲ兼ヌ松平氏ヲ賜フ、十六年六月廿日、越中ニ分封十萬石ヲ賜ハリ、婦負郡百塚村ニ築城ノ許可アリシニ既ニメ果サス、十七年十月、富山ニ姑ク徙居ス、既ニ爾時百塚待從ト曰フ、萬治三年、富山城ニ確定ス、寛文十年五月、太田十左衛門（甲府宰相重綱卿ノ臣、岐守太田正成ノ長子、）同苗總太夫（正成ノ兄、）三郎、ノ兩人、弊藩ニ託セラル、延寶二年、飛越封境ヲ爭フテ決スル能ハス、之ヲ幕府ニ訴フ、飛ノ城主金森某、私ニ貨賄ヲ官司ニ行ヘ、利次ハ然ラス、親舊ノ老中ト相見、飛越爭境ノ談ニ及フ毎ニ輙チ曰、金森某境界ノ言ノ如キハ、則吾カ先人利常賜フ所ノ地圖ト異ナリト、宗國綱紀ニモ亦告ケ曰、飛越爭境ノ事如此ノミ、請フ之ヲ察セヨト、故ニ幕府、此ノ事件ニ於テヤ處置甚タ難ンズト、是ノ年七月七日卒ス、享齢五十有八、謚シテ龍光ト曰フ、越中婦負郡長岡ニ葬ル、（累世墳墓皆此ニアリ、）女梅、右衛門大夫水野忠春ニ嫁ス、初メ利次既ニ富山ニ住スルノ後、始メテ金澤ニ詣リ、父利常ニ謁見存問セリ、時ニ一老臣某、利次ニ謂テ曰、越中ノ俗古ヨリ治メ難シトス、然ルニ臺下能之ヲ治ム、利次曰、余ノ越中ヲ治ル生鳥ヲ攫スル如ク然リト、蓋シ利次ノ意政治ニ於テ緩ナラス、急ナラス、其節ヲ失ハサルヲ謂ナリ、居恒菅公ヲ尊崇ス、一日便室ニ在リシ時忽チ壁上ニ菅公畫像現出ス、威貌儼然、夢醒メテ宛然猶目ニアリ、既ニシテ封内ニ遍ク布告シ所藏菅公畫像ヲ出サシム、時ニ數百幀聚ル中ニ就キ、唯淨禪寺出ス所ノ柘榴尊影ノミ夢現ト小異アルナシ、蓋シ法性房尊意自ラ寫ス所ナリト云フ、因テ某寺中ニ神祠ヲ創立セリ、新川縣管下富山柳街天滿宮是ナリ、

正市小字掃部、利次ノ第二子、母柴田氏、（臣以信ノ妹、）慶安二年八月二日、富山ニ生ル、寛文三年十二月、從五位下ニ叙シ掃部頭ニ任セラル、七年十二月從四位下ニ叙シ大藏大輔ニ任セラル、時ニ尚世子タリ、是ノ月近江守ト改ム、四年九月、東台山防火使ヲ命セラル、（防火使後之ヲ罷ス、）九年正月、大藏大輔ト復稱ス、延寶二年九月封ヲ襲フ、（下略、）

〔前田氏家乘〕

此ノ年七月七日、公江戸城中ニテ頓ニ御發病アリ、平川口ヨリ御下城即日薨去アラセラル、御齢五十八、目付役小出甚左衛門、奏者番戸田伊賀守ヲ使トシテ、將軍ヨリ御香典銀二百枚ヲ送ラル、二十日御柩ヲ富山ニ奉送シ、婦負郡長岡山ニ御墓所ヲ設ケ葬儀アリ、謚號ヲ龍光院殿前拾遺從四位下瑞巖良祥大居士ト曰フ、夫人烏居氏通稱宗子、慶安元年六月八日卒去、享年二十三、謚號ヲ寂照院殿雲峯宗奇大禪定尼ト曰フ、江戸下谷廣德寺ニ葬ル、繼室通稱不知、

子、川鯰三位基秀卿ノ女、夫人卒去ノ後富山ニ迎ヘラル、之レヲ新宅殿ト稱ス、公ノ薨去後延寶四年秋歸京セラル、五年三月七日卒去、享年不詳、諡號ヲ蓮池院殿妙香日盛尊尼ト曰フ、京都千本通泉藏坊ニ葬ル、○中略公幼ニシテ江戸邸ニ在リ、屢々大樹ノ營中ニ到ラセラル、一日本郷邊ノ民家火ヲ失スルノ報アリ、近從ノ士皆還リテ在ラス、大樹俄ニ公ニ歸邸ヲ命ジ左右ヲシテ之ヲ送ラシム、此ノ時乙鳥ノ槍、朱柄ノ傘、赤革ノ障泥、黑絹輪紋付ノ羽織、桐油ノ沓籠覆ヲ鹵簿ノ具ニ附セラル、之レ皆德川家ノ具ニシテ他諸侯ノ用フルヲ得サル所ナリ、後公御分封セラレ之ヲ使用シテ常備ノ具トセラル、即チ是レ我藩ノ格式トナル濫觴ナリ、又江戸邸新築ニ際シ利常公ヨリ特ニ贈與セラルルモノアリ、玄關ノ唐破風唐戸上檀造ナリ、此レハ秀吉公造築セラレシ聚樂亭ヲ利常公ニ賜フ所ノ材ナリ、故ニ其工造他諸侯ニ異ナリ、是レ又一格式ヲ成スト云フ、御家寶物頗ル多シ、相傳フ御分封ノ際、小松御寶藏之内一棟拜領シ玉ヒ、其ノ重ナル所ハ鯰魚尾ノ御兜、刀劔類、鄕義弘刀等四陣錦ノ御旗、懸幅類、猿額面類、古錢類、茶器類也、公御分封ノ後始メテ金澤ニ詣ラセラレシヤ、老臣某曰ク、越中ノ俗古ヨリ治メ難シトス、然ルニ公能ク之ヲ治メ玉フハ如何セラルル乎ト、公曰ク、越中ヲ治ムルハ生鳥ヲ

攫ル如クスヘシト、公兵學ハ御宗家長臣本多氏臣、大橋玄可ヲ召サレ楠流ヲ學ハセラル、又二木守良、御小性組ニテ北條流軍學ニ練達スルヲ以テ、亦其ノ事ニ關スト云フ、公時ニ和歌連歌ノ道モ嗜マセラレ、且ツ頗ル御能書ナリ、○下文明月廿五日、小松天神の祠を建て、連歌百韻を擧行せしこと、梅樹天神を夢みし事等を敍す、既に前に收めたるを以て略す、

正市公御幼名ハ利勝、利昌、利虎、利隆、利義、利之、季久、掃部ト稱ス、利次公第二公子也、慶安二年八月二日富山ニ降誕セラル、御生母柴田氏、名ハ八尾、臣柴田以信ノ養妹也、降誕後近藤善右衞門ニ下シテ傅育セシム、寛文二年四月八日始メテ江戸ニ到リ、五月十日大樹ニ謁見セラル、時御齡十四才、三年十二月廿七日從五位下ニ叙シ、掃部頭ト稱シ、松平氏ヲ稱ス、此時例ニ據リ禁裏ヘ黃金一枚、仙洞御所、新院女院、親王、女御ヘ銀三枚宛ヲ獻セラレ、其ノ他各局雜掌ニ到ルマテ、銀錢若干ヲ贈與セラル、七年十二月二十七日從四位下ニ叙シ大藏大輔ト稱ス、是ノ月近江守ト改メ、九年正月大藏大輔ト復稱ス、三月中川佐渡守久恒ノ妹、通稱英子ヲ娶ラン事ヲ幕府ニ請願セラレ、幕府之ヲ允許ス、四月十八日御婚禮ノ式アリ、十二年五月始メテ富山ヘ還城セラル、延寶二年七月七日利次公薨去、大樹ヨリ喪中御尋ノ書ヲ賜フ、八月江戸ニ到ラセラレ、九月四日、御家督アリ十一日繼目ノ御禮

アリ、長臣富田縫殿、近藤主計、村隼人、奥村藏人、瀧川玄蕃等謁見ス、冬、太刀一腰銀馬代ヲ獻ス、

利次（幼名千勝丸）

利常公第二公子、元和三年四月廿九日加賀國尾山（後チ金澤ト稱ス）ニ降誕、寛永十六年六月廿日越中國百塚城主ニ分封セラレタレ𪜈、築城セスシテ富山城ニ居ス、延寶二年七月七日薨ス、享年五十八、

長女梅子

寛永十七年十二月九日降誕、萬治三年十二月十九日水野忠春ノ室トナル、延寶五年六月二日卒ス、享年三十八、

長男千勝丸

寛永十九年九月十四日降誕、二十年五月十四日卒ス、享年二、

次男正甫

慶安二年八月二日降誕、寛文二年五月十日世子トナル、

八月（壬辰朔）

是より先、飛驒越中兩國境界を爭ふ、幕府長田平右衞門、佐脇傳右衞門を派して撿分せしめ、是日、之を裁決す、

〔御代々取調要書〕　延寶二甲寅年、飛州越中山堺論、山見分上使長田平右衞門殿、佐脇傳右衞門殿登山裁判左之通、

飛驒國荒城郡（吉城郡に作るものあり）小豆澤村、索ヶ谷村、三河原村、角川村、二ッ屋村と、越中國婦負郡桐谷村、布谷村、荒谷村、須江村國堺論之事、爲撿使長田平右衞門、佐脇傳右衞門被指遣候、見分之處、桐谷村より くふす村高に結ひ有之由雖申之、中に小屋之證據慥に在之候條、小屋を取拂畑可荒之、金山之義、桐谷村よりは卅余年以前よりは掘候由雖申之、まふ數年掘候樣不相見、其上飛驒越中兩國之以繪圖遂穿鑿之處、論所の山、飛驒の繪圖には相見得、越中の繪圖には無之、旁以桐谷村申處非分に候條、飛驒の百姓理運申付候、依而爲後鑑、繪圖面東方小豆澤村八丁下兩國堺之石塚より、そや原、平之尾通、くふす、北之谷、しろきか峰より、西之方境谷、金剛嶽之峰通墨筋引之、評定之面ニ加印判、國堺相定、繪圖一枚宛双方へ下置候條、永不可違失也、

延寶二寅年八月二十二日

甲斐庄喜右衛門印判御勘定頭
德山五兵衛同　同　斷
杉浦内藏允同　同　斷
宮崎若狹同　町奉行
島田出雲同　右　同
本多長門在所暇寺社奉行
松平伊賀同　同　斷
阿部播磨同　御老中
土屋但馬同　同　斷
久世大和同　同　斷
稲葉美濃同　同　斷

〔前田氏家乘〕　延寶二年、飛騨越中國境ヲ爭フ、之ヲ幕府ニ訴フ、布谷村渡邊佐五兵衛等江戸ニ拘引セラル、飛騨城主金森某、私ニ貨賄ヲ幕府ノ官司ニ行フ、公江戸ニ在セラレ、屢々越中ニ出デ其ノ國境ノ事ヲ老中等ト論議アリ、爲メニ幕吏其ノ處置ニ苦シムト云フ、○中略是ヨリ先八月廿二日、幕府老中等連署ヲ以テ越飛國境ノ爭論アルニ際シケレハ、長田平右衛門、佐脇傳右衛門ヲ檢使トシテ、往テ檢分セシメシニ、桐谷村ヨリクフス村高ニ小屋ノ證據トナルベキ者アリキ、又金山アリ、桐谷村ヨリ採掘セシト見ユルモ、數年來復タ採掘セサルカ如シ、飛騨越中兩國繪圖ヲ閲スルニ、論所ノ山ハ飛騨國圖中ニ在リ、故ニ飛騨百姓申立ノ越至當トセリ、後鑑ノ爲メ、東ノ方小豆澤村八町下兩國域ノ石塚、コヽヤ原、平ノ尾通リ、クフス、北ノ谷、白ラ木ガ峰ヨリ、西ノ方境谷、金剛嶽ノ峰通リヲ國境ト指定シ、繪圖ヲ添ヒ示達云々ヲ下達セラル、是ニ於テ論地局ヲ結フ、

〔内山舊記〕　延寶二年、飛州輪知山、御檢地、澤井傳右衛門、小佐田平右衛門、江戸ヘ御越ニ付、山屋道作リ人足二萬餘人出ル、

〔參考〕

〔前田家記錄〕　御初代利次公御世、延寶二甲寅年春頃より飛州高山城主金森出雲守より、飛州と越中との國界なる山論を出訴せし處、其論所分明ならす、依て利次公の仰には、宗國父利常より分封の際、詳細なる地圖を附與せられたるに、此訴訟萬一勝敗難決時は、父利常の汚名たるに依り、白髮頭に兜を頂く事も や出來せんと、殿中にて御同席等へ御對話あらせられ候由、則延寶二寅年七月

七日の事なりし、○下略

是月、正甫、藩士に令して諸法度を守り素行を誡めしむ、

〔前田氏家乘〕　八月、公御直書ヲ以テ下命セラル、其ノ要ニ曰ク、從前先公定メ置カレシ諸法度ヲ堅ク相守ルヘシ、藩士粗暴ノ所行致ス間敷樣頭々ヨリ嚴示スヘシ、郡中町方嘗テ定メ置カレシ成規ノ通リ相守ルヘシ、政事細目ハ寄合所示談ニ屬スヘシ、藩士若シ一已ノ意ヲ立テテ專恣ナル者アラハ、屹度頭ヨリ上申スヘシ、寄合所ノ面々一和百事議ヲ盡シ、公論ヲ以テ極メ開申決ヲトルヘシ、

是秋、富山藩、領内の凶作なるを以て租減す、

〔前田氏家乘〕　秋大風、米作ヲ害ス、爲メニ收納米七千五百石ヲ免除セラル、

〔内山舊記〕　延寶二年、諸國惡作にて、其暮引免として、七千五百石御用捨被遊候、

〔越中舊事記〕　其秋凶作にて、翌年之夏、飢人多シ、同年凶作之上、風損にて御用捨米、惣御郡にて七千五拾石餘有之、

〔宮永由緒記〕　松雲院樣綱紀公御代、延寶二年、加能越三ヶ國共大凶作に付、同三年之春、三州之百姓一統種子籾所持不仕、彼岸に至り種子池入可仕方便無之に付、潤色有之、長百姓江、種子籾之餘計有之候哉と御尋之處、宗右衛門、手前に早稲より晩稲迄之種子餘計之籾七十石餘、貯罷在候段御注進申上候得者、御感之上、右之籾不殘被召上、加越能之窮民江御配當、其年之苗代江蒔入被仰付候、同年四月、於御算用場御奉行方御列座を以、此度御大切之御用ニ相立申儀、被達御聽候處、於御上甚御感被爲成候段被仰渡、右種子籾七拾石餘之價ヒ御米三十五石餘、於小矢部御藏被爲下之、爲御褒美御題紙を以白銀頂戴被仰付候、

〔參考〕

〔高畠舊記〕

去年凶年ニ付、御領國中之米、雜穀、他國他領江一切出申間敷候旨、相談候條被得其意、各御支配中江急度御申渡可有縮候、自然違背於有之者、曲事可被成候間、彌被入念尤候、勿論浦方肝煎、問改人江御申付、出船つよく致吟味候樣に、可有御申渡候、若違背候へハ、浦方肝煎、問改人同罪ニ候、各御披見之後、名之下ニ令判形候而落着、

正月十二日御印　　御算用場

郡勘三郎殿

大島甚兵衛殿
石野五兵衛殿
樋口宇右衛門殿

態以飛脚致啓上候、其御地彌御堅固ニ可被成御座と珍重奉存候、
一當所去年耕作不熟仕候ニ付而、百姓共致難儀候、先年者越中ニ而米相調申上候へ共、去年者御領分も不作故、他國へ米御出候事、御法度之由承知仕候、御無心之儀ニ御座候へ共、越中御領分之内ニ而、米千石相調候樣ニ被仰付可被下候、尤少分之儀ニ御座候間、下ニ而相調申樣ニ仕度奉存候へ共、右之仕合ニ御座候故、扨如此御座候、被仰付被下候者可忝候、
一當國茂住之金山之儀、古來より御領分之商人米入商賣仕候處、是又御法度故重て米入不申、山仕共及難儀申候間、前々之通ニ賣買仕候樣ニ被成可被下候、奉願候、
一飛騨半國者、越中より鹽入來候處ニ、至當春、白川と申處へ鹽入不申候ニ付、此方之百姓共越中ニ而相調申候處ニ、御領分赤尾村より通し不申難儀仕候、是又前之通ニ被仰付可被下候、外之口々江茂、雪消次第ニ鹽入申樣ニ奉願候、恐惶謹言、

三月晦日

金森兵庫
金森將監

本多安房樣
參人々御中

去月晦日之御飛札、致拜見候、各御堅固之由珍重存候、然者去年其御領内不作ニ付、百姓共及難儀候、先年者越中ニ而米御調候へ共、去年者當領も不作故、他領へ米不出ニ付、越中領内ニ而千石相調候樣被成度候旨、致承知候、如來意當領も不作故、領國中救申儀ニ付、以之外緩ニ爲登申候故、大坂者登リ米も少分之御用候へ共難調候、且又茂住金山へ米商賣之儀、右之仕合故難申付候、鹽之儀者、跡々通致商賣候樣ニ、支配人共江可申渡候間、左樣ニ可有御心得候、恐惶謹言、

四月四日

本多安房

金森將監樣
金森兵庫樣

延寶三年乙卯 紀元二千三百三十五年

三月 己未朔

三十日、戊子、富山大火あり、一千數百戸を燒き延て城中に及ぶ、

〔前田氏家乘〕 三年三月二十九日、西田地方細野稱左衞門火ヲ失ス、會々南風猛烈、火全市ヲ焚キ、餘火城中ニ及ヒ殿宇米廩ヲ燒ク、午前ヨリ酉時ニ到リ千數百戸ヲ燼滅ス、

〔高安舊記〕 延寶三年壬三月晦日、富山大火事、此年天下一統大きゝん、御領分百姓中へ燒米多借受申候、

〔富山市沿革志〕 延寶三年二百二十一年前 三月二十九日、西田地方細野稱左衞門ノ長屋ヨリ出火ス、偶々南風烈シクシテ千數百戸ヲ燒キ、餘火城内ニ及ヒテ殿宇ヲ燒キ、三ノ丸赤藏燒ケテ米四千石許ヲ灰燼ニ委セリ、(迴回ノ罹災ヲ細野燒ケ亦災ニ罹リタリト云フ、)東西兩升形門モト稱ス、

四月 己丑朔

七日、乙未、富山町復出火、數百戸を焚く、藩主金を賜ひて罹災の士を賑ふ、

〔前田氏家乘〕 四月七日、中村孫市又火ヲ失シ數百戸ヲ焚ク、公藩士ノ再度火難ニ罹リシヲ憐ミ、祿百石ニ對シ金五兩ノ比例ヲ以テ、金ヲ賜ヒテ救恤セラル、

蟹江主水、石川與左衞門辭シテ受ケス、

七月 丁亥朔

正甫、江戸の浪士渡邊佐次右衞門を聘して砲術を興し、婦負郡北代村に大砲の發火演習を行ふ、

〔前田氏家乘〕 七月御歸城アリ、曾テ江戸ニテ聘セラレタル、浪士渡邊佐次右衞門ヲ火術ノ師範役トシ、始メテ大砲ノ發火演習ヲ婦負郡北代村ニ施行セラル、公親臨シテ藩士ヲ奮勵セシメラル、

延寶四年丙辰 紀元二千三百三十六年

正月 甲申朔

二十日、癸卯、加賀藩内、村肝煎の給米額を定む、

〔租稅志〕 延寶三年七月十一日、是ヨリ先キ村肝煎ノ俸一定セス、或ハ田畠ヲ以テシ、我ハ銀ヲ以テスル者アリ、本年ニ至テ均シク米ヲ以テ之レニ給ス、其金

額ヲ二分シ、其一ヲ村高ニ、其一ヲ戸數ニ賦課セシム、明年正月二十日村高ノ多寡ニ由リ、肝煎給米ノ差等ヲ立ツ、今表ヲ作リテ一覽ニ便ス、

村高	百石以上	三百石以上	六百石以上	千石以上	二千石以上
給米	一石五斗	三石	四石	五石	七石

右給米ノ賦課前年ノ如シ、惟他村ヨリ掛作ノ百姓、本村家無キ者、及扶持人、十村、寺社、山廻、鳥見、鹽相見人ハ其戸ノ賦課ヲ免ス、八月更ニ肝煎ノ給米差等ヲ定ムル事、左表ノ如シ、

村高	給米	村高	給米
五十石未滿	一石五斗（山村ハ五斗ヲ增ス）	八百石未滿	五石五斗
百石未滿	二石（山村前ニ同シ）	千石未滿	六石
二百石未滿	二石五斗（山村前ニ同シ）	千五百石未滿	七石
三百石未滿	三石五斗	二千石未滿	七石五斗
五百石未滿	四石五斗	二千石以上	八石

其賦課頭振ハ、一戸二升ヲ出サシメ、其餘ヲ三分シ、其二ヲ村高ニ、其一ヲ百姓戸數ニ課ス、若大村（按大村ト云ハ射水郡鷹栖村高三千六百石餘ノ數ヲイフ、郡下村高三千七百石餘、礪波郡ニテ肝煎二人ヲ置ク者ハ、其給米ヲ二分シ、各自ニ之レヲ給ス、村肝煎ノ給米宿方（宿方トハ驛ヲイフ）ハ、運搬外ノ頭振ハ、一戸二升ヲ出サシメ、其餘ヲ二分シ、一ヲ百姓頭振ヲ問ハス、運搬每戸前面ノ間數ニ、一ヲ草高ニ課ス、浦方（浦方トハ瀕海輻湊ノ地ヲイフ）草高寡ク、若クハ無高村ハ、權役五枚ヲ一戸ニ充テ、又現戸數ヲ通算シ、十戸ヲ以テ高百石ト看做シ、賦課スルナリ、以上改作所答申、郡廳事通載、）

〔參考〕

〔年代記〕　延寶四年辰、村肝煎、幷走リ給米、改作所ノ詮議之上定法極る、

是春富山藩、領内の人口を調査す、

〔前田氏家乘〕　四年春、封内人口ヲ調査セラル、藩士家族、男三千八百七十七人、女三千八百十六人、商家族、男三千八百七人、女三千八百三十三人、農家族、男四千四十五人、女四千四百九十五人、僧七百四十四人、神官十七人、山伏四十二人、貧民四百二十九人也、

延寶五年丁巳（紀元二千三百三十七年）

八月（乙巳朔）

二十五日、己巳富山藩、城を修築す、

〔前田氏家乘〕五年八月二十五日、富山城修營ノ許可ヲ得テ起工アリ、

秋、大風稻を害す

〔前田氏家乘〕秋、大風害ヲ爲ス、收納米三千九百石ヲ、翌年ニ延納ヲ許サル、

是歲、高岡町奉行の邸宅を築く、

〔高府安政錄〕

高岡町奉行官邸

延寶五年、町奉行武藤半左衛門、國府助右衛門在任中、高岡市街中片原横町ニ於テ、初テ建築作事奉行本保孫八郎、岡島六之丞、其後町費自普請ニ候處、安政元年寅九月、町奉行太田勘左衛門建議ニ據リ、舊ニ復シ藩制作事所直轄ニ成ル、但官邸二棟、邸前用水橋二ヶ所、

〔參考〕

〔高岡開闢由來〕

一慶長年中、高岡御奉行初

六千石　小塚　淡路殿

故肥前守樣御逝去以前、金澤江御歸、

御城代

一萬石　岡島　備中殿

五百石　鈴木權之助殿

三百石　土方市右衛門殿

二百石　河合　數馬殿

同　林小左衛門殿

同　杉山　小介殿

百五拾石近藤　久米殿

七百石　有賀　左京殿

下代　小塚次郎兵衛　岸本與左衛門

故肥前守樣御逝去以後、御奉行無之ニ付、此六人ハ玉泉院樣附、兩人宛御支配、

千二百石西村右馬助殿

町御郡共三百石　今井左太夫殿

下代　大方田嘉兵衛　田屋吉兵衛

町御奉行　西村右馬助殿

町御郡共四百石　市川長左衛門殿
町御奉行　西村右馬助殿
町御郡共七百石　郡平八殿
下代久田源丞
西村右馬助殿
有山忠左衛門殿
町御奉行
下代大屋兵左衛門　岩田吉左衛門
町御奉行二千石　伊藤内膳殿
目安場建　千四百石淺賀左京殿
町並　伊藤内膳殿
目安場　本保嘉右衛門殿
下代石場久左衛門　中野太左衛門
承應元年八月病死
伊藤内膳殿
七百石　不破勘六殿

萬治元年六月病死　四百石　古江次右衛門殿
下代石橋久左衛門　大野與兵衛
伊藤内膳殿
二千石　近藤新左衛門殿
百五拾石澤村長兵衛
同　長田新兵衛
下代石橋久左衛門　大野與兵衛
伊藤内膳殿
二百五十石林重左衛門殿
下代石橋久右衛門　大野與兵衛
又下代初而立　村木三郎右衛門
七百石　長原七良右衛門殿
伊藤内膳殿
町與力　伊藤内膳殿

是迄、御奉行御役人、御役替年月相知不申候、

萬治二年九月御役替
承應元年役入

林重左衛門殿

二百五十石　小塚覺左衛門殿

下代右三人

鷲田太兵衛
芝木惣兵衛
高木半兵衛
中村七右衛門

此四人切米二役
而留役取次役
御奉行へ兩人宛附事

小塚覺左衛門殿

二百石　齋田彦助殿

萬治三年役替
九月同役入

二百五十石　上村八左衛門殿

萬治三年役入
九月同役入

同　千田與右衛門殿

延寶四年十二月兩人役替
寛文四年役入
寛文四年十二月役入
同九年月寛文四病死

下代石橋久左衛門
村木三郎右衛門

又下代渡邊太左衛門

上村八左衛門殿

有澤孫作殿

延寶四年十二月役入
貞享元年九月役替
延寶四年十二月役入
貞享三年四月病死
貞享元年十月役入

下代石橋久左衛門
寛文十年病死
村木三郎右衛門

桑原十左衛門

寛文十年八月役入

又下代渡邊太左衛門

武藤半左衛門殿

三百石　國封助右衛門殿

村木三郎右衛門
天和元年八月病死

下代桑原十左衛門
天和元年十一月役入

又下代山口喜兵衛
渡邊太左衛門
延寶五年九月役義被召放

國封助右衛門殿

六百石　辻又三良殿

下代桑原十左衛門
山口喜兵衛
元祿三年十二月役替

辻又三郎殿

靈元天皇延寶五年

貞享三年七月役入
元祿七年四月役替　四百石　大窪半兵衛殿
下代桑原十左衛門　波邊彌五大夫
元祿四年四月役入

元祿八年七月役替　辻又三郎殿

元祿七年七月役入　六百石　石川主計殿
下代如前

元祿八年八月役入
寶永六年五月役替　五百石　岩田平八殿
下代如前
桑原助右衛門
元祿十三年正月役入

寶永二年六月役入
正德二年八月病死　石川主計殿

八百石　荒木六兵衛殿
下代桑波邊彌五郎
桑原助右衛門

正德三年九月病死　石川主計殿

正德二年十一月役入　四百五拾石　今村喜太夫殿

正德三年十一月役入
享保元年十二月金澤江御歸　五百石　今村喜太郎殿
下代桑波邊彌五左衛門
桑原十左衛門

岡田助七良殿
下代桑波邊彌五大夫
桑原十左衛門

今村喜太夫殿

享保二年正月役入
同三年十月病死　五百石　笹島善太夫殿
下代如前

享保三年十月ゟ同十二年七月迄九年之間御一人ニ而御勤
同十一年五月役入
同十四年五月病死　今村喜太夫殿
山村五兵衛殿
下代右兩人

享保十五年八月役替　今村喜太夫殿

同十四年七月役入　六百五十石　岡田元右衛門殿
下代右兩人
岡田元右衛門殿

享保十五年八月役入　四百石　別所忠兵衛殿

靈元天皇延寶五年

享保十九年十月役入
寛保元年十一月病死
同二十一年二月役入　八百石　下代　波邊彌五太夫、桑原助右衛門
享保十九年四月病死
桑原十左衛門
岡田元右衛門殿

奥村兵左衛門殿
波邊彌五太夫
元文二年二月病死
下代　桑原十左衛門
千田喜平次
享保二十一年四月二十四日役入

右喜平次義、町附足輕ニ而留書役被仰付置候所、御用方全相勤候旨ニ而、右兩御奉行所、御郡町下代ニ被仰付候、

寛保二年三月御指除
同二年正月役入　下代　桑原十左衛門
千田喜平治
波邊平太夫
元文二年二月役入
奥村兵左衛門殿
澤田次兵衛殿
下代　右三人

右兵左衛門殿、寛保二年七月二十四日夜、金澤御口小堀左平殿ヨリ飛脚到來ニ

而、翌廿五日朝六時御越、町奉行役御取揚、

寛保二年四月役入　四百五十石　下代　桑原十左衛門
千田喜平次
澤田次兵衛殿
波瀨彌次右衛門殿

右喜平次義、寛保二年四月二十四日、御扶持可被召放旨、本多安房守殿ゟ御紙面到來、則次兵衛殿御貸家ニ而被仰渡候、

寛保二年四月被召上
波邊平太夫

下代　桑原十左衛門
波邊平太夫
竹田半兵衛
寛保二年六月役入

右半兵衛義、町附足輕小頭ニ而有之候處、右御奉行喜平次、代リ御願被仰付候、一下代中、御扶持米一人ニ御公儀ゟ五俵宛、町中ゟ三十俵宛、一町中ゟ、暮收役料壹人ニ銀五枚相渡、

加賀藩、借銀を爲す、

〔年代記〕

延寶五年巳、御郡方御かり銀有之、但御かり銀始、○中略延寶七年未、町方御郡方又御かり銀有、此後廢らる、○中略天保二年戌、○戊は卯の誤御かり銀被仰出候へとも、上申者無之、

延寶六年戊午　紀元二千三百三十八年

三月　辛丑朔

三十日、庚午、富山藩、婦負郡民、安右衞門及ひ其一族を死刑に處す、

〔婦負郡黑田尋常高等小學校報告〕　安右衞門ハ婦負郡黑瀨谷村大字小長谷村ニ生ル、後杉原村大字大杉村ニ移リ居ヲトシ、杉原野用水今杉原用水ヲ開鑿シ、杉原野ヲ開拓セシカ、故アリテ老母ヲ除キ一家七人死刑ニ處セラル、今本村大字城生村本長寺ノ過去帳ニ記スル處ヲ拔萃スルニ左ノ如シ、

延寶六戊午三月晦日、一家主命ニヨリ死刑ニ處セラル、

改戊名

一法看　安右衞門又覺右衞門　一玄意　小三郎又山三郎

一運正　十助　一幻曉又玄曉　勘三郎

一運心　善兵衞　一玄智　吉三郎

一幻空　又六又又次郎

元祿四年七月十一日死去

一妙超　安右衞門老母

而シテ其死刑ニ處セラレシ所以ニ付、口碑ノ傳フル所ハ左ノ如シ、

安右衞門ノ妻ハ頗ル容色アリ、藩主ノ奪フ所トナル、安右衞門憤怨措ク能ハズ、即チ家族ヲ率キテ强訴セシカハ、藩主大ニ怒リ、老母ヲ除キ一家七人ヲ死刑ニ處セラレタリト、

〔本法寺大過去帳〕下晦日之部

延寶六年午三月　法看親子七人死刑被行　小長谷

玄意　小三郎　玄智　吉三郎　運正　十介

運心　善兵衞　幻曉　勘三郎　幻空　又六

當寺檀那也、別ノ可同向、

是春、富山藩、貸與米の制を設く、

〔前田氏家乘〕　六年春、前年延期ノ納米、民力堪フル能ハサルヲ以テ、貸與米ノ制ヲ設ケラル、

是夏、旱す富山藩内の稻被害多し、

〔前田氏家乘〕　六年、夏炎暑酷烈ニシテ稻田大ニ損ス、因テ米二百六十石ヲ救恤シ、四千石餘ノ延納ヲ許サル、

九月　己亥朔

綱紀、法度八十二條を定め、領内の村肝煎をして、毎月二回村民を集めて之を讀ましむ、

〔富田覺書〕

八十二條井御高札、

一上樣御荷物船之儀ハ不及申、他國諸大名衆荷物船破損又ハ逢難風候節御馳走仕候儀、彌油斷仕間敷候事、

一津留津入其外諸事、御定之通彌相守可申事、

一御領國百姓中、其外遊民公事沙汰ニ付、目安之儀ハ如先規之、其組之十村別書を以郡奉行迄可上之、假令直に言上仕度儀有之與言共、自今以後ハ村肝煎十村肝煎迄書付可出候、但肝煎手前之儀を於申上ハ、郡奉行、改作奉行迄書付出し可申候、右兩奉行江斷におゐては、御算用場江可申上候、御算用場之者に對し申上る品有之者、大見附迄書付可出候、右之役人指置直に訴狀等於上之者、不構理非、急度可被行曲事に旨被仰出候事、

一十村非分有之旨、御扶持人十村迄小百姓斷有之儀を隱置、於後日に禮成相聞候は、御扶持人十村可爲越度事、

一徒成百姓申立にも成間敷儀を、公儀を掠申、百姓之手前は其組之十村御扶持人吟味仕、御郡奉行江可申斷候、律儀成百姓公儀恐可申上儀をも不申上者は、十村御扶持人見聞之通、御郡奉行迄可申聞事、

一公事沙汰に不成儀を、徒者とそひをこい下持仕、出入に爲致、書付上け申者、本人ゟは下持仕者大罪に候間、曲事可被仰付事、

一諸百姓申分之儀不依何事、給人方江申斷間敷候事、

一百姓走り可申躰見聞候は、早速村肝煎、組合頭江申聞押置可申候、若押置事難成候は、近所之村肝煎申聞、近所之者罷出押置可申候、假令走り可申旨申合候者に而も、其趣申顯候は、御褒美可被下候、走り百姓有之旨申斷候所に、村肝煎不罷出候は、急度曲事可被仰付候事、

一御領分之外、他所之商賣鹽入申間敷候、勿論御國之者たりと言共、他所之鹽入

申間敷候事、

一御郡中ゟ女年季奉公に他國江遣候義は、郡奉行請指圖、其上に而十村請縮可仕候事、

一人形廻踊子、一夜に而茂宿貸申間敷候事、

一他國之座頭、舞廻等無放者に宿貸申間敷候事、

一在々之儀口は、無筋者に一夜宿を貸申間敷候事、

但驛々之儀は、二夜共泊り候は、請人取可申候、勿論一夜泊りに而茂、夜行仕候者には、心を付見屆不屆仕合有之は、押留可及案内に事、

一從跡々有來らす、異形諸勸進御停止之事、

一博奕ヶ間敷儀一圓仕間敷候、惣別賭諸勝負不依何事に、跡々より堅く御停止之事、

一在々百姓、并頭振、他國江壹人も遣申間敷候、日用に被雇參候共、他國に居留り不申樣、一類等も急度可申付事、

一從跡々他國江參候者、十村致吟味、其一類に申渡、呼返可申候事、

一奉公人暇を貰、日用取、頭振に成候者、曲事可被仰付候、但引籠作を仕義各別之事、

一在々百姓、并頭振、男之分人數、一ヶ村切ニ十村帳面ニ記可置候、但十歳成候者記置可申事、

附、男女當歳年より、宗門御改之帳面ニ可書上事、

一惣而男女他國江遣申間敷候事、

一紙并楮、油種他國江遣候は、此方江斷可申候、自然於隱遣者、可爲曲事候事、

一御郡中於浦方、船貸候者は跡々之通請人取可申候、當分ニ而モ請人取不申船ニ乘、欠落人有之候は船貸置主可爲越度事、

一御郡之者御領分、御關所、大聖寺口留、罷通候ニ付、跡々之通、彌郡奉行江相斷、通切手取可申候、無斷罷越後日に顯れ相聞候は、勿論可爲越度事、

一在々火之用心如跡々申渡互に令吟味、炭灰等置所入念可申候、若無沙汰之仕合有之、大事出來におゐては可爲不屆事、

一往還筋之儀ハ勿論、何連之附爲通筋旅人相煩、其所ニ於令逗留は致介抱、住國委細に相尋、可及案内に候、若令死去候は、死骸其儘置、早速郡奉行迄可申斷事、

一馬一疋ニ口引壹人宛付可申候、壹人して馬數追申間敷事、

一馬追申刻馬之口を取可申候事用所調申節は竊置可申候口離し申間敷候附馬口を取道中馬に乗申間敷候事、

一御郡中諸百姓金銀米錢加利足貸物仕間敷候買物に仕成品を買月延抔に勿論仕間敷候事、

一小百姓は不及申御扶持人十村長百姓たりと言共常々振舞の着合仕間敷候神事式非禮年忌式娶嫁取聟禮義之刻成程輕く可仕事、

一十村御扶持人其百姓共より給人幷侍町人江音信等仕義無用但し藏宿仕者方より知行米預被下面々江各別之事、

一不依誰々往行之刻宿主たりと言共送迎仕間敷候御用之儀又は斷有之者には罷出候は各別之事、

一惣而御用に付罷下候人々宿無滯可申付勿論御應抔參候節ハ犬猫繰き可申事、

一諸御奉行江對其外惣而作法惡敷慮外仕間敷候事、

一御用之儀に而手先御奉行より書狀等驛送村送ニ仕間敷候事、

一宿馬無滯樣可申附事、

一寺替宗門替仕候は其組之十村江致案內十村より此方共申聞其上ニ而替可申候附新法抔勿申者有之候共聞入申間敷候若左樣之者有之候は早速十村江斷早々郡奉行江可申聞事、

一後生願候共耕作持の手樣不成樣勿論無費樣ニ願可申候事、

一御郡ニ御支配ニ新寺幷道心寺爲作申間敷候事、

一他國之者自然欠落致抔當御領分江罷越於隱置は後日に顯候は同罪に可被仰付候事、

一御郡中在々ニ而酒飴其外菓子榮耀之賣物爲賣申間敷候但し驛方幷往還筋之分は右之賣物店賣仕義は不苦候事、

一煙草本田畑ニ作候義跡々之通彌御停止之事、

一新顏之酒屋愈御停止之事、

一御郡地ニ牢人住居仕度旨申者有之ハ百姓相對を以住居爲致候は御定之通請人家主此方共江申聞其上ニ而住居可爲致候事、

一切支丹宗門御吟味逢末々之者死去跡々之儀可斷筋目間違不申樣可仕候事、

一往還筋之公儀橋破損有之は御郡奉行被罷通候節其道請取之十村幷橋有之

地裁許之十村之内より、令相談置早速可相斷、附り兼々損不申樣ニ、道番人近在々之者に、可申渡置事、

一所々、御收納、御藏、幷同中出し御藏作喰御藏令破損候はゞ、毎年五月中ニ裁許人、或十村方より此方江可相斷事、

一往還筋百姓方より掛候橋損候は、早速令修覆候樣、請取之者可申付事、

一伊勢辺參り不致樣兼々可仕候、親兄弟親類主人不存令參宮者、早速十村迄可相斷事、

一他領と之境塚、惡敷成は其組十村より可及案内候、其境之他領奉行江申遣候、双方立合令修覆事、附第一他領之者と御領之者と、申分無之樣ニ常々嗜可申候、此段十村共毎々可申聞事、

一船持幷商人他國江罷越借銀仕、其所之者より及斷、公儀江御苦腦ニ掛不申樣ニ常々可申渡事、

一他國幷他領之者ハ不及申、御國之者又は御郡ニ而始而其在所江引越居住仕者ハ、慥成請人爲相立、其在所處之百姓搆無之ニおゐては、十村指圖を以居住可致候、勿論此方江茂案内可仕事、

一他領幷他國之者と、御領分之者と、緣組仕間敷事、

一從跡々申渡通在々諸百姓、頭振、浦方人驕爲儀不仕、農工家職を專ニ致、身代持立る樣に、常々心懸、諸事無油斷はけまし可申事、

一家作ハ自今以後貳間、梁庇ハ六尺ニ過へからす、高多持候百姓、土之間廣仕候義ハ不苦、幷往還筋人宿仕者は各別之事、

一長押作、杉戸附書院櫛形欺物、組物一切無用、床縁戸さん框塗り候義、幷唐紙張付堅令停止之事、

一衣類之儀、跡々御定之通、木綿布其外着用仕間敷候、但十村幷御扶持人之儀は男女共紬御免許之事、

一向後、百姓之衣類男女共紫類ニ不可染、其外諸色無形染可着用事、

一百姓食物、常々雜穀可用、米猥に不食事、

一惣而諸鳥死有之候所見付候ハ、拾取早速此方江案内可仕事、

一往還筋道、最前御奉行道作立、其以後右道御奉行御取上、重而此方共支配被仰付候間、道請取之在々より、常々致修覆損不申樣可仕候、打捨置若及大破候は、其道請取在所肝煎組合頭可爲越度候、勿論堀を廣道を狹於申置ハ、急度可爲

不屆事、
一十村御扶持人、惣而百姓男女共、乘物一切御停止之事、
一郡中ニ罷在、頭振ニ成ハ、此方江案内可仕事、
附手前死目、頭振ニ成御郡ニ罷在候は、何方ニ罷在候段可申斷事、
一浦方驛方ニ被建置、高札之面、遠背仕間敷事、
一御郡里方山方浦方ニよらす、出來家望申者於有之ハ、其村手先、十村を以斷之上ニ而家造可申候、勿論他之裁許他之者抔、地を下し家爲造候儀是又及斷、此方共指圖次第ニ可仕事、
一往還道、大破ニ不及樣ニ常々道番人ニ可申付事、
一八拾歳ニ及者有之候は、前年十二月十日切に、十村奥書之通帳面可出事、
一九拾歳、八拾歳之者、令死去候は、十村より早速可及案内ニ事、
一病死之外替リ爲死去人有之候ハ、早速其十村ヨリ可及案内事、
一他國他領ハ不及申、御領分之内ニ而モ、替爲儀有之候ハ、其近所亦は近在所より十村江令案内、十村より此方江早速可申聞事、
一於途中、死人亦ハ自害人、附在々ニ而茂、左樣之者有之ハ、死骸等其儘置此方江十村方より可及案内事、
一御鷹師宿之儀宿々に而茂戸障子天井等縮能家兼々定置、番々ニ宿可申付事、
一所々御旅屋、并御餌刺宿も常々可申付事、
御收納御藏、同中出御藏、鹽御藏、作食御藏、近所大事之節、大雪、又ハ盜人有之刻、罷出候村々人々最前出し置帳面之通、彌々無油斷樣ニ十村共方より可申付事、
一驛々村々火之用心堅可申付事、
一春二月より宿々之儀ハ、番小屋を掛、晝夜番人無惰怠爲廻可申候、附家々ニ天水桶を上掛、桶水を張、圓座建置可申候、勿論宿々在々火事有之は、人馬損候を其品委細時々書附を可出候事、
一被下置候種馬惡敷不成樣、常々可申渡事、附駄馬ニ付候數被下置、主ヨリ毎年五月晦日切ニ帳面ニ記取、十村より可出候、勿論種馬之當歳生候は、駄主より之委細帳面ニ記取、毎年十月廿日切ニ十村共より可出事、
一御郡ニ、鹿見江候共、追申間敷候事、
一御林并持林持山ニ而モ、七木并雜木ニ而モ、此方江無斷壹本茂爲伐申間敷候

事勿論、居垣根七木、雜木、同斷之事、
一御郡中之者、召遣候男女共請人を取可召仕候、若請人無之召仕候義、相聞候は可爲越度事、
一就御用、村送并驛送之儀候は、無滯早速送可申事、
一御用并御郡締以下之儀ニ付、十村共より申渡義候ハ、違背仕間敷候、但非分申掛候は、此方江可及斷事、
一御郡中より、他國江參候者、如跡々請人之書付、十村奥書を以出之、拙子共より通切手取罷越相滯候ハ、早速其十村より書付を以、可及案内事、附女は御扶持人奥書可致事、
一往還筋、驛々在々町中に馬を繼き、其外致干物等出し、道を狹申間敷事、
一從跡々被仰出御法度之品々、此方より申渡趣、頭書を以申渡候條、可得其意候、此外にも御法度之儀可有之候條、勿論急度相守可申候、則頭書之趣、村肝煎手前ニ寫置候而、毎月兩度宛よみ候而、村中百姓、頭振、下人、亦ハ孀、座頭、瞽女ニ至迄能々可申聞候、其上ニ而モ、合點參兼候者には、肝煎口上ニ而、常々可申聞候、尙於以來、右之頭書不承候、迚而ハ、若御法度之品相背者有之ハ、肝煎組合頭、曲

可申付者也、

延寶六年九月　日

石黑源左衞門
山村市十郎

新川郡
御扶持人中
同郡
十村中

十二月（戊朔辰）

二十一日、（戊子）兩藩、封境を再査して標石を築き、領民證書を交換す、

〔内山舊記〕　右者、萬治三年、淡路守樣江加賀守樣、御替地之刻、御領御境目相極、境塚爲御築双方江御繪圖御取替置被成候處、境塚の内破損仕分、去年多賀治郎右衞門殿、吉田安兵衞殿、山村市十郎殿、郡勘三郎殿、御出修理被仰付、勿論御境目替地無御座候得共、當夏又右安兵衞殿、多賀治郎右衞門殿、石黑源左衞門殿御出候て、所より畔入込申、田境并先塚間遠きヶ處御見圖之上、双方納得を以增塚爲

御築被成候、先年御取替置被成候御繪圖には、御境目通は朱筋、又は川切にて塚記無御座候ニ付、御境目之地曲直ハ御座候得共、只今改御繪圖直しかたく御座候故、先年御繪圖朱引之上に、右之塚數丸を記し申候、勿論是已後塚損申候はゝ、互に斷修理可仕候、總塚數此紙面之通り相違無御座候、幷赤江川、常願寺川、熊野川、此三川、御境之義ハ御領替之刻より川切にて御座候、若已後入川、川崩に罷成候共、跡々仕來り申通り、川除用水共可仕候、依而後日證文如件、

延寶六年十二月廿一日

加賀守様御領

中嶋村、栗田村、粟島村、下赤江村、上赤江村、上赤江新村、田中村、篠浦村、綾田村、双代村、東本郷村、西長澤村、石金村、中市村、山室江新村、太田本郷村、新口村、西番村、三室荒屋村、此外村々在り、

大藏大輔様御領

奥田下新村　五右衛門

西川原等五拾七ヶ村

右連判紙面之通り、御領境村々百姓共、幷其品才許之十村、拙子共罷出、御境目通り見屆、先塚破損仕分修理爲致、其上處々より增塚爲築、先年御境地替之時分爲取替置候繪圖に、塚數記置候處相違無御座候、以上、

十村文珠寺村　彦三郎
十村　黒崎村　三郎兵衛
十村（新庄村）　庄左衛門
十村（石田村）　九郎右衛門
十村　布瀨村　孫兵衛

（十村理右衛門相煩）

石黒源右衛門
山村市十郎
多賀治郎右衛門
吉田安兵衛

（御境塚）

下も村々迄、七拾九有之候、

是歳、加賀藩、租米三万石を江戸に廻漕す、

〔租税志〕　延寶六年、租米三萬石ヲ江戸ニ漕運ス、之レヲ江戸廻米ト曰フ、（袖裏雜記）

補綴　元祿四年、二萬五千石ヲ輸ル、大抵年々五萬石ヲ踰ルコト無シ、（改作方定書、改作方雜留、〇抄）

大津登米、江戸廻米共ニ起原年歴未々詳ナラス、

婦負郡外輪野を開拓す、

〔前田氏家乘〕　六年婦負郡外輪野ヲ開拓シ養水ヲ通シ、新田千九百五十石ヲ得、

〔富山御領舊事略〕　外輪野開拓

一高千九百五拾八石餘

此高、元祿六年杉原野村茂右衞門申上、御公儀樣々用水普請被仰付、近在幷方々ゟ相願開出來仕候、仍之今市村又右衞門跡高茂右衞門江被下候、

延寶七年己未　紀元二千三百三十九年

霖雨、稻田を害し諸川漲溢、堤防の破損頗る多し、

〔越中記〕　七年、一大惡作、夏大出水ニテ、金替川除切、此年惡作、幷ニ出水樣々御用捨米、凡五千九百石餘、其暮十村共方ヘ里子二人宛相渡、鐵炮狹ミニ仕候得共、御收納濟切不申候、五千四百石餘、春延米ニ相成、此年者大水にて布瀨村川除切込、井田川筋も悉切損申候、

〔前田氏家乘〕　七年秋霖陰數旬、稻田腐敗シ救フ可カラズ、納米五千四百石ヲ延納セシメ、五千九百石ヲ免除ス、又風損雨害アリシカバ、納米五千四百石餘ヲ免除シ、五千四百石餘延納セシム、

〔越中舊事記〕　延寶七年、御領分凶作、夏、中宮、水出、野倒、布瀨井、田邊川除切れ、其外處々打込候而過分之水損、

〔高安覺書〕　延寶七年、惡作大水、下黑瀨村不殘皆川ニ成ル、

十月　癸亥朔

富山藩士の秩祿半納の制を設く、

〔前田氏家乘〕　十月、藩臣ノ秩祿半納ノ制ヲ設ケ、又歩上ゲノ制ヲ示サル、千五百石ヨリ六千五百石マテ八歩、四百五十石ヨリ千四百石マデ六歩、二百五十石ヨリ四百石マデ二歩、六十石ヨリ二百三十石マデ一歩ノ比例トスルコト、

十一月　壬辰朔

八日、富山藩、藩士を扶助するため、除米の法を定む、

〔前田氏家乘〕　十一月八日、藩士ノ窮ヲ扶助センカ爲メ、三百五十石以上ノモノ、錢一貫目ニ對シ三石五斗、百九十石ヨリ三百石マテ三石、百五十石以下ハ二

斗五斗ノ除米ヲ定メラル、

十二月 壬戌 朔

正甫、藩士に令して儉素を奬む、

〔前田氏家乘〕　十二月、制度ヲ立ラル、其ノ要略ニ曰ク、藩士ノ面々作事堅ク停止ス、不得已向ハ頭ヨリ上申スヘシ、衣服ハ小性馬廻手廻射手ハ、紬木綿八講布着ス可シ、羽織袴之レニ準ズ、組外以下ハ木綿布ノ外着ス可カラス、葵梅發ノ徽章アルハ此ノ限リニ非ス、武器馬具ハ堅全ヲ旨トシ、虛飾ニ流ルル勿レ、年忌等ニハ親戚ノ外參會スベカラス、

是歲、正甫、遊船を造り、神通川に浮ふ、

〔前田氏家乘〕　延寶七年、遊船ヲ造ラル、船体倨色塗ニシテ、白帆ヲ附シ、出獵遊歡ノ具トシ、神通川ニ浮ブ、

延寶八年庚申 紀元二千三百四十年

七月 戊子 朔

二十五日、壬子、連日霖雨、各川出水、堤岸を破壞し、稻田を害すること多く、米價騰貴す、

〔前田氏家乘〕　八年、狂風暴雨交々至ル、河川漲溢、水損夥多、是ニ於テ農民ノ内特ニ撰擇シ後見人ト稱シ、十村役ノ者ト共ニ、各村ヲ巡視セシメ、實地ヲ視察シ民人ニ說諭シテ貢米ヲ納メシメ、其ノ損害ニ罹リシモノニ一萬二千二百石ヲ免除ス、

〔越中舊事記〕　延寶八年七月二十五日、神通川、常願寺川等、諸川一時ニ大水ニテ、島黑瀨、龜淵、馬瀨口、其外所々河除切込、水込田畑ヲ押流、富山御城下過半水也、

〔越中史略〕　同八年七月、神通常願寺等の諸川洪水田畠を流亡す、米價騰貴して一石に付五十七匁四分乃至六十二匁餘に至る、

〔越中記〕　八年も大惡作、其上實入濟大風吹候に付、御領内の見立御用捨米一萬二千二百石餘、此暮里子相渡不申候、其詳細は百姓共下人同事にて、鐵炮挾みに致したる義、輕縮り申由にて、十村其内布瀨村孫兵衛には、下懸尾村の彌右衛門を其後見、宮尾村宗右衛門には上井澤村の玄順後見、砂子田村四郎右門には大塚村四郎兵衛を後見に仰付候、西本郷村德兵衛、石田村九郎右衛門、住吉村嘉左衛門には後見不被仰付、隨分御役嚴敷御座候へ共、主濟切不申候、依而十村安養坊村四郎右門、御公儀へ吉田安兵衛樣、多賀治郎右衛門樣、被仰上金澤江被仰

道、三ヶ國ハ御廻リ不成、加賀澤村に止り申候、金銀錢等の初穂は富山神主江被爲下候事、

是歳、礪波郡芹谷用水を通ず、

〔射水郡櫛田尋常小學校報告〕　芹谷野用水ノ起源ヲ按スルニ、往古射水郡内中郡ト稱シ來リシ地ハ、常ニ灌漑水充分ナラス、旱ノ歳ニハ農民殊ニ災厄ヲ蒙リ收穫ヲ損スルコト頗ル多シ、時ノ改作奉行、常ニ之レヲ憂ヒ救濟方法ヲ嶋村九郎兵衛ニ謀レリ、九郎兵衛奮然コノ大業ニ熱中シ、遂ニ一大路ヲ鑿堀シ灌漑ノ用ヲ滿サントシテ、思ヘラク、庄川上流ヲ導キ、礪波郡芹谷野ヲ開墾シテ之ヲ引カバ、地高段ナレハ峯傳ヒニ流下スベシ、斯クセバ開拓田地ヲ多ク得ラルル上ニ峰傳ノ爲メ、右用水自然ニ川ノ左右ニ落水シ、東ハ和田川西ハ針山用水ニ流レ入ルベシ、最下流亦射水郡八幡川ニ落水スルヤ必セリ、然ルトキハ中郡ノ地用水自然ニ供給ヲ滿スヲ得テ、農民滿足ヲ得ルナラント、御村廻リノ際御見分然ルベク、尚右御思召立タルルニ於テハ、芹谷野ハ礪波郡ノ地ナレハ、當地ニ關係アル戸出村又八ヲ開主附ニ指加ヘラレタシ、然ルニ於テハ、庄川東緣一口御取揚堀立候テモ指構ヘコレナシトノ意見ヲ言上セリ、藩之レヲ容レ、寛文三年右用水御堀立、仝四年ヨリ新開方島村九郎兵衛、戸出村又八ニ任命アリタリ、爾後兩名斯命ヲ奉シテ怠ラズ、同年ヨリ延寶八年マテ十七年間、努力奮勵、遂ニ新地四千四百餘石ヲ開拓シテ用水ヲ通シ、新建二十四ヶ村ヲ開キ、尚用水取組ノ内ニテ、古高ヘ相渡スベキ無役高三百二十石、古高替水相渡スベキ分千三百十石、外ニ射水郡ノ内古高替水折返シ高ヘ相渡スベキ分五百四十石、都合六千五百七十石ノ用水ヲ取入レタリ、仍テ其ノ賞トシテ九郎兵衛ニ以上村々裁許ヲ命ゼラレ、御收納米御藏入代官ニ仰セ附ケラレ、且ツ其勤勞ニヨリ兩人共白布二卷ヲ受賞セリ、

天和元年辛酉　紀元二千三百四十一年

正月　丙辰朔

四日、己未、淡紅色の雪降る、

〔前田氏家乘〕　天和元年正月四日朝、淡紅色ノ雪降ル、

五月　癸丑朔

十八日、庚午、幕府の巡見使富山に來る、

〔前田氏家乘〕　五月十八日、幕府ノ巡見衆、大關勘右衛門、内藤十之丞、目付長根

左兵衛、吾富山ニ來宿、供人都テ百五十人、瀧川圖書旅宿ニテ接待ス、十九日出立、

〔年代記〕　天和元年辛酉、巡見上使、大關勘右衛門殿、本村十之丞殿、中田佐兵衛、六月十三日劒御宿、

〔下新川郡下中島尋常小學校報告〕　天和元年辛酉六月十六日、大關勘右衛門中瀨左兵衛、內藤勘丞、巡見上使トシテ來ル、

七月　壬子朔

二十一日、壬申、大風雨、稻を害す、

〔前田氏家乘〕　七月大風樹木ヲ拔キ石ヲ飛ハス、吏員ヲ派遣シ田畑ノ損害ヲ點檢シ、其害甚タシキモノハ其米價ヲ評定セシメ、十村役立會シ平均價格ヲ定メシ上、石代金上納ヲ免サル、罹害數一萬千二百石ナリ、此外延期納ヲ免セラレシモノ六千九百石余、

〔越中舊事記〕　天和元年七月二十一日、大風作毛白枯ニ相成過分ノ風損、

〔高安覺書〕　天和元年ノ秋、大風惡作、

二十六日、丁丑、正甫幕府の命を奉して越後高田城を收む、時に富山の豪商、吉野屋慶壽資金を獻す、

〔前田氏家乘〕　七月朔日、老中連署ヲ以テ、近衛中將越後守高田光長罪アリテ其ノ封ヲ收メラル、依テ上使ハ松平日向守、秋元攝津守ニ命セラル、榊原式部大輔、牧野駿河守ト共ニ往キ、七萬石ノ軍役ヲ以テ、其城ヲ收ムヘシトノ台命アリ、即日返翰ヲ發セラレ、十九日富山御出陣、先勢足輕四組、長柄五十本、士二十五騎、此ノ日浦山ニ泊ス、二十日ニ市振ニ、二十一日長濱ニ、二十二日春日山ノ麓ニ陣ス、後勢ハ旗十本、鐵炮百三十挺、弓二十張、長柄二十本、旗本ノ士五十騎、此ノ日三日市ニ泊シ、二十日堺ニ、二十一日能生ニ、二十二日中屋敷ニ陣ス、後勢ハ足輕三組、長柄五十本、士三十騎、此ノ日魚津ニ泊シ、二十日浦山ニ、二十一日糸魚川ニ、二十二日小田村ニ陣ス、總勢三日滯留、二十六日曉天月城ノ南面　陣シ、公自ラ城中ヲ閱シテ撤セラル、此レ御分封以後始メテノ出師ナリ、

〔越後高田騷動記〕　延寶九年七月朔日巳刻、江戸ゟ六月二十八日の早飛脚、富山へ到着也、堀田筑前守にをへて、久德三郎大夫へ御奉書御渡に付、右御奉書御文言曰、

松平越後守領知被召上之付而、爲上使松平日向守、秋元攝津守被仰付候、高田城爲請取之、其方榊原式部少輔、牧野駿河守爲在番、水野隼人正、溝口信濃守被

仰付候間、被得其意以七萬石之役高可有勤仕候、罷越時分之儀者、追而可相達候、委曲日向守、攝津守可被任指圖候、恐々謹言、

六月二十八日　　阿部豐後守正武判
板倉內膳正重道判
堀田筑前守正俊判
大久保加賀守忠朝判

松平大藏大輔殿

右爲御請、以富田彌五作被仰達候、彌五作、朔日夜子の刻、富山を發足候、御請狀曰、去月二十八日之御奉書今日到着致拜見候、松平越後守領知被召上之付、高田城爲御請取榊原式部大輔、牧野駿河守、爲私在番、水野隼人正、溝口信濃守被仰付之候間、奉得其意以七萬石之役高可相勤之候、且亦委細可任日向守、攝津守指圖之由、奉得其意候、恐惶謹言、

七月朔日　　松平大藏大輔

阿部豐後守殿
板倉內膳正殿

堀田筑前守殿
大久保加賀守殿

貴報

一御家中、諸物頭、何茂御城へ呼之、右の通申達候也、七萬石之御軍役は、騎馬百十騎、鐵炮貳百挺、弓五十張、長柄百筋、旗棹十本、

一今度、御人數三備に御分可被成候、道中も三段に御立候而、先陣、中陣、後陣と御定、何茂同日發途、二三里程間を置候而、可有止宿候、先陣は村隼人相守之、跡は相構申間敷候、中陣は御旗本、後陣は瀧川圖書相守之可申候、圖書儀は畫之御休夜之御宿へも可參由被仰出、路程二三里茂隔り候はゝ、畫の御休泊へは難勤由申上候處、左候はゝ後陣は淺野五郎左衛門、三輪彌市右衛門縮等可申談、候、圖書儀は道中御旗本御供可相勤由、被仰出候事、

一細野九郎右衛門、小島六左衛門、淺野十兵衛、高田迄十六七日之頃御先へ被遣、津田平四郎殿、中根主税殿受御差圖御丁場請取之事、

一高田へ御越御供中、御定書かた、

定

一常々如申付置候、公儀の御定を守可申事、
一別紙に定候通、三組之手合に相極候、其趣を守頭々之可受差圖事、
一今度之儀、萬端不可有滯儀候、且は對公儀、且は自分之勤聊私迄を不可存候、尤
　喧嘩口論停止之事、
一道中行列之儀、別紙記之候通、無相違可相守之事、
一お船渡、來行人之下知を可相守、若違背在之は、急度可申付事、
一道中至宿々、少も非分を申懸間敷事、
一馬方に對し非分を申懸間敷事、
一道中調物之品、押買停止之事、
一道中宿々、火の用心堅可申付事、
一至高田、諸事猥無之樣可相心得事、
一道中幷於高田、如何樣之儀不慮出來候共、其頭よりの下知なふして、自分の働
　有之間敷事、
一高田逗留中、他之者と不可相交事、
一於高田、晝夜火之用心不可有油斷事、若出火有之者、其處一組之者、他組より不

可相構、但其頭より指圖次第たるへき事、
一惣而如何樣之不慮候共、其組へ克申合不可騷、人馬之騷動は、別て他之見所不
　宜候事、
一粮米費無之樣、可相心得事、
一高田之儀者不及申、其外於所々、竹木伐取申間敷事、
一高田逗留中、用心之外參會停止之事、
右條々堅相守之、若違犯之輩在之は、可爲曲事もの也、

七月十九日

道中行列如左下、○此の下、第三は後勢なり、從行の藩士は高田城を收むるときの列に在るものと同し、故に今悉く略す、

此通御先勢也、七月十九日寅の刻、富山發足、此日浦山に止宿、二十日市振、二十一日長濱、二十二日春日山の麓參着也、○此の下、旗本の行列を叙す、
此迄御本陣之行列なり、十九日巳の上刻、御駕、此日三日市御宿、二十日境、二十一日能生、二十二日酉の刻中屋敷へ御着也、○此の下、後勢の行列を叙す、
此通御跡勢なり、九月十九日、午刻發足、其日魚津泊、二十日浦山、二十一日糸魚川、

二十二日小田村參着也、

一二十二日中屋敷御着、巳の刻松平日向守殿へ爲御案内、道中迄御使者被遣之、明日荒井村迄日向守殿御着の由、松平攝津殿、荒井と高田の間に御座候故、是亦御使者被遣候、中根主税殿、津田平四郎殿、蒔田八郎左衛門殿、中坊長兵衛殿高田に御座候故、是亦御案内被仰達候、高木善左衛門殿、坂本右衛門佐殿へも、御使者被遣候事、

一榊原式部大輔殿、牧野駿河守殿へも中屋敷より御案内、且又鶴姫君樣御縁組之御事、御奉書にて殿樣、式部殿、駿河守殿、御一紙來候故、御請御調被成て被遣候、式部殿は同町、駿河殿は春日新田に御止宿之事、

一二十四日午刻荒井村松平日向守殿御旅宿迄何も御寄合せ、是は二十六日高田城御請取之時分、諸事被仰談可有之付て、二十四日辰の下刻、殿樣中屋敷御發出也、何も御手廻の御供人にて、御越之筈に候得共、殿樣、高田御通に付、鐵炮十挺、弓十張、長柄十本、御引馬五疋被召連候、荒井より十五六丁此方在家に、鐵炮、弓、長柄なと御差殘し、御手廻の御供にて荒井へ御越也、御裝束は御羽織袴の事、

一荒井村へ御着、直に日向守殿御亭へ御越、何も御對面、追付御退出也、御供瀧川圖書被召連、日向守殿御亭に御殘置候、式部殿御供は村上彌右衛門、伊藤長十郎、柴田六左衛門、駿河殿御供は山本勘右衛門、牧野頼母、稲垣八郎左衛門、水野隼人正殿御供には、鈴木志摩、大野數馬、溝口信濃守殿御供には、溝口内匠、速水逸角也、何も御退去以後、圖書儀最初に日向守、駿河守殿、其外、御目付衆御列座へ被召出、二十六日、高田の城へ御寄場の品、繪圖書に被仰聞候事、中屋敷御發觸の刻限等、御書付にて被仰渡候事、殿樣よりは津田平四郎殿へ被仰談候樣にと、日向守殿御申渡也、委細御覺書左に記也、

人數寄場前後の次第

一番卯の上刻　秋元攝津守
二番右の下刻　坂本右衛門佐　高木善左衛門
三番卯の下刻　松平大藏大輔
四番辰の下刻　松平日向守
同　同　斷　榊原式部大輔
同　同　斷　溝口信濃守

五番辰の下刻　　牧野駿河守
同　同　斷　　水野隼人正

右者止宿發足の刻限

一惣人數引入候儀は、日向守、攝津守方より、何もへ、一左右可申事、
一松平大藏大輔、人數御引拂候以後、日向守人數引候事、
右之通被仰渡候、已後重て左之通御書記御渡候事、

三の丸

一大手見付番所組多門共に　物頭一人　足輕三十人
一作事小屋之口　足輕二人
一千人夫長屋之口　足輕二人
一裏門南之虎口番所　物頭一人　足輕二十人
一東喰違門　足輕三人
一鹽硝倉　物頭一人　足輕十　人
一三の丸御請取已後、右之通番人指置候儀に可相心得候、次に日向守殿、圖書へ

御申候者、先刻大藏殿へ申達候へ共、若御失念も可有哉、城御請取已後、大藏殿
ハ岡嶋壹岐宅へ御入候筈之間、可得其意由被仰渡候、圖書罷立候已後、式部殿、
駿河殿、隼人正殿、信濃守殿御家來、段々に御呼出之、被仰渡品々有之事、
一荒井へ何も御寄合之節、津田平四郎殿は高田に御殘候故、圖書荒井より罷歸
刻、平四郎殿へ立寄、荒井にて之御樣子申述、是亦二十六日之儀とも申談罷歸
候事、
一二十六日寅之刻、中屋敷御發足、高田之城南虎口辰の上刻御着也、道中行列如
左、
右備

小頭　玉藥箱　持　弓　指物棹　鑓　草履取
鐵炮二十挺　若黨數　林助八
小頭　玉藥箱　具足櫃　甲　立　鑓　草履取

小頭　玉薬箱　小頭　玉薬箱

二番　鐵炮二十挺　奥村平馬　連人同上　三番　鐵炮二十挺

小頭　玉薬箱　小頭　玉薬箱

石川與三左衛門　連人同上　四番　鐵炮二十挺　桑原次郎右衛門　連人同上　五番

小頭　玉薬箱　小頭　玉薬箱

小頭　玉薬箱　小頭　玉薬箱

鐵炮二十挺　佐々伊左衛門　連人同上　六番　弓二十五張

小頭　玉薬箱　小頭　矢箱

小頭　具足櫃

西尾五左衛門　連人同上　七番　長柄五十本　佐藤四郎左衛門　連人同上　八番

小頭　指物棹

若黨　鑓

蟹江宇右衛門　日比小兵衛　連人同上　野村又兵衛　供廻り次第上同　連人以前ニ同事　鈴木彌市郎　同

若黨　草履取

櫻井吉左衛門　同　水野八郎右衛門　同　鈴木平左衛門　同　藤縣兵助　同

森澤與三左衛門　津田甚右衛門　石黒平兵衛　櫻井久之佐
同　同　同　同

田部吉兵衛　吉田五郎兵衛　水原岡右衛門　宮口甚右衛門
同　同　同　同

長谷川七右衛門　鱸清左衛門　池上無兵衛　三宅茂左衛門
同　同　同　同

山崎又兵衛　國府八右衛門　渡部小左衛門　堀部長左衛門　笹原十兵衛
同　同　同　同　同

中村孫助　森新兵衛　杉村彌助　江町市郎右衛門　柘野五郎右衛門
同　同　同　同　同

木村平左衛門　栂園之助　鐵炮　長柄　具足櫃　若黨
同　　弓　長柄　甲　立　指物棹　刀筒　若黨　若黨　若黨　若黨

若黨　持鑓　草履取　具足櫃　持鑓

蜷江主水　若黨同前　岡崎半右衛門

若黨　草履取　甲　立　草履取

柴垣彌兵衛（連人同）　小牧市郎右衛門（連人同）　今枝彦兵衛（同）　加藤助右衛門（同）

小塚新九郎（同）　成田安之丞（同）　不破覺右衛門（同）　富田左平太（同）　細野彌左衛門（同）

木村瀨兵衛（同）　加藤新八（同）　木村茂左衛門（同）　堀源右衛門（同）　外岡三郎右衛門（同）

鐵炮

高山甚左衛門（同）　井上新九郎（同）　吹田忠右衛門（同）　松田九郎兵衛（同）

弓

長柄　具足櫃　若黨　若黨　若黨　指鑓　草履取

指物棹　刀筒　若黨　山崎豐左衛門　若黨

長柄　甲　立　若黨　若黨　草履取

裁許　具足櫃　使番　持鑓　使番

太鼓　貝　若黨（以前二人同事）　佐藤次兵衛　青木又兵衛（連人同）

指物棹　草履取

鐵炮五挺　玉薬箱　弓　玉薬箱　弓　矢箱　長柄五本　引馬三疋　具足櫃　甲立　筑棹　刀筒　指物棹　脇指筒

長刀　若黨數人　持鑓　草履取　村隼人　供騎馬二騎　持鑓　草履取

左備

小頭　玉薬箱　持弓　指物竿

鐵炮二十挺　若黨數　生田四郎兵衛

小頭　玉薬箱　具足櫃　甲立

鑓　小頭　玉薬箱　小頭

二番　鐵炮二十挺　河村彌三右衛門（連人同）　三番　鐵炮二十挺

鑓　小頭　玉薬箱　小頭　玉薬箱

玉薬箱　小頭　玉薬箱　小頭

玉薬箱　淺尾藤太夫（連人同）　四番　鐵炮二十挺　秋山志摩（連人同）　五番

玉薬箱　小頭　玉薬箱　小頭

玉薬箱　小頭　矢箱

鐵炮二十挺　生田源右衛門　連人同　六番　弓二十五挺

玉薬箱　小頭　矢箱

小頭

大竹十郎左衛門　連人同　七番　長柄五十本　淺野彌五左衛門　連人同　八番

小頭

具足櫃

不破治郎左衛門　連人同　堀田平右衛門　連人同　若黨　前ニ同　赤尾三右衛門　供廻リ次第上ニ同連人數前ニ記ニ同

指物竿

奥村李左衛門　同　堀田喜左衛門　同　浦上又右衛門　同　關三郎左衛門　同

山田七郎右衛門　同　赤尾覺太夫　同　楢林小助　同　笠井嘉兵衛　同　不破儀右衛門　同

松坂彌二右衛門　同　片岡瀬兵衛　同　浦山權兵衛　同　安井八郎左衛門　同

吉田甚五兵衛　同　半井彌右衛門　同　鶴見旦兵衛　同　大窪兵左衛門　同

中村志摩之丞　同　齋藤理右衛門　同　永井長左衛門　同　土方彌三郎　同

彫山與左衛門　同　渡邊清右衛門　同　岩田與三兵衛　同　和田庄左衛門　同

進藤九郎兵衛　同　小塚茂右衛門　同　池田太左衛門　同　山田治兵衛　同　鐵炮　弓

長柄　具足櫃　若黨　若黨　持鑓　草履取

長柄　甲　立　指物竿　刀筒　若黨　若黨　淺野五郎左衛門　若黨　若黨　草履取

具足櫃　持　鑓　若黨　同前　橋爪彦進　小沼半之丞　同　湯原友之進　同　加藤與三郎

指物竿　草履取

林彌三兵衛　同　西野五郎兵衛　同　長嶋金右衛門　同　梶尾茂兵衛　同

成田次郎兵衛　同　野村平内　同　池田次郎右衛門　同　千秋字右衛門　同

眞柄傳左衛門　同　杉村清兵衛　同　佐藏九兵衛　同　恒川太兵衛　同　青山佐助　同

鉄砲　長柄　具足櫃　若黨
松坂加右衛門　同　指物竿　乃筒　若黨　三輪彌一右衛門　若黨
弓　長柄　甲　立　若黨　若黨

持鑓　草履取　裁許　具足櫃　使者　持鑓
太皷　貝　若黨　前同　生田茂右衛門
草履取　指物竿　草履取

使者
澁谷伊右衛門　同　鉄砲五挺　玉薬箱　弓
玉薬箱　矢箱　長柄五本　引馬三疋
玉薬箱　弓

旗　竿　刀　筒　持鑓　草履取

具足櫃　甲立　長刀　若黨數人　瀧川圖書

指物竿　脇指筒　持鑓　草履取

供騎馬壹騎

御旗本　持鑓　指物竿

小頭　旗掉拾本　旗指箱　若黨前同　甲山次左衛門　持鑓

小頭　具足櫃　甲立　持鑓

草履取　小頭　玉藥箱　持弓　指物竿

一番　御馬驗　御持筒三十挺　若黨

草履取　小頭　玉藥箱　具足　甲立

指鑓　草履取　小頭　矢箱

前同ニ　高澤主馬　貳番　御持弓三十挺　吉田助九郎

指鑓　草履取　小頭　矢箱　連人同

小頭

四番　御持長柄貳十本　津田五右衛門　五番　御具足櫃一荷　裁領

小頭　同

裁領　裁領　御甲立　　裁領　　裁許
同　同　同　　六番　御圓箱　七番　太鼓　貝
御甲立

尻籠立　弩俵　裁許　對鑓　　挾箱
床机　典銀　八番　　九番　御持鑓
尻籠立　弩俵　裁許　對鑓　　挾箱

鑓　鹿島團七　南江加右衛門　御刀筒
惣歩行三行　惣組外三行岩崎助太夫
鑓　內藤平助　築田源八　御脇指筒

長谷川平內　天野彌三太夫　松原權右衛門　田中源八
御長刀　樽井雲八
東條半太夫　大浦源太左衛門　原　唯七　瀧澤右衛門

鹿毛七兵衛　宮田左平太
波瀬勘兵衛　井上新九郎
喜多川嘉六　畑源右衛門

御馬　鑓　鈴　使番
二木治部右衛門

戸田平六　林彌三兵衛
吉田馬左衛門　水村瀬兵衛
岡田小右衛門　板津嘉右衛門

十文字

使番
西田覺左衛門　十番　御乘替馬三疋小使足輕　小丈十人
小使足輕　小丈十人南部草壽
小使足輕　小丈十人

押足輕

神田玄叔　茂一庵　西田太左衛門　山田治郎左衛門

押足輕　連人前ニ同　同

窪田藤右衛門　戸田午六　喜多川嘉六　小塚三之丞　日比野彦左衛門

同　同　同　同

榊井雲八　磯野六郎左衛門　細野九郎右衛門　小島六左衛門

同　同　同

入江内藏之助　武庫川兵右衛門　富田彌右衛門　淺野十兵衛

同　同　同

御馬ノ廻リ御供衆乘馬計列也

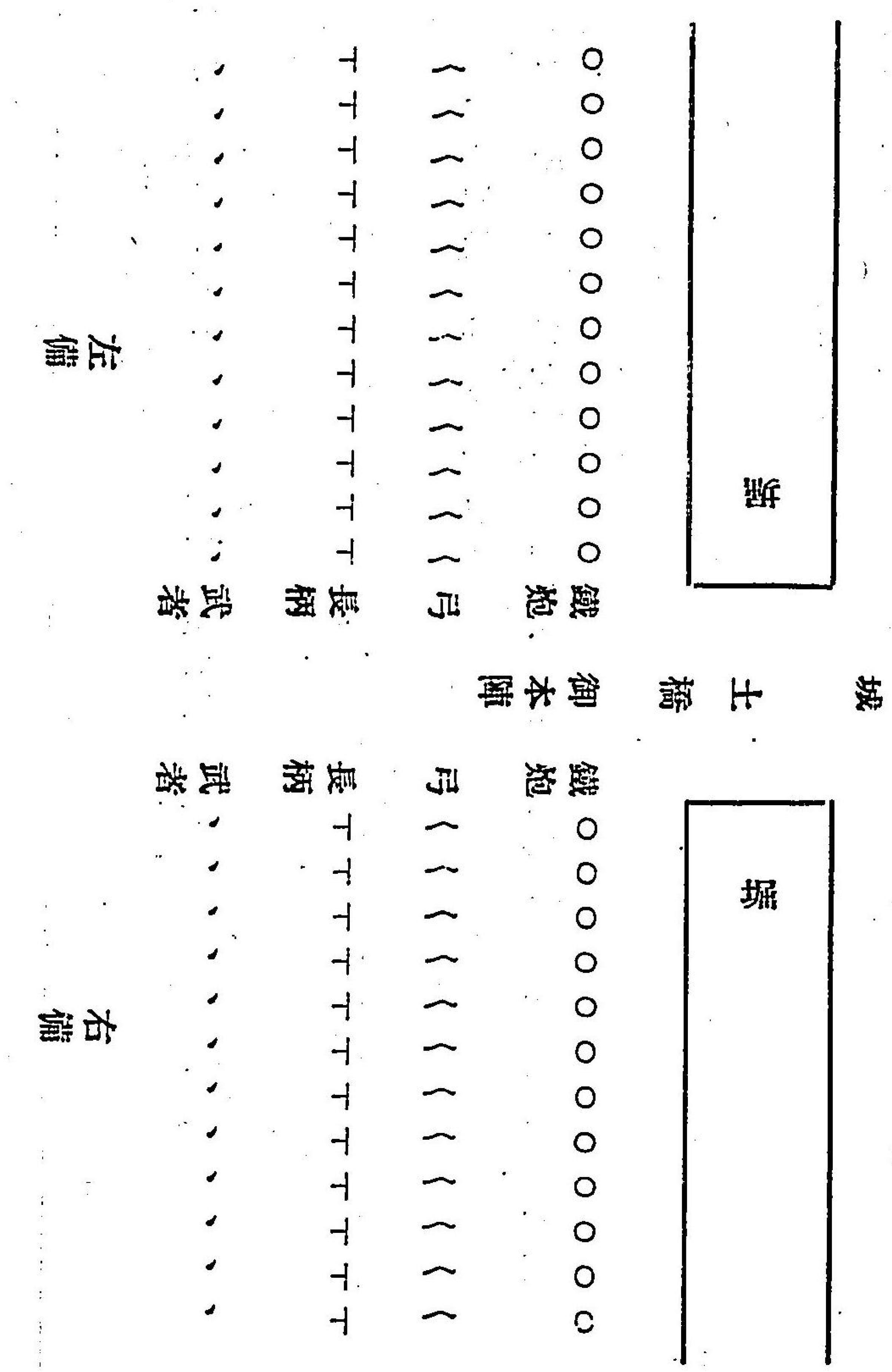
鹿毛七兵衛　吉田馬左衛門　瀧伴右衛門　渡瀨勘兵衛　岡田小右衛門

押足輕

板津加右衛門

押足輕

右之通、中屋敷より御押、高田の町は、通り町御除、此方御丁場、春日町に御出、南の虎口土橋を隔、東西の堀端に備を御立候、備立如左、



一御備以前に先達而物頭分三四人城中へ被遣、三の丸所々御請取、越後守殿よりの番人拂之可申由、津田平四郎殿前日被仰越候故、二十六日早曉に礒野六郎右衛門、細野九郎右衛門、小島六左衛門、三の丸へ被遣之所々番所請取、鐵炮三十挺被遣之候而、大手門鐵炮三十挺、南門へ弐十挺指遣候事、

一御備立相定り候而、城中より土橋迄、津田平四郎殿御出、殿樣へ御對話、御同道にて城中へ御入候事、

一殿樣御裝束紫羅紗之御羽織ニ、黑キ御立付被召之候、本丸へ御入候刻ハ御軍羽織被召替候事、

一三の丸より二の丸へ移り候橋際にて、殿樣松平日向守殿、秋元攝津守殿、溝口信濃守殿、坂本右衛門佐殿、高木善左衛門殿、中坊長兵衛殿、中根主税殿、蒔田八郎右衛門殿へ御逢被成、夫より御同道にて、本丸へ御返しの事、

一御本丸御列座定、巳後御墨印御頂戴、且又御下知狀も御拜圖也、御墨如左、

定

一今度越後國高田城爲請取、候指遣之付而存其趣滯留中、松平日向守、秋元攝津守相談可及沙汰事、

一喧嘩口論停止之訖、若有違犯之輩は、双方可誅罰之、萬一令荷擔者、其咎可重於本人、惣て法度之儀、堅可申付候事、

一猥に不可伐採竹木、並押置(買カ)猥籍停止之事、

一逗留中、人返之儀一切無用たるへし、於有申旨は重て可沙汰事、

一高田逗留中、火之用心堅可申付事、

右可相守此旨者也、

延寶九年七月十二日

御墨印

松平大藏大輔とのへ

榊原式部大輔とのへ

牧野駿河守とのへ

一高田御高札如左、七月二十七日ゟ被立之候、

一就今度高田領召上、高田城は、松平大藏大輔、榊原式部大輔、牧野駿河守請取之、在番は水野隼人正、溝口信濃守被仰付之、家中之者城中引拂之節、當地に有之知る申族は、遂穿鑿先可被指置候、退知與於相望者、無違亂可借宿旨、從御目附中證文可被成事、

附、家中輩、武具諸道具、可任其身心事、

一糸魚川城は堀左京請取之、則以其人數可破却旨被仰出候事、

一家中之輩城下引拂儀、從到着可爲三十日候事、

一城中并侍屋敷火之用心急度可仕事、

一喧嘩口論停止之、若違亂之輩有之者、双方可誅之、萬一令荷擔者、咎可重於本人事、

一在番中人返之儀、一切可爲無用、於有申分は、在番相濟已後可有沙汰事、

附、借物は證文次第の事、

右條々堅所被仰付也、若有違背族者速に可被處嚴科、惣而御法度之趣可相守もの也、仍而下知如件、

延寶九年七月日

秋元攝津守

松平日向守

右御作法相濟候已後、城無滯御請取候、御注進之御連狀曰、

一筆致啓上候、兩上樣益御機嫌克被成御座候由、恐悦至極奉存候、然は今度被仰付候通、越後國高田城、本丸二の丸三の丸、無滯今巳刻請取之、注進如此御座

候委細松平日向守、秋元攝津守可有言上候、恐惶謹言、

七月二十六日

牧野駿河守
榊原式部大輔
松平大藏大輔

大久保加賀守樣
堀田筑前守樣
板倉內膳正樣
阿部豐後守樣
人々御中

〔吉野屋舊記〕　御先祖利次公、富山へ御分封之際、小松利常公、思召有之高岡住居を富山へ引越候樣、御內命有之候に付移住仕候、尤其後身分不相替富豪罷在候處、利次公御代にも、折々金子調達方相勤罷在候內、御二代正甫公に至り別而格別の御用金相達し、既に天和元酉歲、高田城へ御出馬の際には御前へ御召寄せ、慶壽へ御直命を以テ金子調達方御賴被爲在候處、先概略金壹萬兩計御用相勤申候に付、御請申上候處、一ト先御次へ引退罷在候、尤其翌日白木長持に相納メ差上候處、甚以而御安心御喜悅之旨御直命有之、御次に相控罷在候、又候御目通被仰付、御直命には唯今は莫大の調金、先々安心罷在候得共、右出馬供廻りの家中に相渡し候金子、何分其元へは難申聞子細に候得共、万一思慮之儀も有之間敷哉と、御直命有之に付、難默止恐入奉畏、此御入用高概略幾許に御座候哉と奉窺候處、先三千兩計と御意有之に付、其座を退出仕、歸宅の上、夕刻迄に右三千兩取揃差上候處、不一方御滿足、今度御大切の御用向、早速相濟呉誠に世に稀成儀賴母敷思召、尙又追而可及沙汰儀も可被爲在候趣、厚く御懇之奉蒙御意、冥加至極難有仕合奉存候、其後高田御用御首尾好濟せられ、御歸城後御家中に御取立可被爲在、御內命有之候得共、此儀は絕而御斷申上候、依之爲御褒美町方諸役御免、町人惣祿と被仰付旨、御寄合所より御書出を以て仰渡候、且ッ此砌御上印を以て大泉場持高之內、永久三千六百步屋敷地に被下置候、其書出左に、

吉野屋慶壽、自餘之者と違ひ、御用之儀被仰付候、度々精を出し相勤候、及御聽被遊候得者、慶壽田地致所持候之由、此持高之內拾五石分之屋敷、慶壽へ可被下旨被仰出候、以上、

御算用場

御上印

於大泉場三千六百歩

天和元酉八月十七日

利義（利義公ハ正甫公始メ御實名也）

吉野屋慶壽かたへ

其方町役御赦免に付て、御寄合所御折紙出候間、以後被爲所持差遣候、依之今晩輕御肴一種、御城被持參献上可然、以上、

天和二戌三月二十一日

御算用場

吉野屋慶壽

吉野屋慶壽、是以後町役御免許候條、可被申渡候、以上、

天和二戌三月二十一日

寄合所

〔參考〕

〔齋藤文書〕○氷見郡氷見町

借用申銀子事

合四貫百貳拾五匁

右之銀子、大藏大輔殿御借用之所實正也、當卯正月ゟ無利本銀を以、當暮ゟ返辨可申所、如件、

（龜印）

延寶三年十二月二十日

富山

御算用場（印）

氷見七尾屋

新兵衛

丁銀

天和二年壬戌　紀元二千三百四十二年

二月己卯朔

神通川氾濫し、舟橋の鐵鎖を中斷す、

〔前田氏家乘〕　二年二月、神通川洪水氾濫、舟橋鐵鎖中斷ス、

五月 戊申朔

加賀藩、宿驛に制札を掲示す、

〔御高札寫帳〕

一忠孝をはげまし、夫婦兄弟諸親類にむつましく、召仕のものに至るまて、憐愍をくはふへし、若不孝不忠の者あらは、可爲重罪事、

一萬事をこりいたすへからす、屋作衣類飲食等に及ふ迄、儉約を可相守事、

一惡心を以て或いつはり、或むりを申懸、或利欲をかまへて人の害をなすへからす、總て家業を可勤事、

一盜賊并惡黨もの有之は、訴人に出へし、急度御褒美可被下事、

附、博奕堅令制禁事、

一喧嘩口論令停止之、自然有之時其場へ猥に不可出向、又手負たるものを隱置へからさる事、

一被行死罪之族有之剋、被仰付輩之外不可馳集事、

一人賣買堅令停止之、并年季に召仕下人、男女共に十箇年を限るへし、其定數を過は可爲罪科事、

附譜代の家人又は其所に住來輩、他所へ相越在働、妻子をも令所持、其上科なきものを不可呼返事、

右條々可相守之、於有違犯之輩者、可被處嚴科旨所被仰出也、仍下知如件、

天和二年五月　日　　奉行

〔御高札寫帳〕

條々

一毒藥並にせ藥種賣買之儀、彌堅制禁之、若於賣買仕者、可被行罪科、たとひ同類たりといふとも、訴人に出る輩は急度御褒美可被下事、

一にせ金銀賣買一切停止たるべし、自然持來に於ては、兩替屋にてうちつぶし、其主に可返之、ならひにはつしの金銀、にせ金銀は金座、銀座へつかはし可相改事、

附、にせ物すへからさる事、

一寛永之新錢、金子壹匁に四貫文、勿論壹歩には壹貫文、御領私領共に年貢收納等にも、御定の員數たるへき事、

一新錢之儀、いつれの所にても、御免なくして、一圓不可鑄出之、若違犯之輩有之者可爲罪科事、

附、惡錢、似錢、古錢、此外撰へからさる事、

一新作之慥ならさる書物、商賣いたすへからさる事、

一諸色の商賣、或一所に買賣、しめうり、或申合高直にいたすへからさる事、

一諸職人申合、作料手間賃等高直にすへからす、總て誓約をなし、結徒黨儀可爲曲事事、

右條々可相守此旨、若違犯之族於有之者、可被處嚴科者也、仍下知如件、

天和二年五月　日

〔高畠舊記〕

町人百姓刀指候義は、跡々より御停止に而、刀指不申候得共、他國へ罷越候時分は、道中爲用心、自然刀を馬に差、罷越者も有之樣に相聞へ候、今度從公儀、町人、舞々、猿樂等假令雖爲御扶持人、刀指不申筈に御觸に付、他國に而も御吟味有之間、向後は御郡中御扶持人、十村山廻、町人、百姓等道中刀持參不仕候樣に急度御支配、御郡中へ御申觸尤に候、以上、

天和二年五月晦日　　御算用場

直田次兵衛殿

山森藤右衛門殿

〔參考〕

御領國中高札場所

埴生　今石動　立野　高岡　小杉　下村　水戸田　浦山　城端　井波　中田　入膳　東岩瀬　滑川　魚津　舟見　生地　泊　三ヶ市　堺　放生津　伏木　氷見　守山　佐賀野

〔御高札寫帳〕

近年、村々虛無僧修行之體にて參、百姓共へねたりケ間敷儀申懸、或旅宿を申付候樣、村役人抔へ申候故、宿を取遣候得は、麁宅に而止宿難成由を申、あはれ其場に居合候者共を、尺八にて打擲いたし、疵付候儀有之段、相聞不屆の至に候、虛無僧修行いたし候は、志次第施物を請求に入候は、相對に而一宿可致筋に候間、以來虛無僧共、聊も不法の筋有之は、其村方にて差押、御領は御代官、並御預ヶ役所へ、私領は領主、地頭役所へ、早々召連出へし、若於相背、其村方可爲越度者也、

右の趣、御領私領社寺領等不洩樣相觸、村々にて寫爲取村入口高札場、或村役人宅前方抔へ爲張置可申候、

正月

右之通可被相觸、

松平右近將監殿、御渡候御書付、

寫一通相達候間被得其意、答之儀は池田筑後守方へ、可被申聞候、已上、

大目附

近年浪人抔と申、村々百姓家へ參り合力を乞、少分之合力錢を遣候得は、惡口いたし、或は一宿を乞、病氣抔と申、四五日致逗留候内に、志品々難題を懸、合力錢餘慶ねたり取候段、粗相聞不屆之至に候、以來右體之者罷越候は、其邊之穢多非人に爲召捕、關八州、伊豆國、甲斐國、公事方、御勘定奉行へ召連出、其餘之國々は其地頭へ召連可出候、勿論何樣申候共、決而不爲致止宿、苗字帶刀いたし候者へは、一錢之合力茂致間敷候、

一旅僧、修驗、醫女、座頭之類、物貰之者共、志次第之報謝を請、相對にて宿を借り可申處、近年押而宿を取、或ねたりケ間敷申懸候者共有之段、粗相聞是以不屆之至に候、以來右體之不法者は前箇條同樣、爲召捕可出候、若於相背者其村方可爲越度者也、

右之趣、御料私領、寺社領等不洩樣相觸、村々に而爲寫取、村々入口高札場、或者役人之宅抔へ爲張置可申候、

十月

右之通可被相觸候、

水野出羽守殿相渡候、御書付寫一通相達候、被得其意答之儀は、戸川山城守方へ可被申聞候、以上、

正月

大目附

十二月甲朔戌

二十八日、辛丑、江戸火あり、富山藩邸類燒す、吉野屋慶壽、材木及ひ金を獻す、

〔前田氏家乘〕　江戸邸延燒す、四代將軍家綱公より利次公に授與せられし御判物燒失す、吉野屋慶壽、木材及ひ金若干を獻す、

〔越中舊事記〕　天和二年十二月二十八日、江戸御屋敷類燒す、

元祿二年三月、江戸御屋敷、造作出來、

〔吉野屋舊記〕

天和二戌年十二月二十八日、江戸御邸御類燒之處、江戸御詰合御家老小塚將監殿ゟ御飛札到來、今般江戸御邸御類燒に付、至急出府可仕旨被仰渡候事、

右に付、差急金子持參出府仕候事、但し出府仕候上直と深川木場へ罷越、木材類見立、先爲手附金千兩相渡、罷歸り候上御目通仕、御作事所御繪圖出來に付、御役人中と同道仕、又候深川木場へ罷越、御買上之材木屋諸雜費、概略三萬六千兩餘、御立替差上申候に付、御紋付御羽織、幷御小袖等品々御召下々、右爲褒美拜領被仰付候、

御手許極御內用として、高澤主馬殿より、紙面左之通り、

一筆令啓達候、一昨二十八日未の刻に、當地御屋敷近所より火事出來、殿樣の御屋敷不殘令燒失候、其上御土藏迄火入、御秘藏之御道具は申に不及、其外御手廻りの御手道具共迄透與燒失申候、右之樣子に付て、唯今何共口口樣して無之、御行支の儀にて候、此度の儀に候間、何とそ金子致才覺、御內所へ上け被申候之樣にとの御內意ニテ、表向よりも金銀才覺の儀可申聞候、其表向の才覺金の外、御內所の金子四五百兩程、何卒被致才覺成樣に、ひそかに御內所迄指上候樣に可被致候、其地に而一通り被致推量、殿樣には御屋敷御立退之儘、御道具とては一色も無之不殘令燒失候、右之御樣子に候間、隨分被致才覺、曾而外には知れ不申樣に致し、御內所の金四五百兩程上ヶ可申候、左候はゞ、殿樣別而の御滿足に可有御座候と存候、此砌の儀に候條、隨分精を出し可被申候、表向より申聞入候金銀の儀は、表向の御用の爲に成り申候、箇樣に申入候、御內所迄上ヶ被申候金子は、殿御手廻り差當りたる御用に立申儀に候間、左樣に相心得差上被申候、金子御返濟の儀は、早速不殘はなりかたく候間、年季を御定め慥に御かへし可有之候、別に御印の物を下し可被置候間、可被得其意、謹言、

天和二戌十二月晦日　　高澤主馬忠進花押

吉野屋慶壽殿

猶々金子四五百兩程、何卒々々御內所へ上可被申候、拙者より可申入、依而御內意如此候、以上、

一小塚將監様より請取書左之通り、

御道具代請取四百七拾兩差上申候、以上、

天和三亥正月五日　小塚將監

吉野屋慶壽

一御寄合所御達の儀、奥御用所より被仰渡、

慶壽義古來稀なる大功者に付、猶寒江本郷村永久開高百五拾石、向後於人扶持致而、町諸役永代御免、子孫末々町人惣様被仰出、奥御用所より、御召下々御紋付、御羽織、同御帷子、貳重頂戴被仰付候、

一紋付、御小袖等被下置候節、

吉野屋慶壽、常々御用精々入相勤め候段、達御聽神妙被思召候、依之唯今遂に御例も無之儀に候得共、御紋付御小袖二可被下之旨可申渡旨、寄合所迄被仰出候、以上、

中略

一御目錄を以て頂戴仕候分、左之通、

御召下　御帷子　二

御召下　御羽織　二

御召下　御小袖　二

一御類燒後、極御内用御手道具代差上候砌、左之通り、

小塚將監を以て道具代請取候事、

貞享元子正月五日　正甫（麒麟御印）

吉野屋慶壽かたへ

一御類燒後、江戸御屋舗御普請御成就之上、加賀様御見舞被遊候砌、正甫公、御喜悅之餘り右等之趣被仰上候を、加賀守様御出座、御障子次へ被爲召候付、乍恐多罷出候處、其砌御口山崎長門守様を以、從加賀守様、今度普請向其方儀厚存入令出精、宜致出來大慶候旨被爲遊御意、誠ニ以身ニ餘リ冥加至極難有仕合ニ奉存候、且御造營御用濟歸宅後、前段御印之物頂戴仕候事、

一貞享元子年正月五日

正甫公、思召を以て御紋付（ツルキニ、梅鉢御紋匿）白木御箱筍頂戴被仰付、御證文等入置可申旨被仰出候段、奥御用所より被仰渡候、依之慶壽家代々是を古例與仕、毎年正月五日神酒等相供、開簿記祝仕候、

天和三年癸亥 紀元二千三百四十三年

是秋、富山藩、領内稻田の熟せさるを以て之を救恤す、

〔前田氏家乘〕 三年秋、稻田熟セス、八百石ヲ救恤ス

十二月 戊戌朔

富山藩、諸制度を定む、

〔前田氏家乘〕 十二月、制度ヲ定メラル、其要略ニ曰ク、公儀條目堅ク相守ルヘシ、藩士ノ面々、文學武藝ニ勤勉シ、怠慢スル事勿レ、惡友ニ交ル事勿レ、篤學方正ニシテ武藝熟達ノ者ハ其ノ頭ヨリ上申スヘシ、諸物頭ハ第一其身行跡正シク、禮儀ヲ以テ組下ヲ指揮スヘシ、私意ヲ以テ親疎ヲ立ツ可カラス、若シ組下不行跡ノ徒アラハ、誠意ヲ以テ精々意見ヲ加フヘシ、藩士實子無之養子致スニ於テハ、自他國ニ拘ハラス親類中ニテ擇フ可シ、若シ無之ハ當地ニ於テ他人タリトモ選擇シテ願出ツ可シ、諸役人寄合所ニ上申ノ件ハ、向後同僚ト共ニ出頭スヘシ、目付役陳告ノ件ハ、寄合所ヲ經由セス直チニ面陳スヘシ、事ニヨリ寄合所ニ下附スル事アルヘシ、寄合所ノ議ハ大目付ヘ報スヘシ、富山山王社祭日ハ、四月朔日トス、江戸ヨリ還城ノ年ハ六月十五日トス、凡ソ藩士五十里以上ノ地ニ使スルトキハ三日、十四里マテノ間ニ使スルトキハ一日、境内ニ宿泊又隨行スルトキハ一日ノ休暇ヲ賜フヘシ、家居ノ長男ハ勿論他國ニ遣シタル長男アラハ、必ス遺書ニ記載シ置クヘシ、若シ匿ス者アラハ繼目ヲ命セサル事、向後御目見ノ期ニ後レ參着ノ者ハ之ヲ除ク、家庭ニテ煙火ヲ弄スルヲ禁ス、向後陪臣ヲ除クノ外、足輕、掃除坊主、盲人、町人、百姓、十村役ノ輩ハ、鐵門マテ低ク木履ヲ穿ツヘシ、陪臣ハ雨雪ノ時ト雖モ、笠或ハ頭巾ヲ以テ覆面シテ城門ニ入ルヲ禁ス、藩士一般、組頭ニ途ニ逢ヘハ禮スヘシ、足輕ノ輩年賀ノ時ト雖モ、肩衣ヲ著クルヲ許サス、百姓ハ年頭年賀ノ節、及ヒ放鷹ノ節、送迎共肩衣ヲ着スルヲ許サス、其親罪ヲ犯シ死ニ處スルモ子供ヲ死刑ニ處スル事ナシ、割場足輕、作事足輕ハ、公用ノ爲メ杖ヲ携ヒ城門ヲ過クルヲ許ス、西岩瀬釣場ニテ藩士垂釣及ヒ網スルヲ禁ス、定メニ乖キ、衣服ノ制ヲ犯スモノハ、過料銀ヲ徵スヘシ、組外歩行以下ノモノ酒肴料ヲ獻スルヲ廢ス、一度結婚ヲ願ヒタルモノ、再婚スルトキハ願書ヲ呈スルニ及ハス、藩士ノ子女神官、僧侶、商人ト結婚スルヲ免サス、江戸出府ノ事務取調ニ與リタルモノニハ、還城ノ後應狩ノ獲物或ハ肴ヲ慰勞ニ下賜アルヘク、放鷹

ノ時臨機農商ノ者ヲ採用ノ節ハ、其場ニ奉行出頭シテ命スヘシ、藩士他國ニ役シ、其ノ親子兄弟病アル時ハ、願ニ依リ休暇ヲ賜フヘシ、職ヲ奉シ自ラ任ニ堪ヘスト思ハ、(此間脱字カ)亂スル事ヲ、鐵砲町、總曲輪植付ノ竹ヲ斬伐スルヲ禁ス、物頭ヨリ手廻組マテノ者、結婚ヲ願請スルトキハ、龜形ノ捺印ヲ賜フ、其ノ他ハ年寄記名ニ止ムル事、伊勢拜參ヲ願フモノハ同行二人ヲ限リ往復ハ二十日トス、愛宕八幡拜參ヲ願フモノハ往復二十五日トス、御留守ノトキハ其ニ同行三人ニ限ル事、城番ノ士、以後年中勤番日數三分ノ二以上、勤勉セシモノハ、職ヲ命シ或ハ出府ノ隨行ヲ命ス、近習ノ輩一日ノ缺アレハ、年中ノ勤務ノ全數ヲ算セス、祖父母親子兄弟妻病アルトキハ、其ノ旨ヲ同番ノ者ニ告ケ家宅ニ還ル事ヲ許ス、富田縫殿櫓門マテ乘輿ヲ許ス、祈願寺病ヲ强テ召シニ應スルトキハ、櫓門マテ乘輿ヲ許ス、法華寺櫓門マテ乘輿ヲ免ス、光嚴寺ハ鐵門マテ、其ノ他何ノ所ヲ問ハス玄關等乘輿ヲ許ス、四月盡日マテ神通川ニテ鮎ヲ釣ルヲ禁ス、頭役ノモノ越中番所ノ前ヲ過クルトキハ下馬スルニ及ハス、富田縫殿馬廻番所前ヲ過クルトキハ番士縁板ニ出座シ禮スヘシ、高知組以上婦女衣服ノ制ハ、上小袖表代價ハ銀八十匁帷子ハ銀三十匁、中小袖表代價ハ銀六十匁、下小袖表代銀ハ三十五匁、小袖中紅中帷子代銀ハ二十五匁、下帷子代銀ハ二十匁ヲ限ル事、四百石以下、小袖表代銀六十匁、又ハ三十五匁、帷子代銀二十五匁、又ハ二十匁、小袖裏中紅ニ限ル、組外以下、絹紬添物八講布添帷子ニ限ル事、四百石以下ノ士ハ、袋茶ヲ禁ス、奢靡ノ玩弄物ヲ買フ事ヲ禁ス、藩士野外散歩セハ獨餉ニ限ル事、唐木綿、奈良晒、木綿ヲ禁ス、市民一般無紋紫小袖、袷紫裏、シヽラ、熨斗目、白下着ヲ禁ス、城下失火アラハ、年寄、月番、大目付、小目付ノ内一人出頭シ、火消役ハ火元ノ防ヲナスヘシ、城ノ近火ノトキハ、物頭長男、無組、小性、馬廻、手廻、射手、歩行、都テ職アルモノハ、追手下馬場ヲ警衛スヘシ、吉田甚五兵衛、牛井彌右衛門ハ長柄者ヲ率ヒ、追手腰掛場ヲ警衛スヘシ、市中ノ人夫ハ三ノ丸ニ屯スヘシ、親戚ノ外ハ失火ノ爲メ訪問スルヲ禁ス、失火近邊ノモノハ直チニ防禦スヘシト雖モ、火消役出張セハ其ノ指揮ニ隨フヘシ、組頭、物頭ハ三ノ丸土橋土橋掲示ノ條目ニ據リ城中ニ入ルヘシ、但シ從者二人トス、足輕頭ハ部下ヲ率ヒ追手土橋ニ屯スヘシ、馬廻番士ハ速ニ櫓門ヲ開キ番士ノ半數追手土橋ニ出張スヘシ、頭役出張ハ此ノ限リニ非ス、番士家宅近火ノトキハ、同番ニ旨ヲ告ケ歸宅スルヲ許ス、城中火防受持ヲ定ム、居間小性、次ノ間ハ手廻、料理ノ間ハ與外組、長櫨、臺所ハ料理人歩行組、式臺、廣間、書院

ハ馬廻一組、櫓門ハ射手組細野九郎右衛門部下足輕扶持人、大工算用場ハ目付一人、小算用者會所ハ高澤主馬部下足輕、作事所ハ作事奉行扶持人大工生田四郎兵衛部下足輕、厩ハ馬役林助八部下足輕、赤藏木町藏ハ改作奉行代官下代米見トス、此ノ他水手役、火消道具奉行、裏門締役、各守衛ヲ定メラル、又制度ノ項目ヲ改正セラル、其ノ要略、江戸出府隨行前用意日數ハ小性ハ十日、手廻ハ七日、組外歩行ハ五日トス、江戸ヨリ歸國休暇日數ハ小性馬廻ハ三日、道中取調掛リノ者ハ三十日トス、江戸留守中死刑ノ者アラハ、必ス江戸ヘ伺ヒ出ス事等ナリ、

〔富山市沿革志〕　天和三年十二月、制度ヲ定メラル、其中ニ曰ク、四月盡日ニ至ルマテ、神通川ニ於テ香魚ヲ釣ルヲ禁スト、是レ香魚ヲ蕃殖スルカ爲メナリ、

是歲、加賀藩、目安提出手續を定む、

〔越中史略〕　天和三年、領國内の人民にして、目安（告發狀の如きもの）を提出せんと欲するものは、十村の副書を以て、御郡奉行までこれを提出すへし、若し村肝煎の身上に關することならは十村まで、十村の身上に關することならは御郡奉行、改作奉行まで、兩奉行のことに關する時は御算用場まで、御算用場へ對する件ならは、大目付へまで具申すへしと令す、

貞享元年甲子（紀元二千三百四十四年）

六月（丙申朔）

八日、（癸卯）雪降る、

〔前田氏家乘〕　六月八日雪降ル、奥羽ハ雪積リシコト一尺餘、越後村上邊ハ雪積リシコト八寸計ト云フ、

七月（乙丑朔）

二十七日、（辛卯）加賀藩、封内高辻帳を幕府に上る、

〔租税志〕　貞享元年七月廿七日、葛卷昌與日記抄ニ據ル、封内高辻帳ヲ幕府ニ上ツル、其高及ヒ新田高通計左表ノ如シ、

國名	郡	石數
加賀	加賀石川能美	高三五二、七五二、八九〇石
能登	羽咋能登鳳至珠洲	二一一、四三二、八四〇
越中	新川射水礪波	四七九、八七九、六九〇
近江	高島郡ノ内今津弘川海津中村町	二、四三二、二六二
	通計	一、〇四六、四九七、六八二

加賀能登越中	加賀ヨリ礪波ニ至ル十郡	新田	高	二〇四、三六五、三〇〇

是ヨリ先キ寛文八年、能美郡尾添荒谷二村高百七十一石九斗八升ヲ幕府ニ致ス、幕府ヨリ其代地近江高島郡海津中村町高百七十一石九斗八升ヲ賜フ、故ニ右表ニ載スル所ノ高數總計寛文四年ニ異ナルコト無シ、惟加賀ニ於テハ、尾添荒谷二村ノ高ヲ減シ、近江ニ於テハ、海津中村町ノ高ヲ增スノミ、且ツ表中ノ新田高ヲ寛文四年ニ比スレハ、四萬四千八百四十石零三升ヲ增シタリ、

九月甲子朔

二十一日、甲申、將軍綱吉、領知狀を綱紀に與ふ、

〔三州志〕本封叙次考

貞享元年

常憲大君ヨリ頂戴ノ文左ノ如シ、

加賀能登越中三ケ國、百貳拾萬貳千七百六拾石之內、加州江沼能美二郡之內、七萬百七十石餘、越中婦負新川二郡之內十萬石、能州四郡之內一萬石、以上十八萬百七十石餘除之、殘而百二萬二千五百九十石餘、並近江國高島郡之內三ケ村二千四百三十石餘、高百二萬五千石餘、目錄別紙ニアリ事任寛文年四月先判之旨、宛行之訖、全可被領知之狀如件、

貞享元年九月二十一日　　綱吉御判

加賀中將殿

右目錄ノ寫之ヲ得ス、因テ此ニ泄ス、

十一月癸亥朔

十三日、乙亥、將軍綱吉、正甫に領知狀を與ふ、

〔前田氏家乘〕十一月十三日、大樹ヨリ御領知ノ御判物ヲ賜ハラル、

貞享二年乙丑　紀元二千三百四十五年

正月壬戌朔

二十一日、壬午、加賀藩、野獸作物を害するを以て、五箇山に銃器使用を許す、

〔高畠舊記〕

於越中五箇山、猪猿耕作喰荒候付而、鐵炮にて追拂度旨十村書付、改作御奉行添書、御手前奥書之紙面入御覽候處、鐵炮爲打可申旨被仰出候條、可被申渡候、恐々謹言、

貞享二年乙丑正月二十一日　　前田佐渡

八月　朔己丑

津田宇右衛門殿
奥村伊豫
奥村壹岐
本多安房

十八日、丙午、加賀藩、馬の筋のべを禁ず、

〔貞享舊記〕

覺

馬之筋のべ候儀、第一用方不宜、其上不仁なる儀に付而、御厩に立候御馬共、先年より御停止被仰付候得共、今以世上にては拵馬有之由に候、向後堅御制禁被仰出候者也、

貞享貳
八月十八日

前月十九日、戸田山城守殿え、家來御招向後馬の筋のべ候事、御制禁之旨御書出御渡、若於違犯は急度可被蒙御吟味之旨、被仰渡之候間、此旨可相觸由、拙子共へ御書を以て御書出之御寫被下之に付、則御書出の寫指越之申候、右之趣被得其意、支配中へ急度可被申渡候、恐々謹言、

貞享貳乙丑十月九日

眞田治兵衛殿
馬淵加右衛門殿
奥村壹岐
奥村伊豫
本田安房

是歳、綱紀、分限帳を幕府へ上る、

〔三州志〕一本封叙次考

貞享二年、官邊へ出ス所ノ分限帳ノ面、左ノ如シ、

加賀能登越中近江ノ内
百二萬五千石

筑前守子二位下左近衛中將　松平加賀守綱紀　本國尾張生國武藏　居城加州金澤　丑年四十三

正甫、富山光嚴寺を再建す、

〔越中寶鑑〕下　長祿年中、○註略越前國南條郡宅良村慈眼寺、三世雪叟和尚法子天叟祖寅和尚行化シテ、本國ニ入リ礪波郡增山村ニ草創シ、尋デ一宇ヲ射水郡森山城外ニ建立シ、名ケテ光嚴寺ト稱セリ、當時寺領千百石ヲ有シ、門末十八箇寺ヲ有セル巨刹ナリシモ、八世卿雲州札和尚ノ代ニ至リ、上杉謙信ノ兵燹ニ罹リ、七堂伽藍ヲ悉ク烏有ニ歸シ、衆僧離散シタルヲ以テ、纔カニ草庵ヲ結ヒテ居レリ、會々舊領主前田利長公、和尚ノ道風ヲ聞レテ遂ニ引見セラレ、其由緒等ヲ質シテ深ク歸依セラレ、天正九年百石ノ墨付ヲ賜ヒ、以テ堂宇再興等ノ費ニ充テサセ給ヒ、尋デ利次公本國入部セラルヽに際リ、本寺ヲ菩提所トセラレ、寛文三年富山ノ南春日野ノ地ニ三千九百餘坪ヲ、同十一年復タ四千五百餘坪ヲ、同十二年寺領ノ爲メニ百石ヲ、就レモ寄賜セラレ、貞享二年松平大藏大輔源秀久、大功德主トナリテ現時ノ諸伽藍ヲ建立セラレ、後チ寶永六年二十一世石巖雲補和尚ニ至リ常恒會格ニ、明治廿九年、現時住職月潭後龍和尚、本宗認可僧堂ヲ開單ス、

〔寺院明細帳〕

富山縣管下越中國、上新川郡富山五番町五十三番地、
能登國鳳至郡門前村大本山總持寺末、
曹洞宗　光嚴寺
一本尊　華嚴釋迦如來、
一由緒　開山天叟和尚、長祿二寅年、越中礪波郡增山村ニ草創ス、其後加賀ノ領主前田利長卿ノ命ニ因リ、新川郡清水村ニオイテ敷地付與セラル、其後舊領主前田家菩提寺トナリテ今ノ地所ニ移居ス、

貞享三年丙寅　紀元二千三百四十六年
三月乙卯朔
十四日、戊午、正甫　安養坊山に於て時鐘を鑄造せしむ、

〔吉野屋舊記〕

一貞享三丙寅年三月十四日、於安養坊山御城之時鐘被爲鑄候に付、右小屋場御出來、同年閏三月廿七日、今日時鐘彌被爲鑄候、但し是迄は寒江自得寺之鐘を、御引上げに而、時鐘換リ居候也、
一右鐘鑄候に付、右鑄人金澤釜屋彦九郎御呼寄せ、殿樣爲御見物被遊御出候、尤

も當日未之刻より吹き始め、たゝら二つ建候、且たゝら踏三十七人富山之者也、今日赤飯御酒御肴被下候、此砌御意を以て慶壽にも御候被仰付候に付而、先前より貯蓄致し置候古金數許多不殘、長持入に而爲相運、右鑄立たゝらの中に打込之由、代々子孫に口碑に申傳居候事、因に云ふ此裁許係り人は、清水孫左衛門、笠原三郎右衛門相勤候事、

〔前田氏家乘〕　元祿三年三月十四日、安養坊山ニ於テ、時鐘ヲ鑄造セラル、公自ラ工ヲ勵マシ、工場ニ臨マセラレ、吉野屋慶壽隨フテ到リ、其ノ藏貯スル古金銀錢等、若干製錬中ニ抛ス、工成リ之ヲ城中ヘ曳キ入レ、雖キニ本郷村自得寺ヨリ移ス處ノ鐘ヲ返附ス、

〔參考〕

〔前田氏家乘〕　寛文十一年四月二十一日、安養坊山ニ火爐ヲ築キ、大鐘ヲ鑄造シ、城内ニ移シテ時鐘トセラル、

十月（壬子朔）

二十日、（辛未）加賀藩、筭用場より撿地奉行人に撿地の條規を交附す、

覺

一撿地は永代之高極に付、大切之儀に候條、別て可被念に入候、若麁末之議有之、至後爭其品顯申候得は、各不調法且又其村之百姓越度に相成儀と存候、依之先村々領地之田畑有所、飛地入込、他村領境、並領中之江道等、委細繪圖に爲記被致吟味、以後紛敷無之樣に被入念に、其上を以領廻り被致撿地可有之事、

附、江代有之、用水あとわけ、用水の品可被承屆候、

一縄張仕樣、曲尺の違有之候哉、能々可被見屆候、縄張仕樣にて損德有之義に候間、吟味尤の事、

一竿取の足輕竿能伏候て、竿筋すくに打候樣に可被致候、竿を不伏候て麁相に打候時は、損德違有之事に候、並竿先筋引仕候、足輕是又竿先筋引違不申樣に可被致事、

一不及申各の儀竿に被放候儀は、無之筈に候得共、彌以竿先へ附被參候て、竿目一に見屆可被申候、少の所にても、足輕迄竿留り被參間敷、口上の答を以て、野帳に被記候義有間敷候、且又間敷かそへ違無之の樣に、可被入念候事、

附、依所或は拾間、貳拾間の縄にて、撿地被致義も有之由に候、第一略義其上縄はのひちゝみ在のものに候へば、一切無用に存候、潟の内なとにて竿取

逕不成、舟にて検地仕様成所は各別に存候、

一惣高廻打立並引物等、諸事検地の次第は、先格の通可被相極候事、

一打立歩數竿目爲相見、其村々百姓罷出候、彌肝煎、組合頭、長百姓の内にても、一手合江武人宛、勿論其組の十村、但手合多時は、せかれ名代にても可罷出候、且又手合江畠打役に參候、御扶持人各一所に被召連候て、竿目間數等相見仕様に可被致事、

一野帳の儀、以後地方の者申分無之ため、百姓に相帳を爲付、其時に讀合候、猶以百姓相帳と、各野帳相違之儀無之様に、可被入念候事、

一畠方、折の次第、前々より相極通を請、且又植物出來の様子、土目等相考、御扶持人見分仕、答之申候得共、彌各被見屆候て可被相極候事、

一相帳付候儀、其村百姓の内々無之時は、他村の百姓相雇申躰に候、近年依所に百姓にて無之者、相帳付に罷出、各存知の者の様に仕成、検地不滿内、打立歩數内検地より減高すくなく相見へ候間、何とそ仕様可有之抔と申なし、百姓より禮物を取申族も有之様に取沙汰申候間、惣て百姓の外、相帳付に不罷出様に可被申付事、

一近年竿取の足輕、依所に百姓共ゟ密々に禮物を受、且又検地勤候時分の木綿

裝束なと拵置、爲着之色々馳走を受、申様に取沙汰有之候、右の品は不及申酒肴菓子等にても、聊馳走を不請様に急度縮り可被申付候、向後猥の儀有之候は、知次第御吟味有之様に可仕候、左候得は各も不念に相成候間、兼て其御心得尤に候事、

一各検地村に止宿の刻、宿拵の義、園無之所は、簀蒔にて園之、且又行水所、雪隱蒔張に仕、敷物の儀古候ても、其所に有來候縁取等用之、其外何にても拵不申様に可被致候、近年は依所新敷縁取疊抔拵之、并水桶手洗等も新敷を調申様相聞候、且又賄方のもの酒肴等他所より取寄、懸賣申様に相聞候、因蔭検地相濟彼是入用銀過分に懸り、村中割符仕由取沙汰有之由、惣て百姓費の儀、萬端御免除の御事候得共、其聞如何存候條、此段急度可被相心得候事、

右前々より申談儀候得共、向後彌諸事御遠慮候て、可被相勤候、近年検地依所内検地より大分不足高致出來候、いつれの仕立にて違候哉不審に存候、自今以後隨分萬端被入念候て、検地被相極尤に存候、已上、

貞享三丙寅十月廿日　　御筭用場

〃　　検地御奉行中

是歳、富山藩、農民を賑恤す、

〔前田氏家乘〕　寒村貧民共へ、近年打續キ凶作ニ付、正米八百石ヲ賑恤セラル、

〔越中舊事記〕　貞享三年、御領分凶作、

加賀藩、盜賊改奉行を置く、

〔高畠舊記〕　盜賊御改御奉行、貞享三年ヨリ越中井上久太郎殿、能州村上助右衞門殿、加州加藤重左衞門殿、

貞享中　紀元二千三百四十四年より全二千三百四十七年まで

雄神川水溢れ、射水郡廣上村、深淵となる、

〔射水郡二塚尋常小學校報告〕　廣上ハ二塚ノ東ニアリテ、筏江（一名筏川又五十ケ田川ノ字ヲ用フルコトアリ、）中田川村ノ、中央ヲ貫流ス、貞享ノ頃、雄神川ノ本流變シテ、其支流ナル中田川ヘ落チ、全村ノ大方流失シテ深淵トナル、其東ニ殘レル一部ヲ東廣上ト云ヒ、西ニ殘レル部分ヲ西廣上ト云フ、

東山天皇

元祿元年戊辰　紀元二千三百四十八年

二月　甲辰朔

幕府、銃器を所有するもの〻員數、及其浪人を開申すべしと嚴達す、

〔前田氏家乘〕　元祿元年二月、幕府ヨリ鐵炮所持者の員數及ビ該器所持の浪人抱置、有無ヲ開申スベキ嚴達アリ、

五月　壬申朔

二十七日、戊戌、富山仁右衞門町より失火す、

〔富山市沿革志〕　元祿元年五月二十七日、仁右衞門町、絹屋與四兵衞ノ家ヨリ出火ス、時ニ南風强ク、立町小島町ヲ燒失シ、鮏川ヲ越エテ、天神町ニ飛火シ、長町（今ノ北新町）等ニ蔓延ス、燒失町家、二百九十戸、御家人陪臣等、家屋三十八戸、

九月　庚午朔

二十九日、戊戌、大風稻を害す、

〔前田氏家乘〕　九月、大風稻田ヲ害ス爲メニ、二千石ヲ免除セラル、

十一月　庚午朔

二日、辛未、富山藩儒南部草壽歿す、

〔先哲叢談〕（後編三）　寛文十二年壬子、京師南部艸壽、應鎭臺牛込蔭鎭（通稱忠左衞門、時爲長崎

本行之徵、遊於崎、當是之時、邑中大嚮學、始建先聖祠於邑、立山設鄉學、立塾師、艸壽料理學政、董督其事、嘗見南山深器之、因請之鎮臺、使之爲弟子員、時稱小野昌八郎、始顯於邑中、時延寶丁巳春、南山歲二十也、

草壽、字子壽、號陸沈軒、山城人、其先越後長尾氏之族也、講說平安、學博行修、以醇儒山斗於後進、乃遊於崎、敎授此殆八年矣、娶某氏、生新八郎、早歿、故欲養南山而使爲嗣子、迺之甚渥、南山感其鞠養之厚、遂冒其姓、

延寶末、艸壽應富山侯之聘、之越中、受田祿百五十石、爲儒員、猶使南山留在崎、從學筑後安東省菴、後來江戸、師事木順菴、蓋以順菴與省菴同學于松永昌三、故也、遂於其門、有十才子之稱、以南山爲之巨擘、艸壽歿、南山襲其祿、仕于藩、

〔諸藝雜志〕三

南部草壽　號古硯子

元祿年中、御家中分限帳ニ、組外御儒者五十人扶持トアル、

御年譜省略　全部八卷

大神君御誕生ヨリ薨御ノ翌年迄、七十六年ノ間、年々ノ大概ヲ記シ畢ヌ、

于時貞享二乙丑冬、於越中富山、南部草壽敬書之、ト有、

石碑之銘　墓所光嚴寺

先儒陸沈先生之墓

先生姓平、長尾氏、冒母之氏、更爲南部、稱草壽、號陸沈、乃北越謙信裔也、二世家雖焉、天和元辛酉應聘來越中、元祿元戊辰十一月初二、辛未、病卒于家、譜行狀載在私記、

越侯小臣下肖嗣南山景衡立

〔前田家舊記〕

南部草壽　號古硯子

元祿年中、御二代正市公、肥前國長崎の住人なりしを、御儒者に御召抱、組外組五十人扶持被下之候、但し此人此年譜省略と云、全部八卷を著述せり、是は東照神君御誕生より、薨御の翌年迄、凡七十六年間之年々の大概を記したる書なり、

石碑の銘富山五番町春日山光嚴寺にあり、

〔近代名家著述後篇〕卷

徒然草諺解　五

感應編俗解　二

南部草壽（名草壽、字子壽、號沈軒、平安人）

職原抄支流　二
憶ひ多志　三

二十二日、辛卯、兩藩、士民の宗門を調査し、是日、富山藩、幕府に切支丹類族の異狀なきを稟告し、尋て又類族の生死嫁娶を上申す、

〔年代記〕元祿元年戊辰、村々家數男十歳以上帳面取立、

〔宗門改舊記〕

一切支丹宗門徒前々無懈怠、今以相改申候、先年被仰出候、御法度書之趣彌相守、私領中在々所々ニ至迄遂穿鑿、家中之者下々迄、是又致僉儀候處、不審成者無御座候事、

一古切支丹之類族之者共迄、常々之行跡疑敷儀無御座候事、

一領中在々所々、家中之者下々又ものに至迄、若此已後不審成者於有之者、早々可申達候事、

元祿元戊辰年十一月廿二日　松平大藏大輔御判御印

稲生五郎左衛門殿

藤堂伊豫守殿

越中國新河郡富山轉切支丹類族

一轉切支丹之本人金子藤兵衛孫、浪人岡山新右衛門男子當辰八月二日出生、岡山市彌與申候、新右衛門同居、宗旨幷且那寺父同前ニ御座候、以上、

元祿元戊辰年十二月十日　御名御判ナシ

藤堂伊豫守殿

稲生五郎左衛門殿

越中國新河郡轉切支丹類族病死之者覺

一妙光

右者轉切支丹、田近七左衛門世悴澤秀姑、當辰七月廿四日八十四歳ニ而病死仕候、則死體相改、遂吟味候之處、依無異儀、越中國新河郡一向宗蓮照寺ニ而取置申候、

右之通相違無御座候、爲其如此候、以上、

元祿元戊辰年十二月十日　御名判御印判

藤堂伊豫守殿

稲生五郎左衛門殿

淺野十兵衛方ゟ覺書之寫

一稻生五郎左衛門殿江伴源兵衛同道仕罷越、津田勘兵衛類族津田與右衛門、同五右衛門義相寬候處、五郎左衛門殿御直ニ被仰聞候者、津田勘兵衛古轉切支丹ニ付、右之類族此度加賀守殿ゟ御書上候、御家來ニ右之類族者兩人有之候、御自分ゟ茂御書上可被成候哉、被入御念御尋之趣致承知候、元帳ニ加賀守殿ゟ御書上之事候へ者、御自分ゟ被仰上不及候、寀前清帳御上被成時分、類族數多無之者ハ本帳ニ被附候樣御指圖申候、此度之儀茂其通ニ御心得被成候樣御申候、

一五郎左衛門殿被仰聞候者、宗門類族之者共、遠國ニ而聞を恐、賣買等ニ茂懈義可有之候、邪宗門ニかたむき爲不申之御吟味ニ候得者、於類族罪者無之候、惣體類族之者常々きすみ不申樣、奉行人ニ申聞置可申由、

壬正月五日　淺野十兵衛

轉切支丹類族嫁娶之覺

一越中國新川郡富山轉切支丹、岡部八兵衛孫本人同前古藤澤伊兵衛世忰當藤澤伊兵衛、當巳二月九日同郡同所赤尾覺太夫與申者之娘つま三十三歲嫁娶

仕候、つま儀夫、同宗同郡同所日蓮宗乘光寺旦那ニ罷成候、爲御斷如此御座候、已上、

元祿二己巳年七月晦日　御名但御判ナシ

藤堂伊豫守殿

小幡三郎左衛門殿

轉切支丹類族離別之覺

一越中國新川郡富山轉切支丹、岡部八兵衛孫本人同前古藤澤伊兵衛娘ふち義、同郡同所町人吉野屋覺右衛門與申者之妻ニ而御座候處、當巳六月廿九日離別仕候、依之、ふち義當歲之娘なへともに、兄當藤澤伊兵衛方江歸、罷在候、夫同宗ニ而候處、此度兄同宗ニ替、同郡同所日蓮宗乘光寺旦那ニ罷成候、爲御斷如此御座候、以上、

元祿二己巳年七月晦日　御名無御判

藤堂伊豫守殿

小幡三郎左衛門殿

轉切支丹類族出生之覺

一越中國新河郡富山轉切支丹、岡部八兵衛孫本人同前娘ふゝ、當巳六月九日女子出生なへと申候、母同居宗旨幷旦那寺同前ニ而御座候、爲御斷如此御座候、已上、

元祿二己巳年七月晦日　御名（無御判）

藤堂伊豫守殿

小幡三郎左衛門殿

致追啓候、先日被仰出候宗門之義ニ付而、今月御用番藤堂伊豫守殿江相窺候處、左之通御座候、

一類族之者、妻於離別仕ハ、其趣御書判御印判を以御斷書付出申候、其節御帳面御消之由ニ御座候、

一本人同前之者之聟娶共ニ御書上之筈御座候、依之類族之者嫁娶仕候得者、其趣御書付出申旨ニ御座候、

一出生人及二三人ニ書付上リ申筈ニ候得共、向後ハ壹人ニ而茂、七月十二月切可被書上之由ニ候、右之品々其御地ゟ御書付被遣ニ茂及申間敷候間、爰許ニ而考日數、御別紙を以相調指上可申候、其以後御書付之寫其許江可相達之候恐々謹言、

巳八月六日　　三輪彌市右衛門
大竹十郎左衛門
淺野十兵衛

宛所六人

轉切支丹之類族病死之覺

一越中國新河郡富山轉切支丹、岡部八兵衛曾孫本人同前古藤澤伊兵衛孫ふじ、娘なへ、當午四月九日二歳ニ而致病死、旦那寺右富山日蓮宗乘光寺ニ而取置申候、

右之通類族壹人致死去候間、爲御斷如此御座候、以上、

元祿三庚午年七月廿三日　御名（御判御印）

藤堂伊豫守殿

小幡三郎左衛門殿

一小島半六召仕之女ニ男子出生ニ付、右母之義御書上被成候筈ニ可有御座候哉、與切支丹御奉行役人中江相尋候處、召仕下女ニ而御座候得者、不及御書上

候、妾與定候得者、御書上之筈ニ御座候由申候、

一岡山新右衞門此度又男子出生之由、左候而ハ子供兩人迄出生之義ニ御座候間、女之義御書上被成筈ニ御座候、惣而妾與定候得者、御書上之筈ニ御座候、此通富山御役人中江可被仰遣候、以上、

正月十四日

淺野十兵衞
大竹十郎左衞門
藤堂平左衞門

御用所

午夏窺候品江戸ゟ參候紙面、未四月九日御寄合所ゟ御渡候拔書、

一召仕之女本妻ニ直候時ハ、嚴前召仕ニ而候得共、子出生ニ付而本妻ニ相極候由被書上筈ニ候、岡山石松母茂本妻與被書上樣ニ存候、於然ニハ當七月、石松義被書上節申上可然候、

一半六召仕之女、一年切ニ出候得者、不及御書上候、子出仕ニ付而、其通於罷在者、被書上筈ニ候、妻妾之差別申來候樣仕度候、

一醫師等ニ成、剃髮女者尼ニ成、名をも改度願之者ハ、前廉金澤江可有案內紙面披見候、右之品尤御奉行江前廉窺筈ニ候、

一金澤奉行ゟ忌懸出生死去候ハヽ、案內可有之由ニ付、勿論富山ゟ可申參與存候、其節承候者、加州樣聞番江茂樣子次第ニ可申談候旨、何比被相達旨、拙者共承度由也、

轉切支丹之類族出生之覺

一越中國新河郡富山轉切支丹、森古六右衞門曾孫本人同前むめ孫小島半六悴當午十月出生、小島半三郎與申候、居所宗旨旦那寺父同前ニ而御座候、右之通類族壹人致出生候、爲御斷如此御座候、以上、

元祿三庚午年十二月廿二日　御名不及御判形

高木伊勢守殿　藤堂伊豫守殿

轉切支丹類族召仕之下女致妻候覺

轉切支丹森古六右衞門娘、本人同前むめ世悴小島半六妻、

當未弐拾壹歲

一なつ　日蓮宗　越中國新河郡富山正願寺旦那

此女加賀國石川郡小立野松平加賀守家來、前田大膳與力筒井三郎右衞門與申者之娘ニ而御座候、右轉切支丹森古六右衞門孫小島半六下女ニ召仕

候處、世忰出生付而、當二月十四日致妻候、
右之通候之間、爲御改如是御座候、以上、
元祿四辛未年七月九日　御名連
藤堂伊豫守殿　小幡三郎左衛門殿

切支丹之類族出生幷召仕之下女致妻候覺

一亡父淡路守召仕切支丹本人金子藤兵衛曾孫、本人同所こま孫岡山新右衛門忰、去午之十二月出生、岡山石松與申候、居所宗旨旦那寺父同前ニ而御座候、
右本人同前こま世忰岡山新右衛門妻、當未弐拾四歳
一きち　淨土宗越中國新河郡宮山守山極樂寺旦那
此女越中國新河郡富山町、浪人波田久兵衛與申者之娘ニ而御座候、右切支丹本人藤兵衛孫岡山新右衛門下女召仕候之處、世忰出生ニ付而、當未正月廿五日致妻候、
右之通候間、爲御斷如此御座候、以上、
元祿四辛未年七月九日　御名乘
藤堂伊豫守殿　小幡三郎左衛門殿

轉切支丹之類族病死之覺

一轉切支丹岡部八兵衛忰、私家來本人同前藤澤伊兵衛聟、しめ夫、杉野半兵衛、當未六月十六日五十四歳ニ而致病死、旦那寺越中國新川郡富山淨土宗來迎寺ニ而取置申候、
右之通類族壹人致病死候間、爲御斷如此御座候、以上、
元祿四辛未年七月九日　御名（御印御判）
藤堂伊豫守殿　小幡三郎左衛門殿

轉切支丹之類族病死之覺

一越中國新川郡富山轉切支丹田近七左衛門娘、本人同前六左衛門妻なつ、當未十月三日五拾歳ニ而致病死候、旦那寺同國婦負郡日蓮宗本法寺ニ而取置申候、
右之通類族壹人致病死候間、爲御斷如此御座候、
元祿四辛未年十二月十六日　御名（御印判御書判）
藤堂伊豫守殿　小幡三郎左衛門殿

一津田與右衛門病死ハ、金澤ゟ就被仰上御書付不出、

一本人金澤御領在之類族、當御領ニ住居候、津田甚右衛門、北辰、津田五右衛門、此三人元祿辛未年八月十八日、伊豫守殿三郎左衛門殿江壹通宛始而御書付御出シ候、

右切支丹之類族住居所替候覺

一越中國新川郡富山町人、古切支丹伊右衛門孫、本人同前くら娘さこ義、同國婦負郡舟橋町賣人江、一季居奉公仕度之旨願申ニ付、當申ノ二月ゟ奉公爲仕申候、右之通類族壹人居所替候間、爲御斷如斯御座候、以上、

元祿五壬申年七月廿三日　御名無御判

小幡三郎左衛門殿　前田安藝守殿

今般ハ家前ゟ之紋ニ候故、右御書付相納リ候、重而ハ類族一季居奉公ニ出候義、不及御届旨、三郎左衛門殿役人ヲ以被仰聞候由、

覺

先頃相伺候、轉切支丹田近七左衛門世忰、澤秀妻ふく七十歳當二月廿日病死ニ付而品々遂吟味、旦那寺日蓮宗富山於本壽寺取置申候、尤松平加賀守奉行人方江、右之趣早速以飛札申屆候、追帳加賀守方ゟ書上候、類族共異變之節者、先頃被仰渡候通、加賀守奉行人江申屆、此方ゟは彌公儀御奉行樣江者、御案内不申上事濟申候由、大藏大輔宗門改役之者共方江申遣候、此段爲念重而相伺申候、以上、

七月十八日

右之通覺書を以重而相窺候處、彌此通リ相違無之由、小幡三郎左衛門殿役人中申候、

一右之類族共金澤江屆事濟者候者、聞番中迄爲知可申由、

右切支丹類族出生之覺

越中國新川郡富山、賣人古切支丹伊右衛門孫、本人同前くら嫡女さこ儀、仝國婦負郡舟橋町油屋彦兵衛方江奉公ニ出候處、致妾、當申十一日忰出生三平與申候、居所宗旨父同前、右婦負郡愛宕村一向宗乘光寺旦那ニ而候、

右之類族壹人致出生候間、爲御斷如此御座候、以上、

元祿五壬申年十二月廿六日　御名無御判

小幡三郎左衛門殿　前田安藝守殿

切支丹類族出生之覺

越中國新川郡富山、切支丹本人金子藤兵衛曾孫、本人同前こま孫岡山新右衛門娘、當酉七月出生さんと申候、居所宗旨父同前、右新川郡富山一向宗妙樂寺旦那ニ而御座候、

右之類族壹人致出生候間、書上申候、以上、

元祿六年七月九日　赤尾　堀田

御寄合所

切支丹類族病死之覺

越中國新川郡富山、切支丹本人金子藤兵衛孫、本人同前こま世怜岡山新右衛門妻きち、當酉七月六日貳拾六歳產後致病死候、旦那寺越中國新川郡富山淨土宗守山極樂寺ニ而取證申候、

元祿六年七月九日　赤尾　堀田

御寄合所

右切支丹之類族出生之覺

越中國新川郡富山、古切支丹金子藤兵衛嫡女、本人同前こま孫岡山新右衛門娘、當酉七月出生さんと申候、居所宗旨旦那寺父同前ニ而御座候、

右之通類族壹人致出生候間、爲御斷如此御座候、以上、

元祿六癸酉年七月廿三日　御名無御判　小幡三郎左衛門殿　前田安藝守殿

右切支丹之類族病死之覺

越中國新川郡富山、古切支丹金子藤兵衛嫡女、本人同前こま娶岡山新右衛門妻きち、當酉七月六日貳拾六歳ニ而病死、旦那寺右新川郡富山淨土宗守山極樂寺ニ而取證申候、

右之通類族壹人致病死候間、爲御斷如此御座候、以上、

元祿六年癸酉七月廿三日　御名御書判御印判　小幡三郎左衛門殿　前田安藝守殿

亡父淡路守家來、轉切支丹森古六右衛門次男、父不轉以前出生、本人同前森古雲仙義、元祿十五壬午年二月九日病死、年齡七拾九歳、禪宗江戸西久保於靑龍寺土葬ニ取證申候、

右之通及承候付而、爲御屆如斯候、以上、

寶永元甲申年十二月十四日　松平大藏大輔印判

小幡上總介殿　松前伊豆守殿

死去人可在御案內覺

一澤田近七左衛門世忰不輙以前之子本人同事秀　日蓮宗越中國新川郡富山本壽寺旦那　當辰七十二才

一く伊右衛門娘不輙以前之子本人同事ら　一向宗越中國新川郡富山妙榮寺旦那　當辰四十六才

右兩人死去候得者、死體相改鹽詰ニ仕被指置御窺之筈

一さ伊右衛門孫女但くら娘ご　一向宗越中國新川郡富山妙榮寺旦那　當辰二十二才

一吉伊右衛門孫但くら世忰三郎　一向宗越中國新川郡富山妙榮寺旦那　當辰十九才

一與伊右衛門孫但くら世忰三郎　一向宗越中國新川郡富山妙榮寺旦那　當辰十六才

一ば伊右衛門孫女但くら娘て　一向宗越中國新川郡富山妙榮寺旦那　當辰十三才

一ゆ竹林半兵衛廷但ゆき娘り　禪宗越中國新川郡寂勝寺旦那　當辰四十才

一ね竹林半兵衛廷但ゆき娘ゝ　禪宗越中國新川郡寂勝寺旦那　當辰三十才

一藤澤伊兵衛孫但藤澤古伊兵衛世忰岡部八兵衛孫但藤澤古伊兵衛世忰　日蓮宗越中國新川郡富山乘光寺旦那　當辰四十一才

一同源八岡部八兵衛孫但藤澤古伊兵衛世忰　日蓮宗越中國新川郡富山乘光寺旦那　當辰三十八才

一同甚六岡部八兵衛孫但藤澤古伊兵衛世忰　日蓮宗越中國新川郡富山乘光寺旦那　當辰三十三才

一し岡部八兵衛孫女但藤澤古伊兵衛娘杉野半兵衛妻め　淨土宗越中國新川郡富山來迎寺旦那　當辰二十九才

一ふ岡部八兵衛孫女但藤澤古伊兵衛娘吉野屋覺右衛門妻じ　日蓮宗越中國新川郡富山乘光寺旦那　當辰二十四才

一杉野半兵衛古藤澤伊兵衛聖但しめ夫　淨土宗越中國新川郡富山來迎寺旦那　當辰五十一才

一吉野屋覺右衛門古藤澤伊兵衛聖但ふじ夫　一向宗越中國射水郡高岡專福寺旦那　當辰廿五才

一小嶋半六森古六右衛門孫但小泉與右衛門世忰　日蓮宗越中國新川郡富山正顯寺旦那　當辰廿八才

一は森古六右衛門孫女但丹羽五左衛門妻ち　日蓮宗越中國新川郡富山正顯寺旦那　當辰三十六才

一る森古六右衛門孫女但しち娘圓乘坊妻子は　日蓮宗越中國新川郡富山正顯寺旦那　當辰廿九才

一丹羽五左衛門森古六右衛門孫女はち夫　禪宗越中國新川郡富山全慶寺旦那　當辰五十八才

一彌兵衛田近七左衛門孫但六左衛門世忰　日蓮宗越中國婦負郡本法寺旦那　當辰二十才

一四郎田近七左衛門孫但六左衛門世忰押上村半兵衛妻子　日蓮宗越中國婦負郡本法寺旦那　當辰十三才

一吉田近七左衛門孫但六左衛門世忰　日蓮宗越中國婦負郡本法寺旦那　當辰十才

一ふ田近七左衛門世忰秀妻く　日蓮宗越中國新川郡富山本壽寺旦那　當辰六十六才

一なつ田近七左衛門世忰六左衛門娘　日蓮宗越中國婦負郡本法寺旦那　當辰四十七才

一いぬ六左衛門姑但なつ母　日蓮宗越中國婦負郡本法寺旦那　當辰六十七才

一岡山新右衛門（金子藤兵衛孫但こま世悴）一向宗越中國新川郡富山妙樂寺旦那　當辰三十六才
是迄本命清帳之表貳十六人
一津田甚右衛門（津田十左衛門甥）日蓮宗富山寺町長蓮寺旦那　當辰六十七才
一北辰（松本吉右衛門孫但宗仙世悴）富山光殿寺弟子　當辰廿七才
申三月金澤御領ヒ所替
此兩人死失之節品々覺書別帳に記在之
〆貳十八人
貞享五年辰十月九日改之
清帳御上候以後出生人之覺
一杉親助松（藤澤古伊兵衛孫但杉野半兵衛世悴）淨土宗越中國新川郡富山來迎寺旦那　當辰七才
右御斷書別紙ニ在之、生國越中新川郡富山
貞享五年辰九月廿日　松平大藏大輔御判ナシ
稻生五郎左衛門殿
一岡山市彌（古轉切支丹金子藤兵衛姪、こま孫但岡山新右衛門悴）一向宗越中國新川郡富山妙樂寺旦那　當辰出生
右被仰上御證文之寫別紙ニ在之

一津田五右衛門（津田勘兵衛甥古津田五右衛門養子）禪宗富山寺町海岸寺旦那　當辰四十六才
一津田與右衛門（津田勘兵衛甥）禪宗富山本町海岸寺旦那　當辰五十才
右與右衛門五右衛門儀、戊辰十二月廿六日金澤宗門奉行ゟ拔帳來ル、
一つ（古藤澤伊兵衛世悴藤澤伊兵衛妻）まな日蓮宗越中國新川郡富山乘光寺旦那　當巳三十三才
一なへ（岡部八兵衛孫女ふじ姪）日蓮宗越中國新川郡富山乘光寺旦那　當巳（六月九日出生）
右つまなへ義己巳七月晦日御證文御指上
一小嶋半三郎（森古六右衛門曾孫但小島半六世悴）日蓮宗越中國新川郡富山正顯寺旦那　當午出生
右半三郎義庚午十二月廿二日御證文御指上
一岡山石松（金子藤兵衛曾孫但岡山新右衛門世悴）一向宗越中國新川郡富山妙樂寺旦那　當午出生
右石松義辛未七月九日御證文御指上
一きち（金子藤兵衛孫岡山新右衛門妻）淨土宗越中國新川郡富山守山極樂寺旦那　當未廿四才
右きち義辛未七月九日御證文御指上
一なつ（森古六右衛門孫小島半六妻）日蓮宗越中國新川郡富山正顯寺旦那　當未廿一才
右なつ義辛未七月九日御證文御指上
一三平（伊右衛門曾孫但さゝ世悴）一向宗越中國婦負郡愛宕村乘光寺旦那　當申出生

右三平義壬申十二月廿六日御證文御指上　　六六二
金子藤兵衛曾孫但岡山新右衛門娘
一さん　一向宗越中國新川郡富山妙樂寺旦那　當酉出生

〔組中人々手前品々覺書帳〕　抄　○元祿二年城ヶ端町東下組合頭三右衛門ノ分

百五年以前ニ先祖次郎兵衛、礪波郡野尻村より罷越、四代居住仕申候、但當太郎兵衛義居町野尻屋九郎兵衛弟ニ而、先太郎兵衛病死仕、四年以前ニ聟入ニ參り申候、

一年三拾一　　野尻屋太郎兵衛

淨土眞宗、寺は當地善德寺旦那、

一家職ハ、質屋并絹商賣仕申候、

一蠟中折目的人元祿五年ゟ、被爲仰付候、

居屋敷

一町口四間四尺四寸、後江拾壹間壹尺、歩數五十貳歩七厘、

御地子米、七斗二舛二合、　壹軒役

一畠方御年貢米、四斗壹舛九合四夕、

〆壹石壹斗四舛壹合四勺、

一居町、木樂屋與兵衛樂種請人相立申候、

一年五十二　　同人姑　ます

同宗同寺　　同人妻　つた

一年拾八

同宗同寺　　同人小姑　きち

此者、先太郎兵衛娘、

一年拾貳　　同人娘　く

同宗同寺

一年三つ　　同人手代　清吉

一年貳拾五

同宗、寺ハ當地宗林寺旦那
此者、當地新町森本屋次郎兵衛せがれ、請人親次郎兵衛相立申候、　同人下人九兵衛

一年二十七
同宗、寺ハ礪波郡北の三ヶ村皆念寺旦那
此者、同郡是安村四郎兵衛忰、請人同郡細野村庄助、　同人下人與九郎

一年拾六
同宗、寺ハ今石動道林寺旦那
此者、礪波郡北の三ヶ村權兵忰、請人同村仁兵衛、　同人下女みつ

一年五拾
同宗、寺ハ礪波郡金戸村、專德寺旦那、
此者、同村是安村八兵衛姉、口添人當地東新田町とりや與八娘ゑよ、　同人下女あい

一年十八
同宗、寺ハ當地善德寺旦那、
此者、當地西町らうそくや茂兵衛妹、口添人同町かちや作藏母たね　同人下女こや

一年二十三
同宗、寺ハ礪波郡井波瑞泉寺旦那
此者、同郡谷村四兵衛娘、口添人右たね　同人下女あき

一年二十八
同宗、寺ハ礪波郡井口村、光德寺旦那、
此者、同村仁右衛門娘、口添人居町淺地屋與四兵衛妻とく、
〆拾貳人　内　四人男　八人女

〔參考〕
〔越中史略〕　上古、王政の盛んなりし頃には、戸籍の制嚴格に整ひたりしなら

ん、然るに武家政權を握り、王政敗墟するに及びては、戸籍もおのづから絶えたるなるべし、德川氏の世に至り、加越能三州は、前田氏の領に歸せしより後、後西院天皇（第百十代）萬治三年、領國内へ左の如く令したり、

覺

一在々百姓、並頭振男の分人數、一ヶ村切ニ十村帳面ニ記可置事、

一向后、男子十歳ニ成候者帳面ニ書加へ、他國へ遣シ申間敷事、

右郡中並ニ宿々、急度可被申渡候、每年春秋兩度可被相改候、以上、

靈元天皇（第百十一代）寛文年中、前田氏は領國内へ對し、人身賣買を禁じ、又百姓の他國へ脫走するを認めて、藩へ告ぐるものには、褒賞を與ふる旨を令し、且百姓より町人に婚嫁するを制限す、然れども當時耶蘇敎の禁を嚴にせし爲め、每年僧侶をして、每戸の宗門改をなさしめ、遂に出生死亡婚姻出稼等すべて戸籍上の取締は、全く僧侶の手に歸したる者の如し、肝煎十村の人別帳（即ち戸籍）も、僧侶の調査せし者によりて、之を造るの例となりぬ、故に戸籍の出入に關する書類には、主としてその宗門の何たるを明記し、檀那寺の證明書（即ち寺證文）を添附するにあらざれば戸籍を移動すること能はざりしなり、今左に後櫻町天皇（第百十六代）明和年中に係る、借宅人の送り狀を掲けて其一例を示す、

借宅人送り狀の事

覺

一礪波郡立野村、孫六忰長一ト申者、高岡鴨島町伊勢領屋五平方ニ、借宅仕申候、右長一御郡方ヨリ御構無之者ニ御座候、宗門ノ義ハ、親孫六同宗ニテ、笹川村廣濟寺旦那ニテ、則寺證文ヲ取爲指上申候、尤切支丹宗門末類ニテモ無御座候、勿論御公儀相背申者ニテモ無御座候、爲其送リ狀如件、

礪波郡立野村肝煎　名　印

年月日

高岡町
肝煎衆中

その寺證文の書式は左の如し、

覺

一何宗　何村（町）何屋誰聟（忰）　誰

右之者、當寺旦那ニ紛無御座候、爲其寺證文如件、

御奉行所　何村(町)肝煎　誰

右之通ヲ承屆申所、相違無御座候以上、

十二月庚子朔

加賀藩、捨馬を申禁す、

〔御高札寫帳〕　捨馬之儀付段々被仰出處、頃日も捨馬仕候者有之候、急度御仕置可被仰付候へ共、先此度は流罪被仰付候、向後捨馬仕候もの於有之者、可被行重科者也、

十二月　日

元祿二年己巳（紀元二千三百四十九年）

三月戊戌朔

富山藩、江戸邸を築造す、

〔前田氏家乘〕　二年三月江戸邸ヲ造築セラル、是ノ地ハ天和二年燒失ノアトトセラル、蓋シ幕府ノ制ニ摸セ也、

六月丙寅朔

富山藩、算用場を勘定所と更む、

〔前田氏家乘〕　六月、算用場ノ稱ヲ更メ勘定所トセラル、蓋シ幕府ノ制ニ摸セラレシトイフ、（一本ニ四年八月トアリ、）

是秋、射水郡氷見火あり、

〔憲令要畧〕　乍恐、去秋氷見火事人共家、申次第御尋ニ付書上申、

覺

一四百三十九軒　火事家

内貳百四拾七軒　立家

八拾壹軒　八月中相立申家

百拾壹軒　大船乘又ハ方々江罷越申者共之分罷歸次第家爲造可申也

右之通相違無御座候、以上、

元祿二年七月二十七日　五右衛門　安兵衛

七右衛門　彌三右衛門

篠島豐前樣

算用聞傳寄町年興

六右衛門　安右衛門
權右衛門　作兵衛
加兵衛
善右衛門　六左衛門
六兵衛　次右衛門

元祿三年庚午　紀元二千三百五十年

四月　壬戌朔

六日、丁卯、滑川大火、

〔國事昌披問答〕　元祿三午年四月六日、越中滑川家四百軒燒、

是月、富山入口に柵門を建て、官道に番所を設く、

〔前田氏家乘〕　富山町、入口諸方柵門建築、稻荷町、愛宕新町ノ兩口ハ、官道ニ付番所造築、非常ニ備ヘラル、

十二月　丁巳朔

富山藩、封內の窮民に廩米を貸與す、

〔前田氏家乘〕　十二月、封內難澁人ノ爲メ、倉廩ノ米二千石、永年賦ヲ以テ貸與セラル、

是歲、正甫、諸侯の請に依り、富山商人をして始めて反魂丹を製し諸國に鬻かしむ、

〔前田氏家乘〕　公一日腹痛ヲ感セラル、ヤ、侍醫藥ヲ奉レトモ癒ヘス、偶々近臣日比野小兵衛、座右ニ在リ、懷ニ藏セシ反魂丹ヲ奉ル、公之ヲ服シ給ヒケルニ速カニ癒エタリ、公大ニ其奇功ヲ奏セシヲ感セラレ、何レヨリ之ヲ得シヤト問ハセラル、小兵衛謹テ對テ曰ク、臣嘗テ命ヲ以テ肥前長崎ニ到リシ時、備前國片上ノ藩醫萬代淨閑ナルモノニ、羈旅亭ニ逢ヒ之レト語リテ喜ヒ、交誼日ニ厚シ、小兵衛一日腹痛シ、百方手ヲ盡セトモ癒エス、淨閑一丸藥ヲ與フ取リテ服シケレハ痛忽癒ヌ、此ニ於テ其藥劑ヲ傳受シ、自製以テ不虞ニ備フルモノ卽チ此反魂丹ナリト、公曰ク奇藥人ノ患ヲ救ヘハ、何ソ秘密ヲ要スベケンヤト、乃チ其法ヲ說カセ藥ヲ調製セシメ常ニ藏セラル、他日江戸營中ニ在ラセラル、一諸侯頓ニ病アリ、殆ント死ニ類セントス、公反魂丹ヲ與ヒラレシニ忽チニ常ニ復ル、此

ノ時在列ノ諸侯其奇驗ヲ感ジ、各州ニ此ノ藥ヲ差遣シ、賣與セラレンコトヲ請ハル、公此レヨリ松井源右衞門ニ命シ、製藥ノ主擔トシ、大國ハ二人小國ハ一人ノ比例ヲ以テ各地ニ販賣セシメ、猶且ツ密ニ藩地ノ事情ヲ探索セシメラル、是レ富山賣藥ノ嚆矢ナリ、封內會々痢病瘧疾流行ス、時公自カラ藥ヲ練リ施與セラル、其心ヲ衞生ニ用ヰ、衆ヲ愛セラレシモノ亦知ルベシ、

〔富山賣藥沿革概要〕　富山賣藥ノ濫觴ハ、今ヲ距ルコト二百二十餘年前、即チ天和年間ニ在リ、當時備前國岡山ノ醫師淨閑、富山城下ニ來遊シ、藩主前田正甫公、製藥ヲ好ムコトヲ聞キ、反魂丹ヲ調製シテ獻上セシニ、公大ニ其方劑宜シキニ感ジ、待臣ヲシテ傳習セシメ、尋テ藥御用達店主松井屋源右衞門ニ調製法ヲ傳授シ、汎ク販賣スルコトヲ免許セラル、之レヨリ數年ヲ經テ、八重崎屋源六ナルモノ、松井屋ノ調製セル反魂丹ヲ持シ、諸方ニ行商セシガ、元祿庚午ノ年ニ至リ、公江戸ニ祗役シ、一日幕府ニ參勤セラル、ヤ、同勤ノ諸侯中急病ヲ發スルモノアリ、既レモ狼狽ノ色アリシニ、公獨徐々トシテ帶ブル所ノ印籠中ヨリ、反魂丹ヲ出シテ服用セシメラレシニ、病者倏チ平癒ス、滿坐其奇功アルニ驚キ、當時各藩割據ノ制嚴ナルニモ拘ラズ、獨リ富山ノ賣藥者諸國ニ行商シテ、汎ク反魂丹服用ノ便ヲ得セシメンコトヲ要請ス、公性慈仁直チニ之ヲ承引シ、急使ヲ馳セテ松井源右衞門ニ命ジ、諸國ニ行商スル準備ヲ爲サシム、當時八重崎ヲ除ク外、行商スルモノナカリシガ、公ノ此命アリショリ日ヲ逐ヒ增加シ、竟ニ日本國中到ル處、反魂丹ノ奇効ヲ贊稱セザルハナク、越中富山ノ商人ト云ヘハ、直ク反魂丹屋ト速了スル狀勢ヲ現ジ來レリ、

〔富山縣敎育會調査〕

賣藥ノ濫觴

今ヲ距ル凡ソ二百四十四年、天和ノ頃、備前國ニ淨閑ト云フ醫師アリ、來リテ富山ニ遊ブ、富山當時ノ藩主富山侯ハ十萬石ニシテ加賀前田家ノ分家ナリ、松平大藏大輔正甫公製藥ヲ喜ブト聞キ、乃チ反魂丹ナルモノヲ調製シテ之ヲ公ニ獻ズ、公其法劑ノ凡ナラザルヲ感ジ、侍臣某ナルモノヲシテ、其處方ヲ受ケシメ、又藥舖松井屋源右衞門ナルモノニ、其方劑ヲ授ケ普ネク之ヲ販賣スルヲ許ス、是レ卽チ富山賣藥ノ濫觴ナリ、

行商　濫觴

頃ハ元祿庚午ノ年ナリキ、正甫公江戸幕府ノ廷ニ朝ス、各諸侯亦列座席ニ在リ、

偶々某公卒爾病發リ甚タ急、正甫公卽チ所持ノ反魂丹ヲ出シテ之レヲ進メシニ病卽時ニ治ス、列座ノ諸侯大ニ其奇効ニ驚キ、各封內ニ販賣アランコトヲ請フテ已マズ、公仍テ松井屋源右衞門ヲシテ、其調劑ニ從事セシメ、八重崎源六ヲシテ諸國ニ行商セシム、富山反魂丹ノ名其藥囊ト共ニ是レヨリ各地ニ傳播セシモノニシテ、富山市梅澤町妙國寺ナル一庵ニハ、今尙淨閑翁ノ肖像ヲ安置シ且ツ碑アリ、八重崎源六ノ靈ト共ニ歲時奉祀セラレ、又タ市民ハ松井屋源右衞門及ト當時ノ藩主正甫公ノ爲メニモ歲時祭典ヲ行フ由ニテ、藩政ノ時代ニハ松井家ニハ藩主ヨリ年々銀三十枚宛ノ下賜アリシト云フ、

〔越中舊事記〕　富山反魂丹ハ、正甫公御代備州の淨閑と申者の秘法成を、日比野小兵衞を以傳法被仰付候、其後諸人のため賣出し候義可然と被仰出、右小兵衞より松井屋源右衞門と申者へ傳ひ、夫より賣り出し段々諸國へ賣弘め、今日本六十餘州右賣人組を定め、六十餘州に十八組と定め、一組每に掟を立是を永續帳と云、每歲他國へ出人三千人餘といふなり、

〔妙國寺舊記〕　以書附奉願候

拙寺に前々より傳敎大師の御作藥王菩薩之尊像、並反魂丹元祖淨閑居士木像、同墓所御座候、其濫觴は正甫院樣御代御近習之內日比野小兵衞と申方、御內御用として肥前國長崎表に發足、其砌備前國片上と申市中醫師萬代淨閑として、同國岡山公より十人扶持給り候者有之、此人も同長崎表に相越申候、同時の事故中國筋より道中跡や先に相成何となく懇意に相成、小兵衞方長崎逗留の折、持病指發甚腹痛にて難儀仕候節、萬代家秘法、世に無比類妙藥反魂丹を淨閑より與へ、則相用候處卽時に快氣有之、小兵衞方甚感心仕候、依而小兵衞自藥之爲製法傳授仕、歸國の上傳法之通反魂丹製藥仕、自藥に相用、其外病苦の者へ施し候に、功能著しく深珍重仕居候、然るに正甫院樣或時御腹痛御惱に付、種々被遊御療養候へ共其驗無御座候に付、小兵衞方より反魂丹被指上、則御用御座候處、速に被遊御全快、功能之程を被遊御感賞候て、被仰出候者、かゝる妙藥奇法を秘し置事、世にも惜敷ものなりとて、市中藥種店松井屋源右衞門へ藥法丁賣弘方御授に付、製藥仕賣弘候處、諸人用候に功能あらざる事なく、世上擧つて稱歎仕候、依て諸國へも賣弘候樣被仰出候に付、反魂丹の外に奇應丸等二三品差加へ、源右衞門手代の者相雇候內、拙寺檀那八重崎屋源六先祖源兵衞と相名乘、中國

筋賣弘候折、日比野より書翰等持參、備前國片上驛淨閑方へ罷越相渡、夫より毎年罷越入魂に相成候處、立山之熊膽並黃連等は海內一の德品に付、及懇望候故、五六年も引續持參仕候へ者、淨閑厚悅ひ甚しく相成、後には親子の如くにて、一家內の者とも深く相睦居候處、淨閑も不圖病氣指發、源兵衞も手を盡し介抱致候へ共、其甲斐なく終に相果申候、其以前淨閑存世中、右藥王菩薩之尊像を安置仕居申候、元來此菩薩は法華經に藥力を以て諸人の病苦を救ひ、現世安穩之誓願を御立御座候と相見得申候、故に淨閑儀藥方守護の尊像と、崇敬仕居候由に御座候、然るを源兵衞も深く信仰仕居候故、及懇望、貰受、猶淨閑之分骨申請、歸國之上尊像を拙寺へ奉移、且淨閑の墓所相築、猶亦木像彫刻安置仕、賣藥方守護且反魂丹元祖と尊み候儀に御座候、然るに淨閑子孫は、于今彼地に歷然と相續罷在申候、前後來由等の書物八重崎源六方に所持仕居候處、天保年中の大火の節燒失仕、猶拙寺にも所持仕候處、先年替無住の折、彼是混雜候中に紛失仕候と聞傳申候、然るに藥力の功德により、明和年中に至つては、賣藥の人數大勢に相成手廣く賣弘、其砌も人數株極に被仰付、御冥加金指上來、自然と御當所の御產物に相成、廣大に相弘り、今は國々不賣弘等も無之彌增繁昌仕、御當所の潤に相成

數多之賣藥人共小者に至迄、歸國之上爲御初穗藥王菩薩並淨閑居士の靈前へ金錢奉納仕、猶亦文政年中以來、反魂丹方御役所より爲御祈禱料、毎歲金子一兩宛を以御寄附御座候、尤も尊像等安置以來、毎歲四月八日、法會執行仕國家安穩藥力相應、賣藥人旅出無難商賣繁榮之たる抽丹誠祈念仕來申候、就ては今度御願申上候は、法會之砌相用候幕並提灯等に、御紋所拜領仕度偏に奉願候、何卒願之通被仰付被下候はゝ、寶前莊嚴のため、且諸人も一入重く尊敬可仕と奉存候、

嘉永三戊年七月　妙國寺

御產物方御役所御中

元祿四年辛未（紀元二千三百五十一年）六月（乙卯朔）

二日、（丙辰）富山藩、藩士をして武を講せしむ、

〔諸藝雜志〕七　元祿四年六月二日、御家中之面々武術、左之面々へ及示談候樣

佐藤四郎左衞門（大島逕平高第之由）

被仰出、

鉾術

太刀　山口宗久
居合　高衣久兵衛
弓　伊東與兵衛
鐵炮　吉田傳彌
馬術　日比小兵衛
若松幾右衛門
以上

一三百石　組外　日比小兵衛
一拾五石貳人扶持　組外　山口宗久
右之通

龍光院樣御代、寛永年中、御家中分限帳ニ有之越前浪人也、

八月甲寅朔

二十八日、辛巳、正甫、日蓮宗に歸依す、

〔前田氏家乘〕　四年八月廿八日公、日蓮宗ヲ信セラレ、改宗大法寺檀トナラル、

〔參考〕

〔大法寺文書〕　○宮山市梅澤町

爲當寺領百石事令寄附之畢、旦暮勤行等、不可有怠慢之狀、仍如件、

元祿四年未九月六日　正甫印

海秀山　大法寺

日蓮宗旨ニ我等改宗付、其方義右同宗門兼々望之由、則任其意候、此存念之上者、縱何樣之義有之とも、已後ニ至迄他宗ニ歸依之義、堅有之間敷候、爲其如此ニ候、頓首、

元祿五申七月十三日　松大藏大輔

松平主膳殿　正甫花押

私儀日蓮宗旨兼々望ニ付、致改宗候樣ニ被仰、忝奉得其意、則改宗仕候、此上之義者、縱いか樣之儀御座候共、一生□□與他宗江歸依仕間敷候、尤以後迄申傳堅相守候樣ニ可仕候、爲其如此御座候、恐惶謹言、

松平主膳　利與花押

元祿五申七月十三日

進上

大藏大輔樣

態以使僧喜見院申達候、仍而此度御城主大藏大輔殿、宗門御改法花御信仰と被極候旨、誠以其寺之働、本山之威光不過之、大慶不斜候、依之爲御祝義、御城主江使僧指遣候、宜樣ニ取持尤ニ候、將亦此度之蕩効無比類、爲褒美其方へ聖號令免許、則補任色衣紫袈裟賜遣候、彌被抽精誠佛法相續可在之候、尙喜見院口上ニ申含候、恐々謹言、

九月廿九日

大法寺

本國寺

大僧都日隆花押

〔大法寺緣起〕　富山二代松平大藏大輔正甫公、法華經ヲ深ク御歸依被遊、其後、既ニ此一寺御建立被仰付ケリ、本山ハ京都大光山本國寺妙華院ナリ、

〔大法寺文書〕　○富山市梅澤町

御宗門之儀當

御代者、日蓮宗大法寺、重而之御代者、禪宗光嚴寺御宗門被遊、以後右兩寺御隔代之御宗門ニ可被遊旨、被仰出候、

右之通大法寺江、可被申渡候、以上、

戌十一月六日

佐脇數馬殿　寄合所

不破治部殿

戸田七郎兵衛殿
堀田平右衛門殿
蟹江主水殿

元禄六年癸酉（紀元二千三百五十三年）

正月（乙巳朔）

一日、乙巳、大雪、富山藩、藩士の賀禮を略せしむ、

〔前田氏家乘〕　藩士禮儀ハ大雪ノタメ、舊臘ノ下達ニテ差止メラル、

十一月（庚子朔）

一日、庚子、加賀藩、田地の賣買を許す、

〔石埼記錄〕　寛文十一年、始テ各村高免、及百姓各人所有ノ高ヲ細錄スル簿冊ヲ品々帳ト曰フ、品々帳トハ村々高免品々帳ノ略稱ナリ、（河合錄追加）天和元年正月令シテ曰ク、百姓品々帳ニ載セタル所有高ヲ子弟ニ分與セント欲スル者ハ、生前其委折ヲ錄シテ十村ニ致サシメ、死後ニ至テ之レヲ聽許ス、倘シ過當ノ分與ハ之レヲ聽サズ、（改作方舊記附錄）寛文八年改作奉行令シテ曰ク、百姓農事ヲ勉ムルモ產傾ク者、萬治三年以後、契書ヲ作リ其所有高ヲ年月ヲ限リ、他人ニ保管セシメシ者、年限滿ツレハ之レヲ本主ニ還セ、契書無キハ其高ヲ現ニ其田ヲ耕ス者ニ付セント、（上田源助舊記）元禄六年十一月朔日、改作奉行令シテ切高、取高ヲ許ス、切高トハ高ヲ買フライヒ、取高トハ之レヲ賣フライフ、

〔參考〕

〔宮永文書〕

乍恐申上候、

一氷見南下町、吉瀧屋與左衛門家屋敷、町口貳間三尺三寸、裏口貳間三尺、後へ拾六間壹尺五寸之所、代新丁銀四百目相極、高岡利屋町塗師屋次郎九郎せがれ市平と申者、永代買申候、當年より御地子米、諸役以下並寶永五年、享保二年、與左衛門借り請申、御貸米代銀共市平相濟申候、若御無沙汰仕候は、町中として相勤可申候、市平義何方ゟも構無之者之旨、高岡町肝煎方ゟ證文取、其上慥成請人取縮り仕置申候、宗旨は法花宗、高岡町長蓮寺旦那ニ而、御座候、則寺切米取置申候、自然賣主買主手前相違之義御座候者、與合次町中共越度ニ可被仰付候、賣主與左衛門義、他國へも罷越不申、氷見町ニ居住仕罷在申候、爲其賣主買主并五人組共連判仕、家屋敷賣買狀指上申所如件、

享保七年三月廿六日　賣主吉瀧屋與左衛門印
買主塗師屋市平印
五人組桶屋伊之助印
打波屋三右衛門印
京紺屋理右衛門印
柿谷屋覺右衛門印
伏見屋吉左衛門印
組合助右衛門印

鹽川安左衛門殿

右之通致吟味、組中納得仕申所、相違無御座候、以上、

町肝煎五兵衛印
同與右衛門印

鹽川安左衛門印

表書之家屋敷賣買申付候、以上、

婦負郡外輪野を開拓す、

〔前田舊記雜聞〕　婦負郡外輪野、元祿六年之頃開拓、舊草高新田概略千九百五

十八石餘、

元祿七年甲戌　紀元二千三百五十四年

是秋、富山領内米穀不熟、吉野屋慶壽、其庫及び貯藏米を獻して救恤の用に供す、

〔前田氏家乘〕　七年秋、米穀不熟民庶大ニ窮ス、吉野屋慶壽其庫及ビ藏米ヲ獻シ、救恤ノ米一萬五百石ニ及ベリ、

〔吉野屋舊記〕　元祿七年、山方前代未聞之凶荒に付、木村茂左衛門を以、飢人御救方之義御賴被遊候に付、幸所持罷在候正米一萬五百石、外に雜穀物許多所持ありしを、不殘差上申候處、殊之外御滿足之由にて、御召下御紋付御胴服御小袖等、御目通に而拜領被仰付候、右に付正米等積貯置候藏は、明き藏に相成候に付、其藏に差上申度儀願上候處、御聞濟に相成、直樣千石町に於て、地所御撰みの上御建築に相成候由、但し別段御召下タ御胴服には、以來紅裏を相用ひ、長岡御廟參其餘橋向江歩行之砌ハ、舟橋通行可致、其砌に參り懸には、右紅裏を折り返し右之方を打ち返し、戻り懸けには、左之方を折り返し、通行候はゝ目印に相成候間、御意には此方川端之亭に居合候はゝ、此處より迎之舟を差出可申との御意

にて、已に折折御迎を頂戴、舟橋より乘下り御亭へ罷上り候、種々四方山等之御對話等、蒙仰無比類御懇命蒙り奉り、其上御料理、御酒、御菓子等緩々頂戴歸宅萬々難有仕合奉存候、

元祿八年乙亥　紀元二千三百五十五年

霖雨、稻作を害す、

〔前田氏家乘〕　八年、霖雨ノ爲メ凶作ナリシカハ、二千八百石ヲ免除シ、五千石ヲ翌春ヘ延納セシメラル、

〔地方農業雜誌〕　長雨、不熟ニ付現石二千石餘免許、

元祿九年丙子　紀元二千三百五十六年

八月　乙酉朔

加賀藩主、高岡の貧民を救恤す、

〔高岡市沿革志〕　元祿九年八月、貧民七百五十八人、男二百八十九人、女三百三人、十八人、兒童百三十一人、飯米、米六拾貳石八斗貳升、此ノ代銀貳貫八拾四匁五分八厘一石平均、假ヲ賑恤ス、額三十四匁三分八厘、一日ニ男四合宛、女及ヒ兒童二合宛ノ割合、セラル、十一月、二百九十六人ニ、綿入、男女十六歳以上ノ者ニ、二百二十六枚、一枚九分六厘、十五歳以下ノ者ニ七十枚、一枚三匁六分五厘宛、此ノ代銀壹貫四百五拾九匁代銀貳百五拾五匁五分、共ニ計ルニ壹貫七百拾五匁四分六厘、ヲ給與シ又破損家屋三十二軒ヲ修繕セラル、此ノ入用銀百四拾六匁六分、

片貝川洪水、沿岸村落の損害多し、

〔下新川郡經田尋常小學校報告〕　平傳寺村ハ、嘉曆二年五月、寛文十年、延寶八年、元祿九年等大洪水ノ爲、片貝川暴流シ、隣村大山新村ハ、非常ノ慘害ヲ蒙ル、（大德寺由緒記）

九月　甲寅朔

二日、乙卯、幕府富山藩に命して、江戸增上寺の修營を扶けしむ、

〔前田氏家乘〕　九年九月二日、江戸芝增上寺營繕ノ擧ヲ扶クベキノ命アリ、翌年二月十八日ヨリ起工シ、本堂及ヒ周圍築造成リ、六月ニ至リ、又山門、山樓、衆寮、鐘樓、經堂修繕ノ命アリ、七月十一日落成ス、二十八日、大樹ヨリ時服十枚ヲ賞與セラル、掛員村隼人、銀三十枚、時服三枚、羽織一枚、木村茂左衞門、河村彌三右衞門ニ各銀二十枚、時服二枚、羽織一枚、瀧川玄蕃、野村平内ニ銀十枚、時服二枚、羽織一枚ヲ賜フ、

十一月　甲寅朔

加賀藩、孝子市右衞門を賞す、

〔石埼記錄〕

市右衛門

礪波郡正谷邑、農藤左衛門、以孝行彰、子市右衛門、亦迪父行、恪愼克孝、每出入問安否、未嘗有惰容、婢妾僮僕、遵之執事甚謹、藤左衛門、每且出寢、命市右衛門以下家衆、曰、各無恙乎、長幼皆跽兩手、着席、敬對而各就勤、夜輙藤左衛門、又命於衆曰、各宜止息、衆敬對然後咸就寢、以爲常也、或有時而亡、辭命之則衆以爲有事、不協于乃心、湯厲戒懼、無敢出言者、其祗肅恭率此類也、藤左衛門、年耆失明、自此市右衛門、愈益竭思願養、進止坐臥、常在側扶之、若有故出則命婦侍給、雖他人請代之者弗聽、嘗屬郡中饑荒、民多流亡、市右衛門、族夫失産就而仰食、市右衛門賑待四五年、因之家衰耗、而市右衛門恐傷老父之心、而不敢使知之方乎、隆冬初寒之時、則每暖室內、與婦侍坐、笑語奉其歡、一以調養氣體爲務、猶或察其有厭寒之色、乃以躬所衣之衣、衣之、蓋貧倔如此、而供命趨走、未嘗廢禮也、力田最精敏、是以雖貧不至逋稅也、其接鄰鄉也、率由田禮讓、未嘗有與人忤、其初富盛也、苟不以驕人、其終也、雖貧不敢以下志也、人擧嘆其操也、元祿九年十一月、有公命、俾郡令賜市右衛門銀若干錠、副以油絹五端、爲其父、且使父子竝受、米俸終身給之、

〔前田家譜〕（金澤）　四月四日、越中正谷村の孝子、市右衛門に金帛を與へ、二人口を給す、作道村の孝子市右衛門、針原新村の孝子紋左衛門に白銀十枚を與へ、二人口を給す、

〔參考〕

〔年代記〕　元祿十年丁丑、礪波射水郡孝子三人御褒美被下、

元祿十年丁丑（紀元二千三百五十七年）

閏二月（壬子朔）

射水郡放生津に、十村附町年寄を置く、

〔大西文書〕（射水郡新湊町）○甃

一放生津町之儀余浦與、遠、舟商賣茂多、每歲他國他領者數人入込、其上所茂廣、萬端不締ニ有之、夫々役人之申渡儀茂不致承引、人々心立惡敷、不被係企公事等所を費し申段、常々固令承知、今般其方共所爲締町年寄ニ仕度旨、御窺申上候處、願之通被仰出候、依之其方共、諸事町役等、御捨免被爲成候條、難有存盡夜無由斷可相勤候、但御用之節、向後大白石村又三郎方受指圖、諸事可示談事、

一上使并御公領御代官、且又國主御通り歟、御止宿之儀於有之ハ、急速可令注進候、尤其節者其方共、布上下着用仕、送迎可仕候、御馳走勤方之儀者、至其時御窺申上被仰出之趣可申渡事、

附、上樣御荷物舟着岸之砌ハ、跡々可爲御定之通候條、夫々可申付候、猶以不及思慮ニ儀者、大白石村又三郎と遂相談、拙子共へも可申聞候、

一向後、本町新町共不依誰々、及公事沙汰、書付等出候刻、肝煎、與合頭承屆下ニ而難決定仕儀ハ、其方共へ可達斷候條、双方之理非、嚴重ニ遂吟味、此方江可爲案內候、惣而常々不了簡者有之段、及承候者其者召寄、隨分加異見等可相宥候、其上にて不致承引、何廉於令違背ハ、拙子共へ可爲申聞候事、

一不依誰々、無故巧公事攫を乞致下持、不考所之費、無科者爲致迷惑、徒者有之時者、急度遂吟味、拙子共へ可爲申聞候、併其方共之儀ハ、肝煎、與合頭とは列茂違候條、右役人ゟ不相達儀者、罷出及承問舗候、但兩人之者共御用之筋を違、不調法等有之儀者樣子承屆、其方共存寄之通爲申聞、其上にも不致承引候者、是又拙子共ニ可爲申聞候事、

一他國他領之商賣舟致着岸、令滯留數日罷在候者、國所并宗旨可相尋置候、尤所

之者共、不作法ニ無之、無故口論抔不仕候樣、常々堅可申付事、

附り所之者共、寄合申儀ハ勿論、他國者ニ入集り、博奕抔不仕候樣、是又急度可申付候、且又不依何者難心得歟、或ハ無故遊民類一夜ニ而も、むさと宿貸不申樣ニ、堅可申付候、曾又不限晝夜、火之用心堅可く申付候、

一本町新町共、惣而常々爲奢仕形無之、第一人々家職獵かせき無油斷候樣ニ、可申渡候事、

一不依誰々、願事其外何事ニ而茂下ニ而人ニ被頼、內證をしつらひ申間舗候事、

一其方共、御用又者私用ニ而金澤或ハ御郡方へ罷出候者、兩人番々ニ罷出壹人宛、所之明不申樣ニ可致候、尤拙子共へ相尋儀輕き儀者口上書ニ而可相伺候、重き儀者壹人宛罷越、委細可爲申聞候事、

一向後、諸奉行、并拙子共御用にて、放生津町江罷出候刻、其方共送り迎一切可爲無用候、旅宿へ罷出、御用等之儀可相達候事、

一藏宿、并米見之者手前万端不縮無之樣ニ、常々堅申渡、若不沙汰之仕合於有之者、拙子共ニ可爲申聞候事、

一藏宿、其外長敷者遺言狀出シ候刻者、又三郎へ爲申聞、其者一門共召寄、肝煎、與

合頭封印を見屆、肝煎ニ預け置、右之者死去以後、一門共并役人寄合披キ候而、遺言之通夫々可申渡候、自然何とそ筋ニ違後々出入にも可成儀と存、難心得品々在之候者、曾爲遺言といふとも、麁抹ニ不相渡能々致思案、又三郎遂詮議、追而此方へも可爲申聞候、尤高方之儀者、拙子共不及貪着候事、

一毎歳、兩町中金銀米錢取遣仕算用之儀、肝煎、與合頭帳面出シ候刻者、毎年相違無之哉、樣子遂吟味、右帳面又三郎判印見屆取置可申候、尤帳面出シ候節ハ、町之内五人組ゟ壹人宛召寄算用指引相違無之哉、承置可申候事、

右之條々、本町新町共、常々堅可申付候、勿論不依何事、其方共へ肝煎、與合頭方ゟ可相達候條、又三郎と遂詮議、難落着仕儀者、拙子共ニ可爲申聞候、惣而御領國中、御郡方、十村、附町年寄之例無之候得共、所爲縮其方共願上被仰付候得者、大切之儀ニ候條、疎意存間舗候、然上者御用之節、聊茂泥不申、夫々急度申付、人々善惡之儀、無依怙贔負可顯者也、

元祿十丁丑年
閏二月十九日

古屋六丞 花押
岡田助七郎 花押

放生津町年寄大西彌兵衛
同　木屋彌次兵衛

六月 己酉 朔

高岡町に封座を置く、

〔高岡市沿革志〕 元祿十年六月、封座ヲ置カレ、八月七日金見銀座ノ者當所ニ來ル、是レ昨年十二月十八日、町年寄等今石動、魚津兩町ト同シク、封座ヲ置カレシコトヲ出願セシニ由レリ、

元祿十一年戊寅 紀元二千三百五十八年

九月 壬申 朔

六日、丁丑、江戸淺草の富山藩邸燒失す、

〔前田氏家乘〕 九月六日、江戸淺草ノ藩邸燒失ス、

二十二日僧日脫寂す、

〔氷見郡宇波村小學校報告〕 日脫上人ハ、越中宇波ノ人ナリ、姓ハ逸見、其先ヲ

板屋ト云フ、幼名ハ久太郎、字ハ空雅ト稱ス、上人ノ父ハ板屋又兵衛ニシテ、元加賀藩臣ナリキ、然ルニ故アリテ、宇波ニ來リテ荻野家ニ據ル、板屋又兵衛ニハ、一男一女アリ、男ハ卽チ久太郎ナリ、又兵衛ハ深ク日蓮宗ヲ信仰ス、久太郎又家甚タ貧窮ナリケレバ、父ニ乞フテ僧トナランガ爲メ金澤ニ赴キ、本是寺ノ住職本是院日理上人ニ師事ス、ソレヨリシテ延寶年間、京師ニ上リ、立本寺ニ入リテ、仝寺第廿三世ヲ繼キ、一圓院日脫師ト稱ス、然ルニ遂ニ累進シテ、延寶七己未甲州久遠寺身延山ニ入山シ、同寺第三十一世ヲ繼續シ、在住廿ケ年、同寺同宗ノ爲メニ盡瘁スルトコロ甚ダ大ナリト云フ、上人ノ高德ハ以テ元祿六癸酉五月六日、勅賜紫參內ス、一圓院賜紫ノ優渥ナル聖恩ニ感泣シ、朝拜口號ノ韻アリ、「辱著紫衣朝紫宸、可憐今日聖恩新、佛乘帝道和融處、虔祝萬年末法春」ト、元祿十一戊寅九月廿二日、七十三歳ヲ以テ、江城瑞輪寺ニ於テ遷化セラル、

是歳、正甫、吉野屋慶壽に命して、富山城東の稻荷村に蓮台寺を創立せしむ、

〔前田氏家乘〕　此ノ年、富山城東ノ稻荷町ニ、荒蕪ノ地多キヲ以テ人口ヲ移シ、市街連垣ノ巷トナサン事ヲ謀ラレシモ、事容易ニ成ラサルヲ以テ、吉野慶壽ニ內命ヲ傳ヘ、一寺ヲ建設セシム、蓮台寺是也、

元祿十二年己卯　紀元二千三百五十九年　三月庚午朔

加賀藩、人身賣買を嚴禁し、僕婢の年季制限を解く、

〔御高札寫帳〕

定

一人賣買彌堅令禁止之、召仕之下人、男女共に、年季十ケ年を限るといへとも、向後年季之限無之譜代に召抱とも、可爲相對次第之間、可存其旨者也、仍如件、

元祿十二年三月日　奉行

加賀藩、高岡の戶口を調査す、

〔高岡市沿革志〕　元祿十二年、三月ノ調査ニ據ルニ、家高二千六百十軒、外ニ棚借十八軒、人數一萬三千八十一人、卽チ男六千三百八十四人、內下男五百二十二人、女六千七百一人、內下女七百三十七人ナリ、

九月丙寅朔

加賀藩、領内の石高を幕府へ上申す、

〔三州志〕本封叙次考

元祿十二年閏九月六日、被書上分限帳如左、

加賀、能登、越中、近江之内、　本國尾張　生國武藏

百二萬五千石餘　筑前守子　宰相松平加賀守　卯五十七歳　居城加州金澤

元祿十三年庚辰　紀元二千三百六十年　朔庚申

十月

二十四日、癸未、加賀藩、礪波郡孝子七三郎を賞す、

〔石埼記錄〕

七三郎者、礪波郡興法寺邑、農長右衛門之子也、天資孝友、父爲里正、弟彦三郎、放恣驕横、貪惏亡狀、好爲險險凶慝、而七三郎、以友愛遇之、能誨而不倦、彦三郎、故罔有悛心、七出夜慢遊鄕曲間、亦用私斗、竊貪機利、事稍稍彰聞、而鄕人、咸意其父之所爲、乃捕而送致于小杉之衙、因下吏榜笞窮治、長右衛門固以事不出乎己、不能置對焉、迺議爲長右衛門、辭不明遂囚獄、七三郎聞之、驚駭悲歎、失措直趨抵于小杉、哭於府上、

自告曰、私斗之事我爲之矣、具道本根、所以長右衛門不知狀、於是長右衛門、得釋而歸、七三郎因下獄、吏連累訊鞫、七三郎他亡所言、願受行姦罪、速伏重誅、人之郡邑往往傳道私斗之事、實彦三郎之所爲、而七三郎悼父寃、飾誣詞以身代之、甚可憫恤也、於是里正、伍長等以是告于鄕宰、乃遣吏本邑、踪跡驗問、僉曰七三郎、資性至孝、亦克友其弟、志行貞正、爲一鄕所信矣、決非爲若濫惡者矣、司吏請奏置之、而以七三郎、始任其罪而不辭、無辭于原之、於是鄕宰具狀、達于政府、以請裁旨、獄官以實聞、乃速有特命、出七三郎於獄、賜十口糧及黃金十兩、大賞其孝友、彦三郎、亦以兄故見潤略、時元祿十三年十月也、

〔前田金澤家譜〕

十月廿四日、越中興法寺村の孝子、七三郎に金を與へ、二人口を給す、七三郎の父罪あり獄に繫かる、七三郎吏に詣り自ら劾し曰、民の父與り知る所なし、罪を犯す者乃ち民なり、請ふ民を繫けと、吏再三之を詰難するに、其言一の如し、是に於て又た之を獄に繫く、已にして其嬶又た出訴し曰、罪を犯す者吾か夫に非す、夫の弟某なりと、乃ち證するに某の手書を以てす、吏便ち某を執へ、之を鞫治するに、果して罪に伏す、吏乃ち怪んで七三郎を詰る、七三郎乃ち語るに情を以して曰、民の父年老ゆ況や又た時亟寒に向ふ、民老父をして、是の時一

日も牢獄に在らしむるに忍ひす、然り亦弟を訴ふ可らす、故に自ら罪を冒し、敢て欺詐を行ふ、乃ち罔上の罪の如き固より辭する所に非る也と、吏之を綱紀に告く、綱紀大ひに其孝義に篤きを感す、乃ち父子の罪を赦し、賞するに之を以てし、其孝養を遂けしむと云、

〔年代記〕　元祿十三年丁丑、礪波郡興法寺村孝子に御扶持被下、

元祿十四年辛巳　紀元二千三百六十一年

八月　朔丙辰

十七日、壬申、大風雨、常願寺、神通二川汎濫し、民屋稻田の被害多し、

〔前田氏家乘〕　秋大風雨アリ、諸川暴漲ス、就中常願寺川、馬瀨口村ノ堤ヲ破壞シ、稻田七百五十餘石ヲ損シ、熊野川ニ浸入ス、八月十七十八兩日、又馬瀨口村堤ヲ破リ、鹿川ヘ注入シ、富山ヘ浸水シテ寺院ヲ流失ス、田面ノ害セラレシモノ、七千四百三十九石、破壞ノ堤ハ一萬七百三十五間ト云フ、水損七百五十石、免除三百石余ヲ永引損米トス、

〔上新川郡大庄尋常小學校報告〕　元祿十四年八月、大洪水ニテ、常願寺川兩岸ハ堤塘數十ケ所決潰シ、特ニ馬瀨口前甚タシク、其害屢富山市ニ及ホシタルヲ以テ、富山藩主ニ於テ、字草履田川除長サ二百四間、字源左衞門川除長サ二百八十間、大石ヲ以テ堅ク修築セラル、

富山藩醫、杏一洞歿す、

〔日本教育史資料〕　ニ　杏一洞、故（立山長崎學校所立地名也）祭酒南部艸壽之門人也、洞善醫、延寶中以醫干越菅侯、拜二百石、是時南部先生辭職去京、菅侯方好儒術、引學術材藝之士、洞進其師艸壽、菅侯使迎艸壽、爲師掌庠序之事、嗣後井澤養榮之徒相續而至、皆自杏氏始、洞在崎學林道榮書有能名、乃著手帖二本、題曰杏林堂法帖、行于世、杏其先華人ノ由、本氏村田、（改氏之趣書在船中之記）輸心子號橘軒、後改一洞、師南部艸壽、以醫延寶八庚申歲五十八扶持ヲ賜ル、乘物料金十兩、且兩親ヘ二十人扶持被下召抱、元祿十四辛巳ノ歲八月卒ス、艸壽ノ門人トナリ、且學林堂榮書等ノ事載崎陽先民傳、（但先民傳ニ二百石ヲ賜フトアリ、五十口ノ米「二百石」トアルナラン、○一洞ノ書題侯ハ先民傳ノ表ニ依テ也）

十月　朔甲寅

六日、癸未、江戸富山藩邸上棟式を行ふ、

〔前田氏家乘〕　九月、江戸淺草ノ藩邸、建築ノ地祭執行ヲ常照院ニ托シ、公ヨリ銀二枚ヲ遣ハサル、十月六日、棟上ヲ祝シ、其後落成ス、

是冬、富山藩、銀貨を發行し領内に使用せしむ、

〔前田氏家乘〕　冬、金融閉塞シ、上下甚タ困難スルヲ以テ、銀貨ヲ造リ、封内ヘ頒布セラル、

〔越中舊事記〕　元祿十五年秋ヨリ、御領分札銀通用被仰付、京都ヨリ野早ト申者札座ニ罷越候事、

〔參考〕

〔富山市沿革志〕　元祿十五年、封内相銀通用ヲ命セラレ、將(野カ)早ナル者、京都ヨリ富山札座ニ來レリ、

是歲、加賀藩、加越能三國の地圖及郷帳を幕府に上つる、

〔租稅志〕　元祿十四年　月、加越能三國ノ地圖ヲ幕府ニ上ツリ、副フルニ郷帳ヲ以テセラル、其載スル所ノ高數左表ノ如シ、

國名	郡		石數	領主
加	能美郡ノ内尾添荒谷二村	高	一七一、九八〇石	幕府
	河北	石川	三六八、〇七六、〇六〇	松雲侯
	能美	高		
賀	江沼	高	六五、七三一、五九〇石	大聖寺侯
	能美ノ内	高	四三〇二、一七〇〇	
		計	四三八、二八一、七七〇〇	
能	羽咋鹿島鳳至珠洲ノ内	高	一三、六三七、七二五四	幕府
登	羽咋鹿島鳳至珠洲	高	二二五、五七一、〇七〇〇	松雲侯
		計	二三九、二〇八、七九五四	
越	新川射水婦波	高	五〇七、四二四、五〇〇〇	松雲侯
中	婦負	高	六四、六四八、〇〇〇〇	富山侯
	新川ノ内	高	三八、九二七、六〇〇〇	
		計	六一一、〇〇〇、一〇〇〇	

是歲新田高ヲ錄上セズ（以上天保五年郷村高帳御指出留帳）

（按）參議公年表葛卷昌興日記、加越能繪圖覺書ニ曰ク、能州幕府領、初メ土方河内守雄次、其子伊賀守雄隆、累世能登一萬三千余石ヲ食ス、貞享元年、伊賀守罪アリ幕府其封ヲ收メシナリ、

右表中載セタル、各領主ノ所有高ヲ表ニ作リ、以テ觀覽ニ便ス、

	數	領主
高	一三、八〇九、七〇五四（石合）	幕府
	一一〇一、〇七一、六三〇〇	松雲侯
	一〇三、五七五、六〇〇〇	富山侯
	七〇、〇五三、三九〇〇	大聖寺侯
總計	一二八八、五一〇、三二五四	

元祿十五年壬午（紀元二千三百六十二年）

四月（壬子朔）

二十八日、己卯、吉野屋慶壽死す、

〔吉野屋舊記〕　慶壽儀、元祿十五午年春以來病氣取結ヒ候ニ付、此段達御內聽候處、病體之程甚以テ無御心許被爲思召、御醫者中被下置候得共、最早存命之程茂無覺束、依而御懇ニ御意ヲ以テ、人參代等被下置、外ニ御藥取江被仰出、種々御藥頂戴被仰付候得共、終ニ養生不相叶、四月二十八日、病死仕候ニ付、此段達御內聽候處、甚以テ御殘念被爲思召、種々御意ヲ以テ、香奠銀子被下置候、

○中略

有坂、本姓藤原ノ末流ニテ、後石坂ト相名乘リ、祖先ヨリ六七代之由、七代名石坂長太吉次ト云フ、此人足利家持軍（將カ）ニ代々仕ヘテ、就中建武之頃、度々之戰功ニヨリ、江州ニ於テ城主格被命、延文元年二代目石坂平吉祐吉十一月病死ス、義輝公御代ニ至リ侯臣被相愛付、度々諫言申上候處、思召ニ不應、依而御暇ヲ相願、大和國吉野ニ閑居仕、其後永祿年中、富山ニ居住、其前天正年中ニハ、越中國守山江罷越、又文祿年中ニハ越中國高岡古器町江罷越、少々農事ニ從事仕、其砌吉野屋ト更メ、名ヲモ宗右衞門ト相改申候、慶長戊四年三月病死仕候、當縣開發村ニ納骨仕候、依而此宗右衞門ヲ中祖ト相唱申候、又其二代目宗右衞門義、追々御田地開拓仕、高岡ニテ御調之砌、吉野屋六右衞門ト改名仕、縣御帳ニ書上申候、尤此吉野屋ト仕候越ハ、往昔吉野ニ閑居罷在候ニ付、此緣ヲ以テ相名乘申上候、其後ハ御頭方、十村役等、相勤申候代モ御座候、尤高岡ニ罷在候內ニハ、金澤御代樣之內御放慮之砌御旅泊并御小休等度々被仰付、獻上物等仕候處、革之御胴服并ニ御紺柄之鳥類、又御目錄ヲ以テ銀子等拜領度々仕候、右拜領物并ニ御印之物、今ニ所

持仕罷在候、

○中略

慶壽病死之砌、在命中格別御懇命ヲ奉蒙、餘人トハ違、御家來モ同事ニ付、遺物御請取可被遊旨被仰渡、其砌御刀劔御召之由、乍陰奉承知候ニ付、右御品物代トシテ、金四百七十兩差上候所、則小塚將監樅御請取中、御折紙頂戴仕居候、

元祿中京都ニ御慶事（原書ニ時帝東山帝之御即位ノ事ニモヤアルナラン）有之ニ付、日本國中ニ富豪ニ名ヲ得シモノ、國主ヨリ撰出シ、上京可爲致樅、從江戸被仰渡候所、左之通リ、

若狹國嶮河浦　宗　貞

越前國　金屋兵四郎

越中國富山　吉野屋慶壽

右三名上京ニ相成候、尤モ慶壽儀ハ、打物拜領仕、道中諸事頭役ノ格ニ相備罷出、在京中万事首尾能ク御用相濟罷歸候事、但シ右人物ハ、日本國中ニ而豪富之名ヲ得シ五十七名之由、尤モ此人物共ハ何時ニ不干、金壹万兩御用ニ相立候モノ御取調之由、

〔前田氏家乘〕　公ノ時代ニ、吉野屋慶壽トイフ者アリ、豪富ヲ以テ鳴ル、利次公分封ノ際、特ニ富山ニ移居ヲ命セラレシ者ナルカ、天和元年、正甫公、高田城受取ノ時命ニ應シテ、金壹萬兩ヲ納メ、又旗下ノ士ノ困窮ヲ救フタメ、正甫公ノ需ニ依リ、三千兩ヲ奉セシ事アリ、其爲祿若干ヲ賜ハリ、藩士ニ列セン事ヲ諭示サレシモ、辭シテ受ケサリケレハ、諸賦課ヲ免シ、田地十五石高ヲ賜ヒ、公ニ親近シテ園碁ノ席、又ハ慶事ノ宴會ニ陪スル而已ナラス、君前ト雖モ頭巾ノ着用ヲ許サレ、又城中ニ杖ヲ携フル事ヲ許サル、慶壽又江戸邸延燒ノ折、築造ノ費ヲ獻シ、或ハ救恤ノ爲メ、米金ヲ獻シテ惜ム所ナカリキ、

五月（壬午朔）

十二日（癸巳）新川郡魚津火あり

〔富田覺書〕　元祿十五年午五月十二日、燒失家、辰上刻ニ出火午刻終、

一四百五拾三軒　町方本家

一三拾軒　同地借貸家

一百弐拾軒　獵師方家

〆六百三軒

外拾軒　寺社山伏
貳軒　御部方寺社
貳拾五軒　御侍方
內壹軒　御奉行所
拾四軒　足輕衆
都合六百四拾軒
外四拾　土藏幷藏
五拾　納屋藏
五拾七軒　町方殘家四十五軒下口拾貳軒樋向上口
百拾壹軒　獵師同百軒下獵師拾壹軒樋向
六ヶ寺　西願寺　桃原寺　常德寺　等覺寺　法善寺　專光寺

魚津肝煎
宗右衛門印

元祿十五年八月廿一日

御算用場

右之趣、御貸米願ニ金澤表江相詰罷在候內、御場ゟ御尋ニ付、被召出、御密談所ニ而御指圖ヲ以テ調上申候、

九月己酉朔

十六日、甲子、光禪寺義光寂す、

〈續日本高僧傳〉八　越中光禪寺沙門義光傳

釋義光、字月澗、俗姓白子氏、越中人也、母河合氏、夢異僧來投宿而孕、歷十二月、產焉骨相清奇、父母鍾愛、一日父召三子、謂曰、阿誰出家、當度、父母、光應聲曰、我當出家、父喜而携之、投寶光寺、爲童、行一日寺主告其父曰、此兒聰敏過人、他時以寺付之、光在傍聞之、不喜、潛自思惟、爲僧、應賞、未無上菩提、奚爲、匏繫於此、同流俗耶、竊出還鄉、爾後屢招、不復往焉、年已十三、從光禪普門和尚、薙染、依鐵心和尚、于蔭涼、恒受訓誨矣、天和元年、謁月舟和尚、便問百尺竿頭如何進步、舟曰、坐臥經行、光自是決意參究、脇不治席、翌年往加州寫大乘、卍山會下、偶聞僧舉趙州狗子話、忽然證契、作偈曰、徹底無兩重關鎖、一時開、南方五十有三處、笑殺善財空去來、徑扣丈室呈所解、山然之去、上葉山、謁獨湛、尋見龍門、盤珪東阜、心越未幾、首衆、于永福、夏竟、再參卍山、

山問曰、青原垂一足、石頭禮三拜、爾作麼生領會、光便禮拜、山曰何不道取一句、光曰唯有此時最吉祥、山曰旦坐喫茶、光珍重而出、山送偈曰、唯有此時最吉祥、百千妙要不如常、喫茶珍重禮三拜、二株嫩桂久昌昌、遂付衣法、貞享二年春住能登豐財院、後徙越中光禪、終冬上堂曰、一冬一夏安居事、佛佛要機祖、祖心百億劫波、使得久朔風、依舊攪寒林、臘八上堂曰、如鶴如龍、瘦又活、出山消息起風雷、明星一見不容髮、雪裡梅花朶朶開、光曾與性源發禪、同訪悅巖於山崎、三人共坐紫雲窟、光面壁困睡、二人亦坐忘之間、一異僧在光後、禮三拜、顧性源指光曰、汝知此人耶、此是五祖戒禪師再來也、言訖化去、如夢非夢、二人俱爲光說之、光呵曰、莫謔語、光平日操履嚴密、禪餘奮志、瀝於指頭、鮮血書大般若經三百卷、佐渡椙信某、以直指菴招請、居未幾、因病歸、光禪撞鐘集衆、慇懃囑後事、援筆盡唯有今日最吉祥七字、澡浴更衣、恬然而逝、元祿十五年九月十六日也、世壽五十、法歲三十九、

贊曰、林光二師、臨終愉快、不異平日、是無他術、念念在定之驗而已、可觀其所長養矣、

九月（己酉朔）

正甫、藩士の子弟に命して、植物及び礦物を蒐集せしむ、

〔前田氏家乘〕九月藩士嫡子へ、領内ノ山野ヘ、五調タメシヲ命セラレ、珍草奇木礦石類アレバ、其處ニ標ヲ付シ上申セシメラル、

是秋、富山領内水害あり、米穀實らず、

〔前田氏家乘〕此ノ秋及ヒ前年水害アリテ、貢米二百石餘ヲ免除セラル、

十一月（戊申朔）

二十九日、（丙子）江戸富山藩邸復燒失す、

〔前田氏家乘〕十一月二十九日、江戸邸再ビ燒失ス

〔參考〕

〔越中舊事記〕元祿十六年十一月廿九日、江戸御屋形類燒、（○中略）寶永四年春、江戸御屋形造作出來

是歲、正甫、磯部村に遊園を築造し、富士山及び琵琶湖を模す、

〔前田氏家乘〕公、又曾テ城外ニ遊觀ノ地ヲトセラル、公ハ元近藤善右衞門ノ邸ニ降誕セラレシカ、善右衞門ハ當時磯部村ニ住シ、同村ノ鎭守ハ鹿島社ナリケレバ、公深ク之レヲ尊敬セラレ、爲ニ磯部村ヨリ諏訪川原ヲ一寰區トシ、之レヲ御用屋敷トシテ、其區內ニ鹿島神祠ヲ建築シ、遊觀場ヲ設ケ場中ニ富士峰ヲ摸シ琵琶湖ヲ擬シ、且ツ湖ノ周圍ニハ、景ヲ象ル茶亭月閣アリ、櫻樹楓林ヲ植ヘ

テ、四時ノ風光備ハラザルナク、南岳西邸皆其景ヲ助ク、此地ハ神通川ノ東岸ニ位スルヲ以テ、一ハ堤防ノ豫防ニ注意サレシナリト云フ、

〔前田舊記雜聞〕　正市公、其後御入部之處、兼而鹿島神地之邊ハ、御生育之土地にして、東西の面詳細御案内之事故、西には翠黛之吳羽嶺を帶、中頃ニハ神通之流有之、此處は近傍無類之勝地なるが故、築山絶景之實況を新築被遊、春夏之眺望不啻思召、御時節多少之御入費も相懸り候得共、御城内ゟ白壁御門、助作御門より七間町を抜け、直と磯部之方へ御通り抜けにて、其往來には所々、粗、東海道之名にし負ふ名所を寫し、幷磯部地方には築山御造作に相成上之、東西神通村之點より、巨石等御曳き寄せ、之を石山と申す、低地之方には杜若菖蒲之名花を植付られ、築山には四時花不斷樣之御好みにて、梅、櫻、桃、柳、李、梨花、二暇之山下には、茶木山、（鶯鳴山卯ノ花山）吹、紅葉、檀、其餘名花種々被植込、此山の惣名を富士山とぞ被唱けり、尤此山近傍には、所々に御茶屋、或は御臺所體之御休憩所も御出來也、又因に云、此地之惣名をは御用屋敷と相唱、大富士山之繪圖面も有之し也、既に彼地に御臺所之邸建物の跡、御拂下けなるか頂戴なるか、現今江本仁右衛門之家屋は、其際之御臺所なるよしなりと傳ふ、此山は善美を盡して御出來之由併し此築山に付、郡方人夫數多日々出頭せしとき、時々困難之ものも有之しや、或人の狂歌に、

磯べにと誰がいひそめしおならぞや
けふもぶら〳〵　明日もぶら〳〵

樣のいろ〳〵　地口、狂歌も有之よし、

右築山御建築に付ては、又說々あり、一には或時柳營にて、西國邊或大諸侯御物語り之節に、駿州富士山をは君が領地にて見へ候哉と、被相尋所、御答には見え申候と、被仰候得は、夫ならば重て參府之節、北國街道通行可致候と、被申方有之よしゆへ、不得止翌年御歸城之上、右山築かれ、通り町ゟ西方に見ゆる樣に、富士の形の山を被設置とも申とあり、又一には前條利次公殿中におゐて、御頓病之前、山論ニ付白髮頭に兜を頂くと仰につき、幕府老若も甚不安心なるにや、右甲州之罪科有りし太田十左衛門等、內密間者として御國表へ御預り成しとも申傳へ、爰に於て、其萠し無之印に富士山を御築きにて、密計無之證據として御戲れの模樣を御示しとかもいひ傳へ、何れの說是なるや、後世の附會也へし、

〔富山市沿革志〕　正市公、嘗ッテ鹿島明神ヲ尊崇セラル、因リテ磯部村地內（今ノ鹿島）

町、明治三年以前ハ、御用屋敷ト稱シ、ヌリキ、ニ神祠ヲ建テ、游覽場ヲ設ケ其ノ中ニ富士山ヲ摸シ琵琶湖ニ擬シ、湖ノ周圍ニ近江八景ヲ象ラル、今（明治二十七年）僅カニ富士山全形三ルヲ見ルノミ、分一ヲ餘シ、又大石ノ水田中ニ埋沒セシニ、其ノ後之ヲ廢止セラレタリ、茶亭アリ、月閣アリ、且櫻樹楓林アリテ、四時ノ風景備ハラサル所ナカリ

是歳、魚津火あり、

〈年代記〉　越中魚津町、家數七百七拾軒斗之内、六百三軒燒失、

加賀藩、村名文字改正を達す、

〈年代記〉　元祿十五年壬午公儀へ御上ニ付、村名文字ステ假名御改、一統御郡觸出る、

元祿十六年癸未　紀元二千三百六十三年　朔丙午

三月

二十七日、壬申、加賀藩、領内の撿地に着手す、

〈高岡市沿革志〉　元祿十六年三月二十七日ヨリ、撿地ニ着手ス、

八月　朔甲戌

十九日、壬辰、暴風、富山藩領内家屋の壞頽するもの多し、

〈内山御用留牒〉　元祿十六年

一百拾九軒　當ル十九日之大風にて、潰れ家大小、此外半潰に相成申候家、過分に御座候、

一弐拾本　御福村より花木村往還、並木吹きたをし申候、

右之通、當月十九日之大風にて、御郡在々潰家、并往還通り並木吹たをし相知申分に御座候、此外山形漆の木、并諸木且又百姓垣根宮林等、過分に吹たをし吹折れ候由に御座候得共、遠方之義未だ慥成義相知れ不申候、田畠とも過分に風當り之由、百姓共相斷候へとも、先つ取上け不申押付置申候、追而遂撿義可申上候、以上、

八月廿四日　御寄合所　安井八郎左衛門　中村志广丞

十月　朔癸酉

九日、辛巳、俳僧浪花寂す、

〔名人忌辰錄〕上、井波浪花　應々山人　越中井波瑞泉寺の住職にして、塵心院と號す、向井去來の門に入て、俳諧を能くす、元祿十六年未十月九日寂す、歳三十二、同寺に葬る、

〔越中史略〕浪花上人は、別に應々山人、休々山人、自遣堂の號あり、越中礪波郡井波瑞泉寺の住職にして、實は門主一如（大谷派十四世）の季子なり、德行頗る高く、兼ねて俳諧を善くす、嘗て京にあり、去來の紹介を得て、嵯峨落柿舍にて、芭蕉庵桃青の門に入り、遂に俳道の奥義を極む、東山天皇（第百十二代）元祿十六年十月九日歿す、年三十二、應眞院と謚す、著す所名月集、有磯海、礪波山玉まつり、そこの花、續有磯海霜の光、白扇集本朝文鑑、月令博物筌等數十種あり、

〔瑞泉寺記錄帳〕

㊥　宣良

㊤　常照

家如上人之七男、常如上人之蓮枝、童名政丸、七歳ニテ、御入院應眞院殿、元祿十六年十月九日、三十三歳御往生、母廣橋大納言兼賢卿ノ御女、號順善院殿、御内室ハ津田玄蕃頭元祿十四年三月十八日、二十四歳卒曉了院知春尼ト號、

元祿中

紀元二千三百四十年より同二千三百六十年まで、

新川郡石田村に、藩倉を設く、

〔下新川郡石田尋常小學校報告〕石田村大字濱石田村ニ、舊藩倉地アリ、東西三十一間、南北七十三間ナリ、元祿年間ノ創設ニシテ、長拾五間幅四間ノモノ三棟、長拾間幅四間ノモノ二棟、計五棟、拾五戸前アリシト、此地ニ備荒倉一棟アリ、是石田港ハ縣下有數ノ良港ニシテ、船舶ノ碇泊等便益多キヲ以テ、藩主特ニ此地ヲ撰定セシモノナリト云フ、

正甫、山田温泉に入浴す、

〔八尾鄕土史談〕山田温泉ハ、婦負郡山田湯村にあり、山田川其傍らを流れ、山水明媚にして風景絶佳なり、元祿年中藩主正甫（宮山藩第二代）温泉に浴せし時、山田八勝の號を下せり、温泉亭、山田川藥王堂、花久塚、方便水、虹霓瀧、鐘ヶ窪、蝙蝠屈、之れなり、天保年中、藩主利保（宮山藩第十代）入湯の時、短冊あり曰く、

山田村湯の上の山に社あり、昔猿のきたりて、此川水を朽木のなかくぼみたるをもて汲みあけ、身のいたみにつけ居たるを人の見て、それより湯あることを知れりとなんいひつたふ、その朽木は社の鳥居の額となりて、今もあり其社にまうでゝ、

汲上し朽木も今に殘りありて年にましらの山田川かな

また

山田川湯むらのさくら咲にけりぬるむ流れにかげをうつして

泉質鹽類を含み、溫度は攝氏三十九度、諸病に効あるを以て四時浴客絶ゆる時なし、

富山縣衛生第一次年報（明治三十二年）

湧出地名　婦負郡山田村大字湯村　鑛泉稱呼　山田溫泉　溫冷別　溫

泉質　鹽類泉　溫度三十九度　發見年月　文武天皇の時代

富山藩、刑場の位置を變更す、

〔越中觀蹟志〕　仕置場　龍光院樣御代始め、正市院樣御代始迄、赤江川邊今の蓮盛寺の敷地是なり、元祿年間、町並に被仰付、依而大泉口江被移、其後寶永年間安養坊峠の麓江被移、（御仕置被仰付候罪人共之名等ハ舊記ニ委シ、）

〔參考〕

〔高府安政錄〕　寛文十一年亥三月、目安場移轉跡地內、高岡白銀後町ニ於テ、牢舍建築地元步數三百拾步、牢舍三間半ニ六間、二重柵前後園塀二十九間、塀外火除地七十五步、享保十一年ヨリ牢番人一名園內ニ居住、建物三間四方、

加賀藩、封內各郡の凶作を幕府に具狀す、

〔租稅志〕　寛永元年、改作奉行封內各郡風水旱蝗ノ爲メニ、毛ヲ損セシ田高若干石ヲ錄シ算用場ニ致ス、算用場之レヲ公ニ以聞ス、乃聞番ヲシテ之レヲ幕府ニ具狀セシメラル、此レヲ損毛屆ト曰フ、爾後每歲例ト爲ス、（河合錄）元祿五年ハ四十萬石餘（寺卷昌興日記）十四年ハ四十五萬二千石餘（改作雜錄）十八年（○誤カ）六十八萬九千五百石餘ノ損毛ヲ幕府ニ具狀セラル、是凶歉ノ甚シキ者ナリ、（御年表改作雜錄）

寶永元年甲申（紀元二千三百六十四年）

十一月（丁酉朔）

二十二日（戊午）、大地震、

〔高安覺書〕　寶永元年十一月二十二日丑刻、大じしん、

正甫、豐田流の軍貝師澤井忠勝を聘す、

〔前田氏家乘〕　寶永元年正甫公、澤井忠勝ヲ召シ、豐田流の軍貝師トセラル、

寶永二年乙酉（紀元二千三百六十五年）

七月（壬戌朔）

十三日、甲戌、新川郡布瀨村豐助、藩主の命を奉し鑛山技術師を求めんため、西國に赴く、

〔高安覺書〕　寶永二年七月九日從江戸豐助先租此跡、野積谷奥江鑛山仕候由、いさい豐助へ詮議仕、鐵山仕立候樣にと、御奉行所へ被仰遣、依之西國江、山師やとひに參候樣被仰渡、則七月十三日に西國へ相立申候、

〔上新川郡堀川尋常高等小學校報告〕　布瀨村高安定信ハ、地方ノ豪家ニシテ、前田氏越中ヲ領スルニ及ビ、其家代々十村役ヲ勤メ、且ツ藩主ノ非常避難所タリ、定信通稱ヲ豐助トイヒ、深ク藩侯前田(正甫公)ニ信ゼラル、正甫婦負郡野積谷ニ於テ鑛山ヲ發見シ、大ニ喜ビ、當時ノ財政緩和策トシテ、鑛山ノ事業ヲ興サントシ、定信ヲ召シテ、採鑛冶金ノ術ヲ探ランコトヲ謀ル、定信之ヲ快諾ス、然ルニ當時此術外人ヲシテ容易ニ窺フヲ許サズ、寶永二年七月十三日、定信富山ヲ出テ關西地方ニ赴キ大ニ得ル所アリ、同年九月十一日、一旦歸宅ノ上、更ニ翌三年正月八日、丹波、但馬、因幡、播磨、美作諸國ニ赴キ、其技ニ熟練ノモノ二十六名ヲ雇ヒ入、同三月二十一日歸國セリ、此間ノ苦心實ニ慘憺タルモノアリ、然ルニ正甫幾モナク死シテ、定信ノ苦心遂ニ用ユルニ由ナキニ至リタルハ、實ニ惜ムヘキコトナリトス(高安定信手記書類並ニ高安家家譜ニヨル)

〔參考〕

〔高安覺書〕　寛文八年秋野積谷鐵山御留、凡此時ノ損失白銀貳拾貫目斗ノ由今以越中一國ノ鍛冶方鐵代證文有、

寶永三年丙戌　紀元二千三百六十六年

是春、婦負郡古澤村、用水を通して水田を開く、

〔前田氏家乘〕　三年春、婦負郡古澤村用水ヲ通ジ、千八百三十石ノ水田ヲ開拓ス、

四月　戊子朔

十九日、丙午、富山藩主前田正甫薨す、子利興嗣く、

〔文露叢〕　四月十九日松平大藏大輔利重卒、六月七日、松平長門守利興家督被仰付、

〔憲廟實錄〕　六月六日、松平長門守利興、父故大藏大輔正甫か遺領十萬石を相續し、越中國富山城主となる、

〔前田宮山家譜〕　正甫、小字掃部、利次の第二子、母柴田氏、臣以信ノ妹、慶安二年八月二